

秋 田 市

秋田臨空港新都市開発関係 埋蔵文化財発掘調査報告書

坂ノ上E遺跡
湯ノ沢A遺跡
湯ノ沢C遺跡
湯ノ沢E遺跡
湯ノ沢F遺跡
湯ノ沢H遺跡
野形遺跡

1984. 3 秋田市教育委員会

序

秋田臨空港新都市開発事業に係る御所野台地部の埋蔵文化財につきましては、昭和56年度（下堤D遺跡）から対処し、昭和57年度は5ヶ所、本年度は7ヶ所の遺跡発掘調査を実施いたしました。今回の調査においては、縄文時代中期の集落跡、県内では二つめの弥生時代の住居跡、それに平安時代の墓（21基）などの検出があり、学問的にも重要な成果をあげました。また、貴重な遺物も数多く出土しております。

調査の実施にあたっては県、関係機関の指導援助をはじめ、地元関係者、土地所有者等多くの方々の積極的なご協力をいただき深く感謝申しあげる次第です。

本報告書が文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用されれば幸甚に存じます。

昭和59年3月

秋田市教育委員会

教育長 高 泉 宏 作

例　　言

1. 本報告書は、秋田市四ヶ小屋小阿地字板ノ上（板ノ上E遺跡）、四ヶ小屋末戸松本字湯ノ沢（湯ノ沢A遺跡・湯ノ沢C遺跡・湯ノ沢E遺跡・湯ノ沢F遺跡・湯ノ沢H遺跡）、上北手御所野字野形（野形遺跡）に所在する各遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書は、調査員及び調査補佐員の協力を得て菅原俊行が編集したものである。
3. 本報告書の執筆は、坂ノ上E遺跡—菅原俊行、安田忠市、湯ノ沢A・C遺跡—西谷　隆、湯ノ沢E・F・H遺跡、野形遺跡—石鶴國誠一が担当し、菅原が補筆した。前記以外は菅原が担当した。
4. 発掘調査、整理作業の過程で下記の各氏より指導、助言を賜った。
秋元信夫、穴沢義功、阿部義平、岩見誠夫、大野憲司、岡田茂弘、金子拓男、桑原滋郎、小林克、高橋忠彦、富樫泰時、水嶋正春、永瀬福男、奈良修介、林　謙作、船木義勝、宮本長二郎
5. 湯ノ沢F遺跡出土の鉄製品の銷處理については、秋田県埋蔵文化財センターより格別の指導と便宜を計らっていただいた。
6. 各遺跡の平面図、土層断面図中のPは土器（片）、Sは石（礫）を示す。
7. 発掘調査による出土遺物、実測図、写真、その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。

目 次

序

例言

調査の概要

調査に至るまでの経過 1

調査期間と体制 1

調査の方法と経過 2

遺跡の位置と地形・地質 8

坂ノ上 E 遺跡

遺跡の概観 14

遺構と遺物 14

まとめ 162

湯ノ沢 A 遺跡

遺跡の概観 171

遺構と遺物 171

まとめ 196

湯ノ沢 C 遺跡

遺跡の概観 204

遺構と遺物 204

まとめ 228

湯ノ沢 E 遺跡

遺跡の概観 237

遺構と遺物 237

まとめ 240

湯ノ沢 F 遺跡

遺跡の概観 244

遺構と遺物 244

まとめ 265

湯ノ沢 H 遺跡

遺跡の概観 273

遺構と遺物 273

まとめ 288

野形遺跡

遺跡の概観 293

遺構と遺物 293

まとめ 308



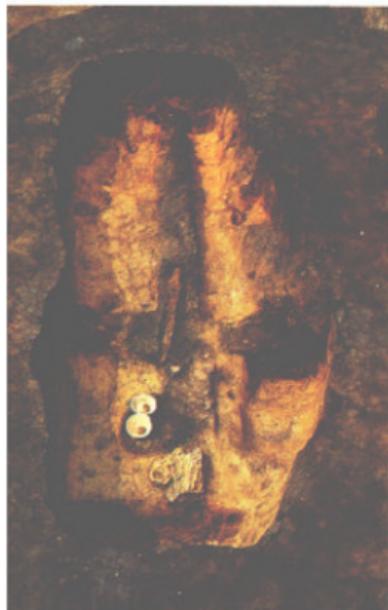
湯ノ沢C遺跡（東から）



湯ノ沢C遺跡（南から）



湯ノ沢 F 遺跡 (東から)



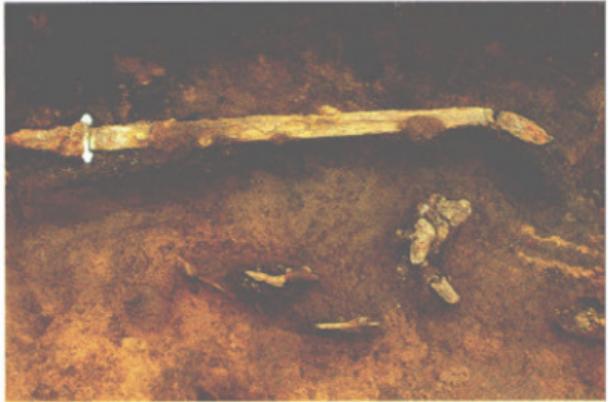
湯ノ沢 F 遺跡 3号土塙基



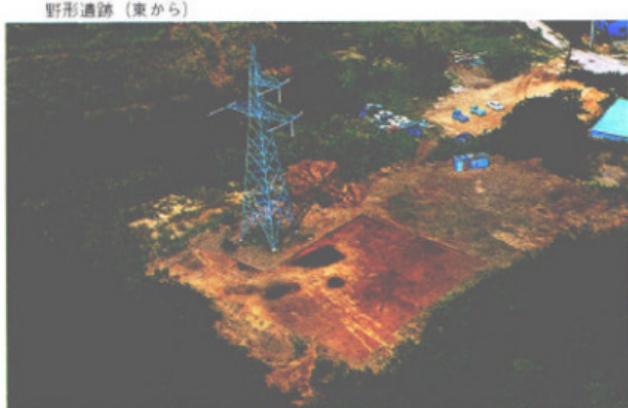
湯ノ沢 F 遺跡 16号土塙基遺物出土状態



湯ノ沢F遺跡 6号土塚墓遺物出土状態



湯ノ沢F遺跡 7号土塚墓遺物出土状態



野形遺跡（東から）



野形遺跡（東から）



湯ノ沢△遺跡（南東から）



湯ノ沢△遺跡（北東から）



坂ノ上 F・E 遺跡遠景（秋田市街地を臨む）



坂ノ上 E 遺跡（北から）

調査の概要

調査に至るまでの経過

秋田市南東部地域は、昭和56年6月の秋田空港の開港、東北横断自動車道秋田線秋田インターチェンジ開設予定等、空陸両面の交通の要衝に位置する所である。このような状況の中で南東部地域における御所野地区については特に広大な台地であることから、いち早く開発可能性等についての各調査が実施され、県市総合計画においても産業、住宅団地が一体となった総合的ニュータウン＝臨空港新都市として具体的に位置づけられた。

昭和55年に御所野台地全体の分布調査を実施し、約30カ所の遺物散布地を確認した。昭和56年度は、開発計画地内の中西部工業団地造成に先立ち、下堤D遺跡の発掘調査を行なった(秋田市「下堤D遺跡発掘調査報告書」1982年3月、秋田市教育委員会)。昭和57年度は、今後の開発計画に対応するため55年の分布調査に基づき、3カ月間で遺跡の範囲確認調査を実施し、その結果、台地上に24カ所の遺跡を確認したのである(第1図 御所野台地部範囲確認遺跡一覧表)。しかし、開発計画地内には3カ所の未範囲確認地域が存在している。範囲確認調査の結果に基づき関係機関と協議を重ね、引き続き年度別に計画的な発掘調査を実施することとし、昭和57年度は、下堤G遺跡、野畠遺跡、湯ノ沢B遺跡、坂ノ上C、D遺跡の発掘調査を行なった(秋田市「秋田臨空港新都市開発埋蔵文化財発掘調査報告書」1983年3月、秋田市教育委員会)。

昭和58年度は、坂ノ上E遺跡、湯ノ沢A遺跡、湯ノ沢C遺跡、湯ノ沢D遺跡、湯ノ沢F遺跡、湯ノ沢G遺跡、湯ノ沢H遺跡、野形遺跡の発掘調査を実施した。

調査期間と体制

調査期間 昭和58年4月1日～11月30日

調査主体者 (財団法人) 秋田県土地開発公社

調査担当者 秋田市・秋田市教育委員会

調査員 菅原俊行、石郷同誠一、西谷 隆、安田忠市(秋田市教育委員会社会教育課)

派遣調査員 柴田陽一郎、児玉 幸(秋田県埋蔵文化財センター)

調査補佐員 佐々木正昇、村田嘉一、三島隆儀、佐藤 司(秋田県埋蔵文化財センター) 鈴木達行、白井由香

調査協力員 五十嵐芳郎(秋田考古学协会会员)、石川恵美子、伊藤 真(筑波大学)、塙田誠、鈴木 浩、小松博行(秋田大学)、田代博秀(国学院大学)、相場 修(明治大学)、山下英二(日本大学)、渡部宏之(法政大学)、三浦 浩(県立農業短大)

調査作業員 鈴木鉄一、鈴木長治、鈴木茂治、鈴木力雄、鈴木一美、三浦竹治、三浦 聰、三浦吉司、三浦正二、三浦吉男、三浦三治、秋本与次郎、秋木佐市、水野金光、後藤善一郎、三浦 優、加賀谷新之助、鈴木銀三郎、加賀谷金一郎、安藤金四郎、堀野兼

雄、堀野健一、渡部吉春、渡部金次郎、渡部兼治、渡部謙治、渡辺太郎、佐々木東吉、佐々木敏男、蛭巻善幸、加藤雄司、尾形正隆、鈴木慶子、鈴木ウメノ、鈴木フヤ、鈴木ヨコ、三浦千枝子、三浦トミエ、三浦初枝、三浦シゲ、三浦ナツ、三浦タキ、堀井ヤス、堀井ヨシエ、堀井征子、佐々木フミ、佐々木久子、工藤ヨクエ、相場ミツエ、熊谷文子、加藤満子、大友幸子、宮田トヨ子、高島綾子、樋口トミ、伊藤ヒメ子、渡部セツ、渡部アイ子、渡部キネ子、渡部ヨコ、渡部かよ子、渡辺ミチ子、渡辺ミサ、渡辺フミ、佐々木ヨシ、佐々木姫子、佐々木清子、高橋ヨシ子、堀野京子、矢倉アキ、加賀谷ヒデ、鈴木貞子、堀井シゲ、鶴垣テル子、杉沢チエ子、杉沢ミサ子、鈴木ヒデ、藤沢トクエ、鹿子沢ミサ、安藤チヨ、嵯峨信枝
整理作業員 鈴木和恵、三浦秋子、三浦睦子、堀井律子、堀井幸子、鈴木栄子、長谷川ヤエ子、加藤磨弓

事務員 佐藤誠子、伊藤茂子

調査の方法と経過

調査区は、各遺跡ごとに任意に原点を決めて、東西南北（磁北）に基準線を作り、調査区全体に大グリッド（40m×40m）を設定し、さらにその中に小グリッド（4m×4m）を設定し、単位グリッドとした。大グリッドは（1～n）、小グリッドは東西（X軸）に数字（1～10）、南北（Y軸）にアルファベット（A～J）を配し、その組み合せて遺跡番号、大グリッド番号、小グリッドの順に呼称することとした。

発掘調査は、坂ノ上E遺跡（約～約）、湯ノ沢A遺跡（約～約）、湯ノ沢C遺跡（約～約）、湯ノ沢E遺跡（約～約）、湯ノ沢F遺跡（約～約）、湯ノ沢H遺跡（約～約）、野形遺跡（約～約）の日程で実施した。

坂ノ上E遺跡は、西側の舌状台地に位置する坂ノ上A遺跡（II.1）とどのような関連を持つかと言う課題で調査をした。その結果、坂ノ上A遺跡（縄文時代中期末～後期初頭）と同時期の集落跡が確認され、両遺跡の地理的状況からも、同一遺跡の可能性がある。

湯ノ沢A遺跡、湯ノ沢C遺跡は、隣接する遺跡で、湯ノ沢A遺跡では縄文時代中期末の住居跡の他、県内では2軒目の生糸時代の住居跡が検出され、証を隔てた北西の地蔵田B遺跡との関連が予想される。湯ノ沢C遺跡は、表土剥ぎ作業の段階では縄文時代晩期の遺物が多く、同時期の遺跡と考えられたが、縄文時代中期末の住居跡が6軒検出された。

湯ノ沢E遺跡、湯ノ沢F遺跡、湯ノ沢H遺跡は、開発計画地域南端の台地（畠地）に位置する。湯ノ沢E遺跡は、範囲確認調査の時点で、縄文時代中期及び後期の遺物はみられたが、遺構の確認ではなく、台地縁辺部を主に調査した結果、後期の土器埋設遺構1カ所の検出にとどまった。湯ノ沢F遺跡は、平安時代の集落を想定して調査を開始したが、検出された遺構は、平安時代（10世紀前後）の土塙墓21基であり、当時の墓域であることがわかった。畠作等の関係で、墓域の一部は未調

査である。湯ノ沢日遺跡は、範囲確認調査で縄文時代中期末及び後期の遺物が見られ、台地縁辺まで伐採等をし、調査した結果、中期末と晚期の住居跡が検出された。

野形遺跡（注2）は、昭和52年に一部、発掘調査がなされ、平安時代の住居跡2軒、窯跡6基が確認されている遺跡で、今調査はそれらを含めて調査した。その結果、新たに住居跡1軒、窯跡11基が検出された。

昭和58年度の発掘調査予定であった湯ノ沢G遺跡は、範囲確認調査の際、遺構は未確認であったが、縄文時代後期の遺物が出土した遺跡であった。4月、現地に行って、遺物包含層が削り取られた事を知り、残存する部分の調査を行なったが、遺構、遺物の検出は出来なかった。

昭和59年度、発掘調査予定の坂ノ上F遺跡の伐根、表土剥ぎ作業を11月30日までやり、屋外での作業を終了した。

（注1） 「小阿地地区遺跡分布調査概報（坂ノ上遺跡）」1975年3月、秋田市教育委員会、秋田考古学協会

「小阿地、下堤・坂ノ上遺跡発掘調査報告書」1976年3月、秋田市教育委員会

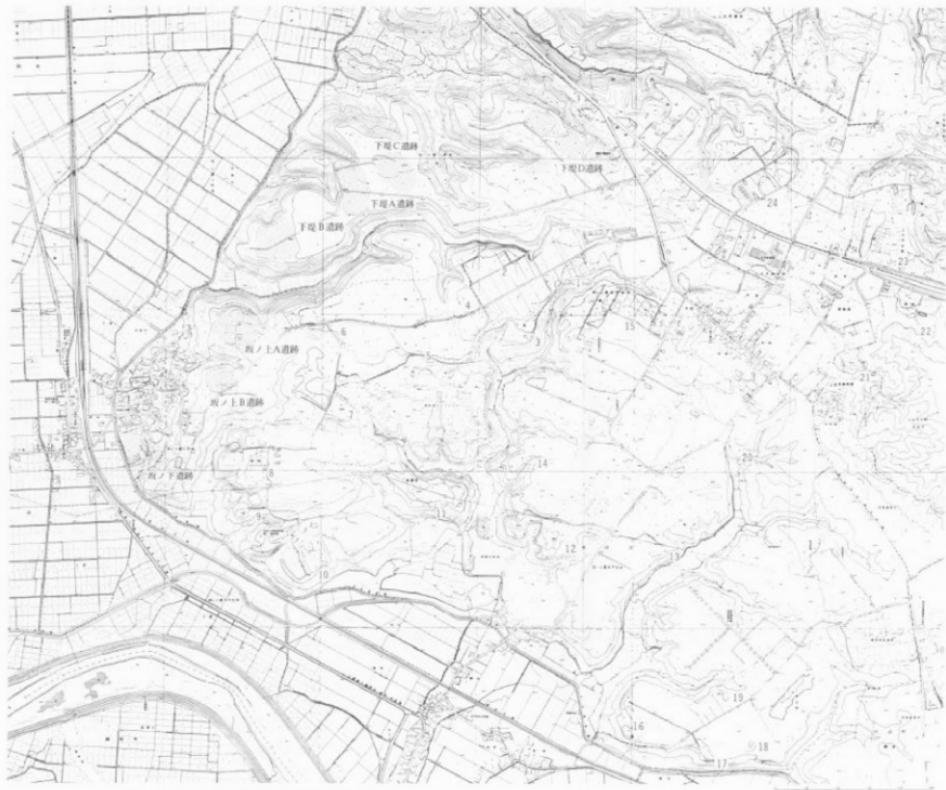
（注2） 「野形遺跡」1977年3月、秋田考古学協会

昭和58年度来訪者（順不同・敬称略）

岩見誠夫、高橋忠彦、船木義勝、大野憲司、小林一克、永瀬福男（秋田県埋蔵文化財センター）、秋元信夫（鹿角市教育委員会）、武藤康弘（国学院大学大学院）、宮本長二郎（奈良国立文化財研究所）、金子拓男（県立新潟江南高校）、阿部義平、岡田茂弘（国立歴史民俗博物館）、桑原滋郎（文化庁）、富樫泰時（秋田県文化課）、林謙作（北海道大学）、杉沢文治（秋田姓氏家系研究会）、進藤秋輝、高野芳宏、吉川雅清、後藤秀一（宮城県多賀城跡研究所）、奥山良三（秋田市中央公民館）、穴沢義功（秋田県文化財保護審議委員20名）、秋田市郷土史懇話会（30名）、秋田城跡作業員（10名）、秋田市立四ツ小屋小学校1年・2年・4年・5年生（380名）、県立南高校考古学研究協議会

星野の朝歌





第1図 加須野台地部範囲諸道路及び周辺道路

御所野台地部 範囲確認遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	面積ha	現状
1	下堤 E	秋田市四ツ小屋小阿地字下堤	縄文	5,625	畠
2	下堤 F	タタタ	タ	14,375	タ
3	下堤 G	タタタ	先土器・縄文(中)	5,000	山林原野
4	坂ノ上 C	タタタ四ツ小屋小阿地字坂ノ上	縄文	6,000	タ
5	坂ノ上 D	タタタ	タ	14,060	タ
6	坂ノ上 E	タタタ	タ	15,000	タ
7	坂ノ上 F	タタタ	タ	37,810	タ
8	狸崎 A	タタタ四ツ小屋小阿地字狸崎	縄文(晩)	13,750	畠・山林原野
9	狸崎 B	タタタ	縄文	11,250	原野
10	地蔵田 A	タタタ四ツ小屋末戸松本字地蔵田	先土器・縄文・平安	30,000	畠
11	地蔵田 B	タタタ	縄文(中晩)・弥生	25,000	山林原野
12	湯ノ沢 A	タタタ四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢	縄文	21,555	タ
13	湯ノ沢 B	タタタ	縄文(前・中)	5,000	タ
14	湯ノ沢 C	タタタ	縄文(中晩)・弥生	11,565	タ
15	湯ノ沢 D	タタタ	縄文(中)	35,000	畠
16	湯ノ沢 E	タタタ	縄文	7,500	タ
17	湯ノ沢 F	タタタ	縄文・土師須恵	5,310	タ
18	湯ノ沢 G	タタタ	縄文(後)	1,300	原野
19	湯ノ沢 H	タタタ	縄文	5,940	畠
20	野畠	タタタ上北手御所野字野畠	縄文(中)	1,875	山林
21	野形	タタタ上北手御所野字野形	土師・須恵	5,940	山林原野
22	深田沢	タタタ上北手古野字深田沢	縄文・平安	6,875	畠
23	台	タタタ上北手古野字台	タ	8,440	タ
24	地方	タタタ上北手猿田字堤ノ沢	縄文(晩)	54,670	畠・原野

遺跡の位置と地形・地質

位置

秋田市街から国道13号線を南下し、仁井田、横山を過ぎ、坂を登ると標高約40m 前後の広大な台地が開ける。これは奥羽本線四ツ小屋駅方面からもよく見える平坦な台地であり、御所野台地、末戸台と呼ばれている。この台地が臨空港新都市開発計画地域である。

各遺跡の位置については第1図「御所野台地部範囲確認遺跡及び周辺遺跡」を参照されたい。

地形・地質

遺跡の存在する地形は、大別して和田丘陵と末戸台台地に分けられる。和田丘陵は平坦面をあまり持たない。しかし、一定高性を持った標高60～150m のかなり開析を受けた老年期地形を示し、地質は第3系鮮新統に属する青色砂質シルト岩（笠岡層）と青灰色塊状泥岩（天徳寺層）、それに中新統に属する暗灰色泥岩（船川層）などからなっている。末戸台台地は標高25～50m 強で、その表面は大変平坦である。この台地は和田丘陵と接して数段の段丘を識別できる。これらは内藤（n1）の区分からすると、上位から標高45～50m 強の椿台段丘、標高40m 強の上野台段丘Ⅰ、標高35m 強の上野台段丘Ⅱ、標高25m 強の宝亀崎段丘の4段に分けられる。（第2図）

椿台段丘

岩見川右岸末戸台台地では45～50m 強の標高をもつ、いわゆる椿台面をその堆積面とする椿台層が厚い疊（最大径10cm前後）、砂、粘土の互層で構成されている。ただ基底高さはわからない。岩相は最上部に1～2m の褐色の粘土質火山灰層があり、次に疊、砂、粘土の互層で、砂疊の部分でしばしばクロス・ラミナ（斜交葉理）がみられ、砂土あるいはシルトは水平な細かい層理をなすことが多い。層厚をみると、疊層はうすく、砂、粘土層が厚い。その下部は第3系の泥岩（船川層）や砂質シルト（笠岡層）となっている。内藤はこの椿台面を関東の下吉面に対比している。野形遺跡は、この椿台段丘に位置する。

上野台段丘Ⅰ

末戸台台地で椿台段丘の南側に標高40m 強についている段丘が上野台段丘Ⅰと呼ばれている。表層の1～2m の粘土質火山灰層を除くと、段丘堆植物は最大径20～30cmの疊を含む疊層であり、厚さは5m 程度で、その下部は第3系となっている。坂ノ上E遺跡は、この上野台段丘Ⅰに位置する。

上野台段丘Ⅱ

末戸台台地では上野台段丘Ⅰとの比高が5m 強である。段丘堆植物の岩相は、上野台段丘Ⅰとはほぼ同様で、層厚は5m 前後である。内藤によれば、厚い疊層の下部は椿台層に当るとしている。湯ノ沢A・C・E・F・H遺跡は、この上野台段丘Ⅱに位置する。

段丘堆植物の特徴は、上野台Ⅰ・Ⅱ面では最大径30cm前後の軸円疊を主体とする、ほぼ一様な疊層をもち、河川堆植物で、厚さも加味すると岩見川などによる河成の侵食段丘面と考えられる。椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面の各面をおおっている層厚1～2m のシルト分を含んだ粘土質火山灰層は、男

鹿島の寒風山が起源と認められている。(注2) この粘土質火山層の表面細粒物質の風化状態をみていくと、椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面では黒色土の下の細粒物質のうち、上部50~100cmが明褐色を呈し、下部は灰色で、境は漸移する。また、土壌断面を見ると、椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面をおおう土壌は、いわゆる高岡2統に属していると考えられ、比較的大きい円錐を混入していて、黒色土層を厚く堆積させている。この土層中には火山ガラスを混入しており、火山灰が関係しているものと推定される。

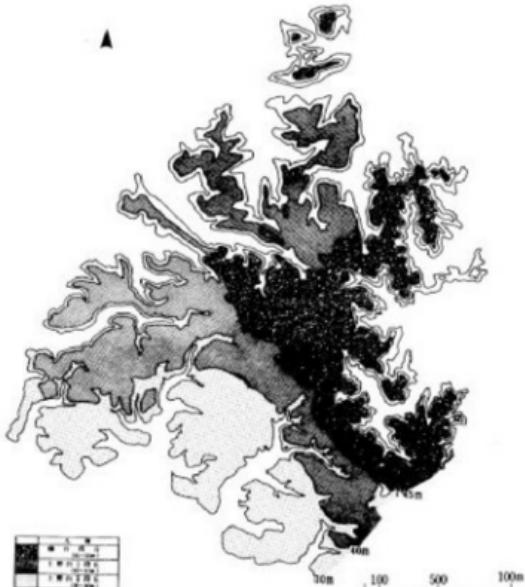
(注1) 「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」内藤博夫 1965年 第4紀研究第4卷第1号

(注2) 「地形・表層地質・土じょう、秋田」経済企画庁土地分類基本調査 1966年

「八郎潟の研究」秋田県教育委員会 1965年

「火山活動と地形」村山 譲 大明堂

「秋田県男鹿半島一の日周辺の火山拠出物について」林 宏 地質学雑誌第61巻第717号 1955年

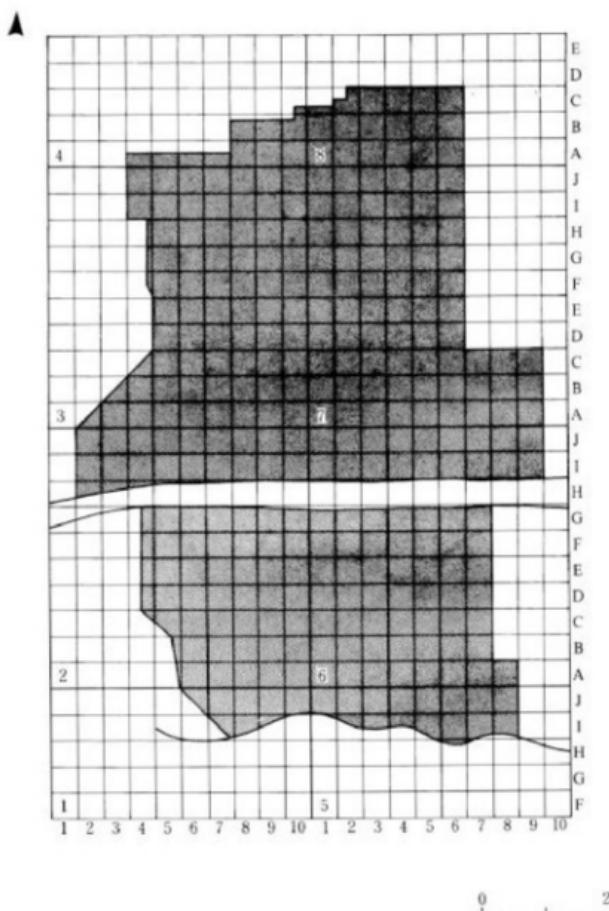


第2図 段丘

坂ノ上戸遺跡



第1図 遗跡周辺の地形



第2図 グリッド配置図

遺跡の概観

南と北の沢にはさまれた台地上に位置し、南側が斜面となる。

遺跡は縄文時代前期末葉から晩期（中期末葉が主体）にかけてのもので、検出遺構は、住居跡37軒、土塙122基、埋設土器遺構11個、炉2基、製鉄炉1基、炭焼窯1基、その他の遺構である。

縄文時代前期（末）から中期（末）の遺跡は、沢を隔てて北約300mに下堤A・B遺跡、北東約900mに下堤D遺跡、東約700mに下堤G遺跡、西側に坂ノ上A遺跡などが所在する。

遺構と遺物

1号住居跡（第3図）

調査区東側で検出されたが、市道により一部破壊されている。

プランは径約5.5mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは深い掘り方のものと浅い掘り方のものがあり、深い掘り方が柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は埋設土器の抜き取り痕と考えられる。石組部は楕円形、底面が平坦で火熱を受け、石は側面に組まれている。掘り込みは一段浅く、壁に接し、壁際にピットが掘られている。床はほぼ平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第50図62～65）

63・64は炉石組部、他は覆土からの出土である。62は口縁部文様帶に隆起及び燃糞付痕を施すもの、63・64は円形の貼り付け及び沈線で文様を構成するものである。

2号住居跡（第4図）

調査区中央部で検出された。

プランは径2.9mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは3個の検出で浅い。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は深体形土器を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底面が火熱を受け、北側面に3個の赤化したり亀裂のある石が認められた。掘り込みは一段浅く、壁に接する。床はほぼ平坦で、堅い。

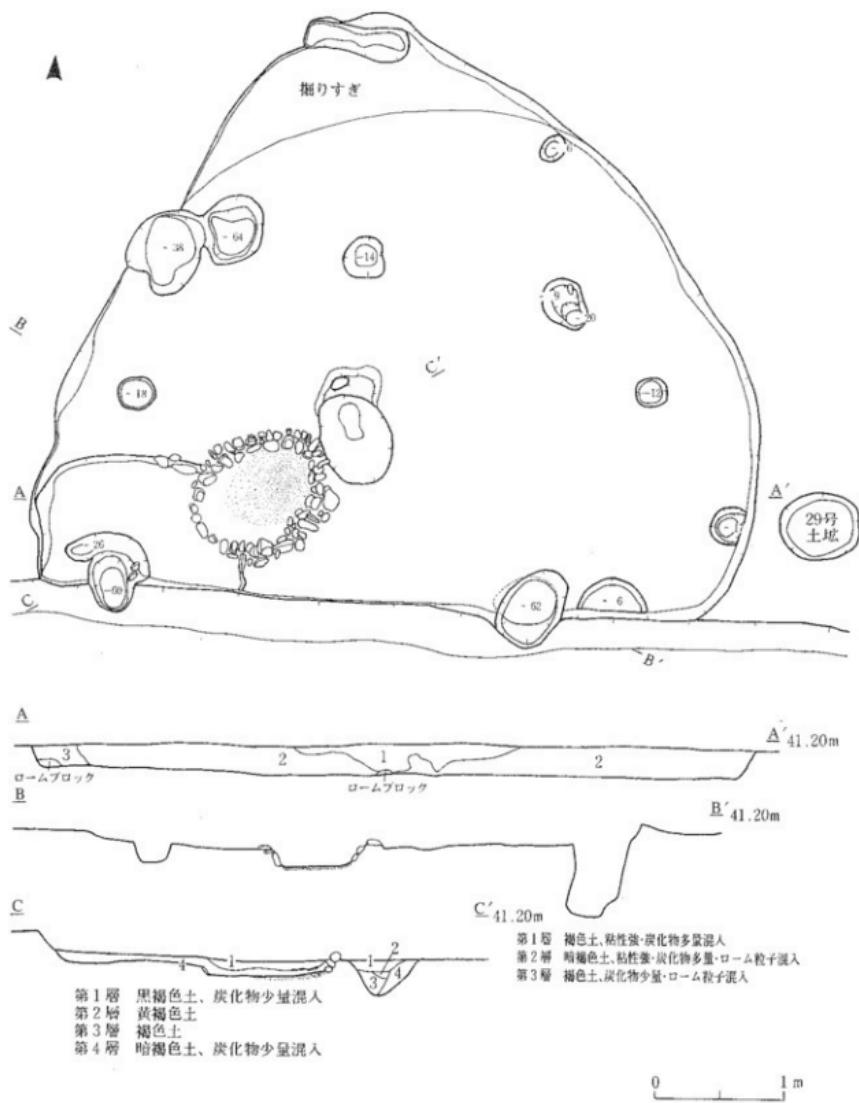
出土遺物

土器（第39図1、第50図66～70）

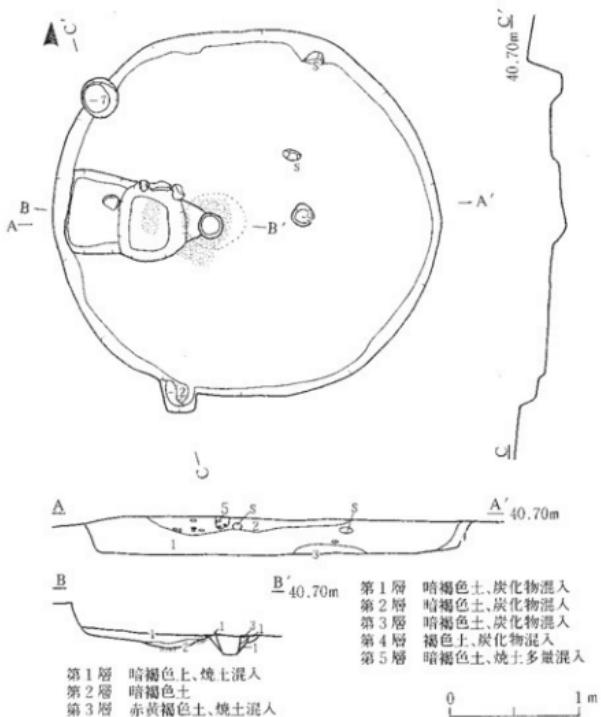
1は炉埋設土器、他は覆土からの出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。1は胴部の膨らむ器形で、地文はL R 単節斜縦文（継位回転）である。66は口縁部に粘土縫貼り付けがみられる。

石器（第86図1～5）

1～4は石鏃、5は搔器状石器である。他に剣片が多量に出土している。



第3図 1号住居跡



第4図 2号住居跡

3号住居跡（第5図）

調査区中央部で検出された。

プランは長軸3m、短軸2.7mの橢円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁は垂直に立ち上がる。ピットは浅い掘り方のものが数個検出され、4個が主柱穴と考えられる。内は石器土器埋設部、敷石石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形上器の上半分を正立して埋設した石函炉である。敷石石組部は底・側面に石を組み、埋設上器との間には大きな川原石を据えてあり、底面には炭化物が多量に堆積していた。掘り込みはやや浅く、壁より外側へ張り出している。床は平坦で、堅い。住居の中央部床面に炭化物の散在が認められた。

出土遺物

土器（第39図2～4、第50図71～76）

2は炉埋設土器、3は床面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。2はII

縁部がやや外傾する深鉢形土器で、地文はR L 単節斜縞文（縦位回転）である。

3は口縁部がやや外傾する鉢形土器で、地文はL R 単節斜縞文（縦位回転）である。

土製品（第102図14・15）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

石製品（第117図2）

有孔石製品で、両方から孔を穿っている。装饰品であろう。

4号住居跡（第6図）

調査区中央部で検出された。

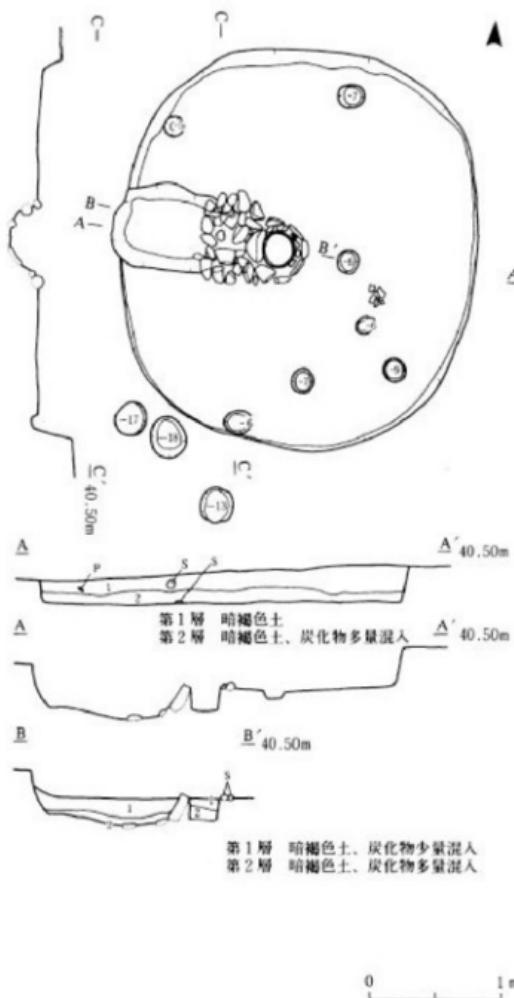
プランは長軸2.7m、短軸2.4mの楕円形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

ピットは3個検出された。

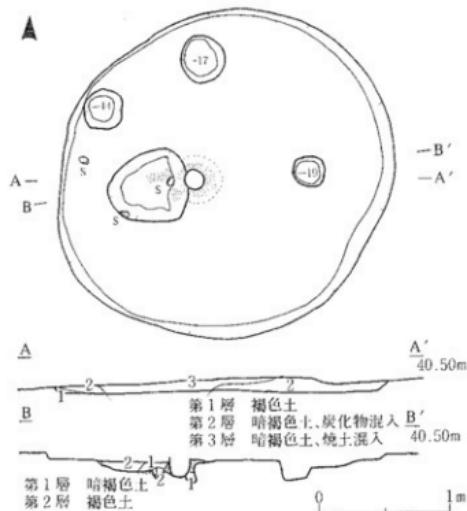
炉は土器埋設部と掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の腹部を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。掘り込みは底面が火熱を受け、2個の石が焼けている事から石組みであったと考えられる。床は平坦である。

出土遺物

土器（第39図5、第50図77～80）



第5図 3号住居跡



第6図 4号住居跡

5は炉埋設土器、他は陶土からの出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。5は深鉢形土器の脚部で、地文はR.L. 単節斜縦文(縦・横位回転)である。

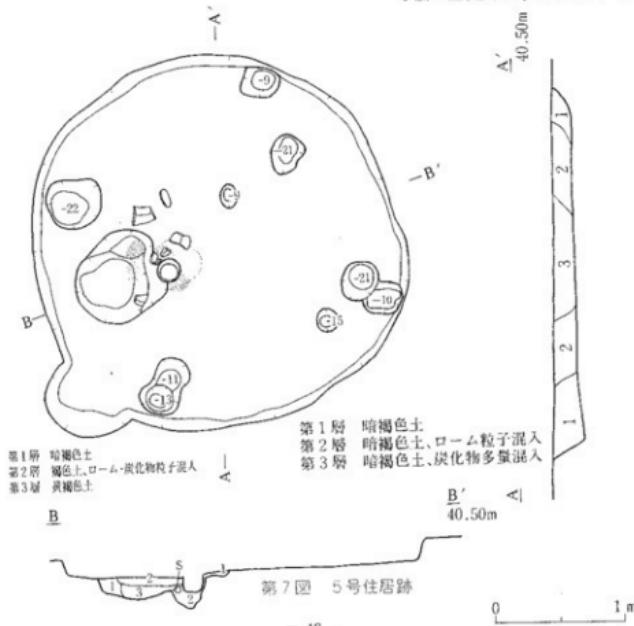
石器 (第8図 6)

6は磨製石斧で、基部破損部にアスファルトの付着が認められる。他に剣片が2点出土している。

5号住居跡 (第7図)

調査区中央部で検出された。

プランは径約3mの円形を呈し、南西側に張り出しがある。確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは數個検出され、壁際の4個が支柱穴と考えられる。柱は石圓



土器埋設部と掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の上半分を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。掘り込みは底面が火熱を受けている。1個の焼けている石が認められた事と炉の北側に石が散乱している事などから石組みであった可能性が考えられる。床は平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第39図6、第50図81・82）

6は炉埋設上器、他は覆土出土である。沈線区画の廻消帯を施すものである。6は口縁部がやや外傾する深鉢形土器で、地文はR L単節斜縞文（縦位回転）である。

6号住居跡（第8図）

調査区中央部で検出された。

プランは長軸2.9m、短軸2.7mの橢円形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは13個検出され、壁際の4個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。掘り込みは底面が火熱を受け、埋設土器との間に大きな川原石を立てて据えてある。浅い掘り込みは壁に接する。床は

ほぼ平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第39図7、第50図83・84）

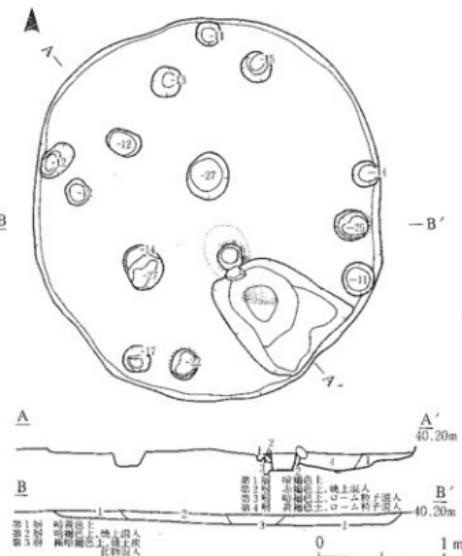
7は炉埋設土器、84は床面、83は覆土からの出土である。沈線区画の廻消帯を施すものである。7は深鉢形土器の胴部で、地文はR L単節斜縞文である。

7号住居跡（第9図）

調査区中央部で検出された。

プランは径2.4mのほぼ隅丸方形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

ピットは数個検出され、壁際の4個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部と石組部からなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立



第8図 6号住居跡

して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底面が火熱を受け、南東側面及び埋設土器との間に石が組まれていた。床はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第40図8、第51図85～89）

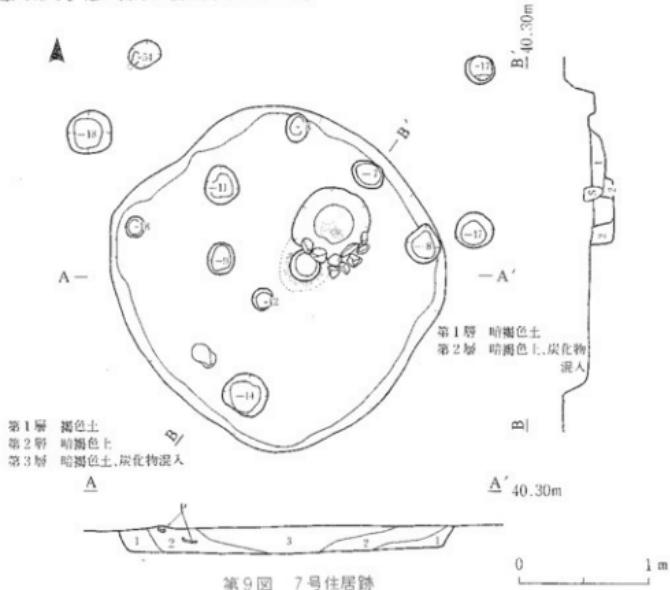
8はが埋設土器、他は覆上からの出土である。口縁部文様帶に撚糸圧痕を施すもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。8は深鉢形土器の副部で、地文はR L 単節斜縞文（縦位回転）である。

土製品（第102図16・17）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第86図7）

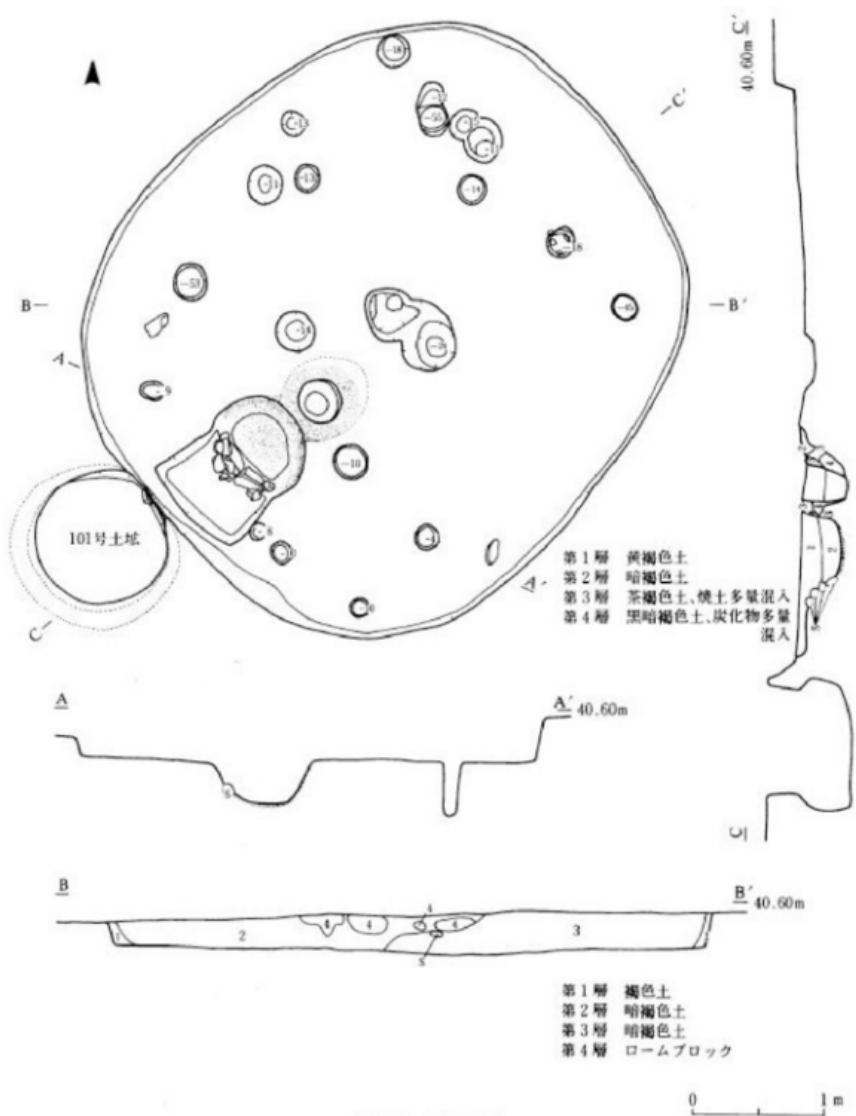
石鏃である。他に剣片が数点出土している。



8号住居跡（第10図）

調査区中央部で検出された。

プランは長軸4.5m、短軸4.1mのほぼ隅丸方形を呈し、101号土爐と重複する。確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは数個検出され、深い掘り方の4個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は副下部を欠く深鉢形土器を正



第10図 8号住居跡

立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底・側面が火熱を受け、掘り込み側の側面に行が組まれている。掘り込みは一段浅く、壁に近くなる。床はほぼ平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第40図9～11、第51図90～95）

11は炉壇設上器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帶を施すものである。11は口縁部がゆるく外傾する深鉢形土器で、口唇部に4個の突起をもつ。地文は単軸絡条体回転文（継位回転）である。

土製品（第101図8、第102図18）

8は三角形土製品、18は再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第86図8・9）

8は縦型石匙、9は擂器状石器である。他に剝片が多量に出土している。

石製品（第119図7）

岩側で顔部を欠く。石質は硅化木である。いわゆるこけしの源流であろうか。

9号住居跡（第11図）

調査区中央部で検出された。

プランは長軸4.8m、短軸4.5mのほぼ隅丸方形を呈し、南西側に張り出しをもつ。確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ヒットは数個検出され、深い掘り方の4個が主柱穴と考えられる。ほかは土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺が火熱を受け赤変している。石組部は底面が火熱を受け、壇設土器との間に大きな川原石と側面に石を組んでいる。掘り込みは一段浅く、壁より外側に張り出している。床はほぼ平坦で、全面的に堅い。また、床面中央部が焼けている点や、焼土・炭化物が多量に認められる事などから火災住居の可能性も考えられる。

出土遺物

土器（第40図12、第15図96～103）

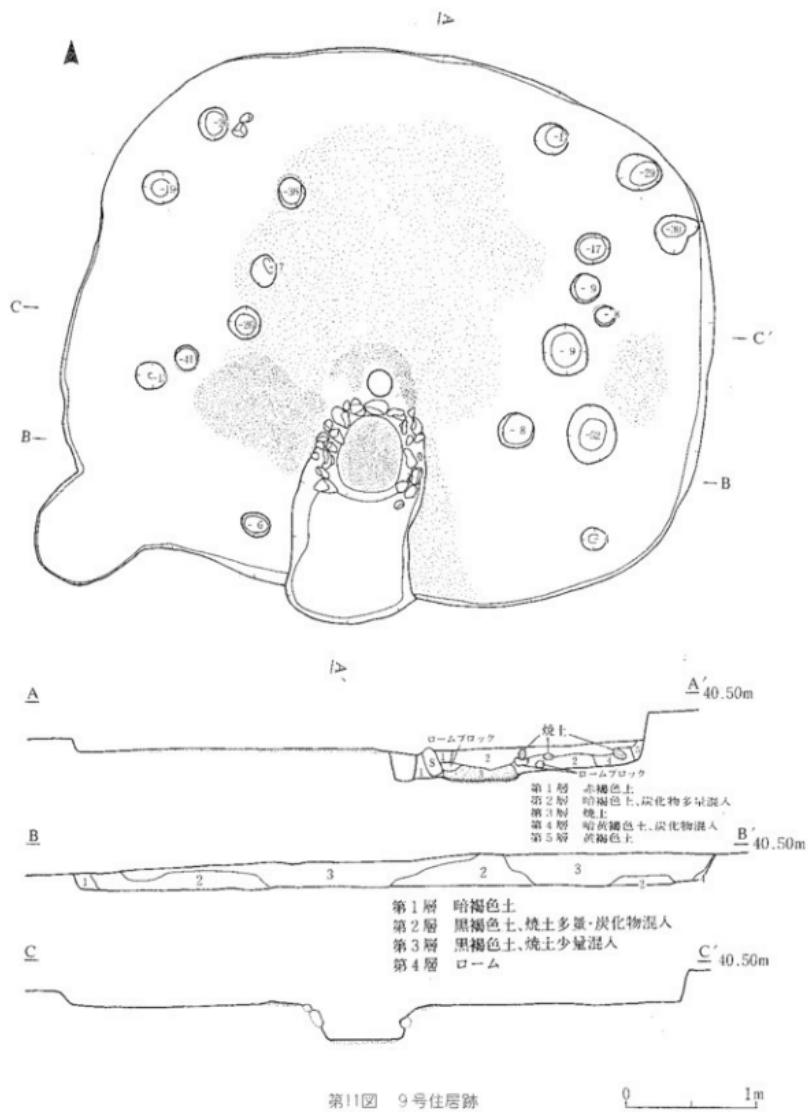
12は炉壇設上器、他は覆土出土である。粘土紐を貼り付けてその両側を沈線で調整するもの、粘土紐を貼り付けるもの、沈線区画の磨消帶を施すものである。12は口縁部がやや外傾する深鉢形土器の胴部で、地文はR.L. 単節斜縞文（継位回転）である。

土製品（第100図6、第101図11、第102図19・20）

6は正三角形土製品で一部欠損する。11はスタンプ状をなす。19・20は再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第86図10～17、第91図115・116）

10は石鏃、11は石錐、12は縦型石匙、13は撲形状石器、14は瓶器、15は削器状石器、16・17は磨製石斧で17は小形である。115は石皿状石器、116は磨石である。他に剝片が多量に出土している。



10号住居跡（第12図）

調査区中央部で検出された。

プランは長軸3m、短軸2.7mのほぼ隅九方形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは数個検出され、3本柱のようである。炉は石器埋設部と掘り込みからなるが、掘り込み部側面に石の抜き取り痕が認められることから石組炉であったと考えられる。土器埋設部は深鉢形土器の胴下部を正立して埋設する。周辺は火熱を受け赤変している。掘り込みは梢円形を呈し、壁面がやや浅い。床はほぼ平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第40図13、第51図104～111）

13は埋設土器、他は覆土出土である。頭部隆起に刺突を施すもの、沈線区画の麻消費を施すものである。13は脇部側面にのみ刺突を施す。

土製品（第100図5、

第102図21）

5は三角形土製品で一部を欠損する。21は再利用土製品（円盤状土製品）である。

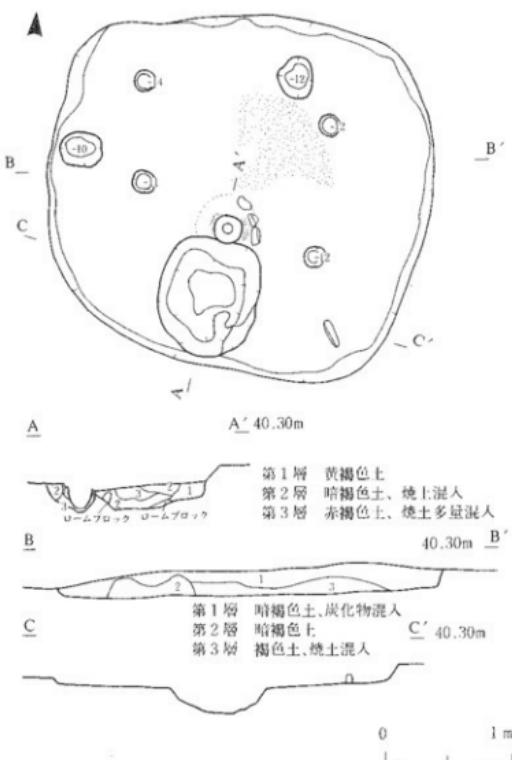
石器（第86図18）

18はヘラ状石器で、両面からの加工がある。他に剝片が多量に出土している。

11号住居跡（第13図）

調査区中央部で検出された。

プランは底2.2mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは5cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは数個検出され、實際の4個が



第12図 10号住居跡

主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、掘り込み、一段深い掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺が火熱を受け赤変している。掘り込みは梢円形を呈する。一段深い掘り込みにはピットが認められ、壁に接する。床はほぼ平坦で、堅い。

出土遺物

土器 (第40図14、第51図112~114)

14は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。

14は深鉢形土器の胴部で、地文はR L 単節斜縞文である。

12号住居跡 (第14図)

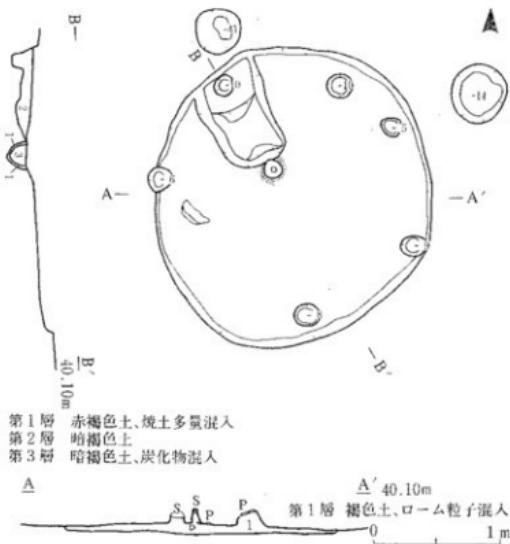
調査区北側で検出された。

プランは怪4.1mのほぼ円形を呈し、47・120・122号土爐と重複する。住居跡は46・47土爐に切られているが、他は不明である。ピットは深い掘り方が4個検出され、主柱穴と考えられる。炉は石圓土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は切り合いで認められ、古い埋設土器の上部に石圓を施し、新たに深鉢形土器を正立してある。周辺は火熱を受け赤変し、石組部は南及び掘り込み側面に石組みが残る。掘り込みは一段深い。床は平坦で、全面的に堅い。また、西側に石の入った掘り込みが認められるが、性格については不明である。

出土遺物

土器 (第41図15~18、第52図115~118)

15(新)・16(IH)は炉埋設土器、18は床皿、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。15は口縁部がやや外傾する深鉢形土器である。頭部に一条の沈線があり、沈線の上部は稜線となる。地文はR L R 傷節斜縞文(縦位回転)である。18は波状をなしやや外傾する口縁の深鉢形土器である。口縁部磨消帶には白状の貼り付けがみられる。地文はR L 単節斜縞文(縦・斜位回転)である。



第13図 11号住居跡

石器（第86図19・20）

19は石鏃、20は削器状石器である。他に剝片が数点出土している。

13号住居跡（第15図）

調査区西側で検出された。

プランは長軸5.7m、短軸5.5mの梢円形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは深い掘り方のものと浅い掘り方のものが検出され、段に沿った深い掘り方5個が支柱穴と考えられる。炉は石開土器埋設炉で鉢形土器を斜位に埋設してある。底面は火熱を受け赤変している。床は段をもち、段はゆるく立ち上がる。

出土遺物

土器（第41図19、第52図119～124）

19は炉埋設土器、他は覆上出土である。19は口縁部がゆるく外傾する鉢形土器である。R L 単節斜繩文（縱位回転）を施した後に、棒状工具による沈線の直線・曲線で文様を作り出している。他は沈線区画の磨消帶の施されるもので、隆起線や刺突を施すものもある。

土製品（第102図22）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第86図21・22）

いずれも石鏃で、両面にアスファルトの付着が認められる。他に剝片が多量に出土している。

14号住居跡（第16図）

調査区西側で検出された。

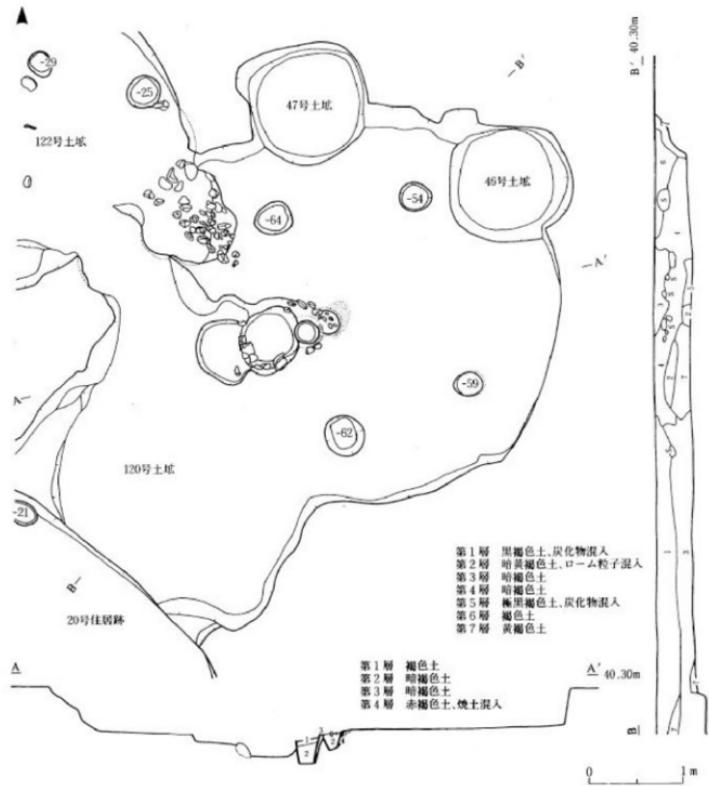
プランは径4.4mのほぼ隅丸方形を呈し、88号上塗と重複する。確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、幅15cm、深さ5cmの周溝が認められた。ピットは数個検出され、深い掘り方の5個が支柱穴と考えられる。炉は土器埋設部と掘り込みからなる。上器埋設部は切り合いか認められた。古い埋設土器の上部をこわして、新たに土器を埋設してある。新しい埋設土器の内下部には本土器の下半部が敷かれていた。周辺は火熱を受け赤変している。掘り込みは底面が火熱を受け、壁際が浅くなる。焼けた3個の石が確認された事から右組部であった可能性がある。床は平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

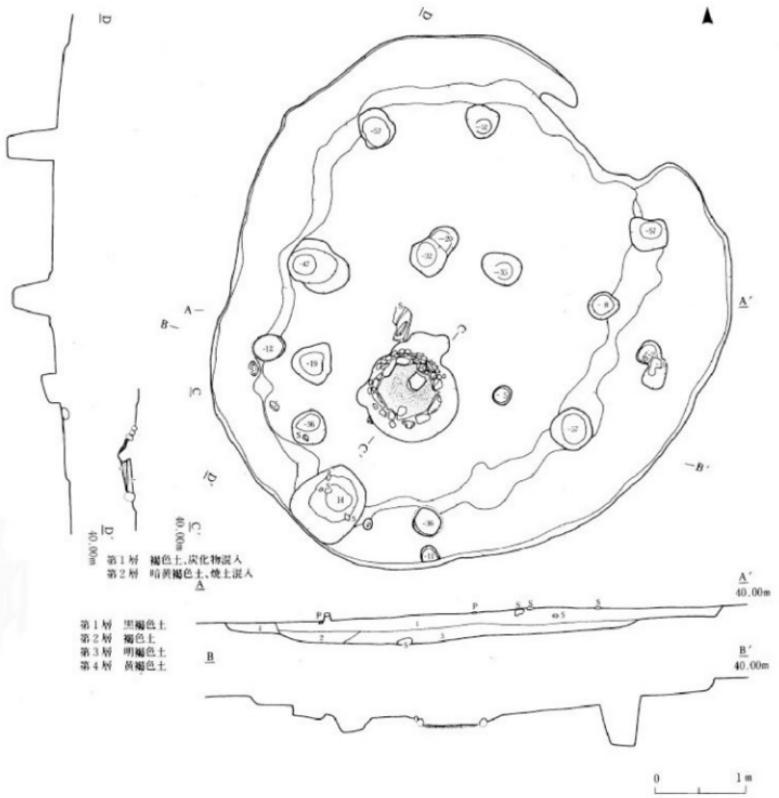
土器（第42図20、第52図125～132）

20は炉埋設土器（上半分が埋設で下半分は敷かれていた）、他は覆上出土である。粘土縁を貼り付けてその両側を沈線で調整するもの、沈線区画の磨消帶を施すもの、網目状撚糸文を施すもの、刻線を網目状に施すものである。20は口縁部がやや外傾する深鉢形土器で、地文はL R 単節斜繩文（縱位回転）である。

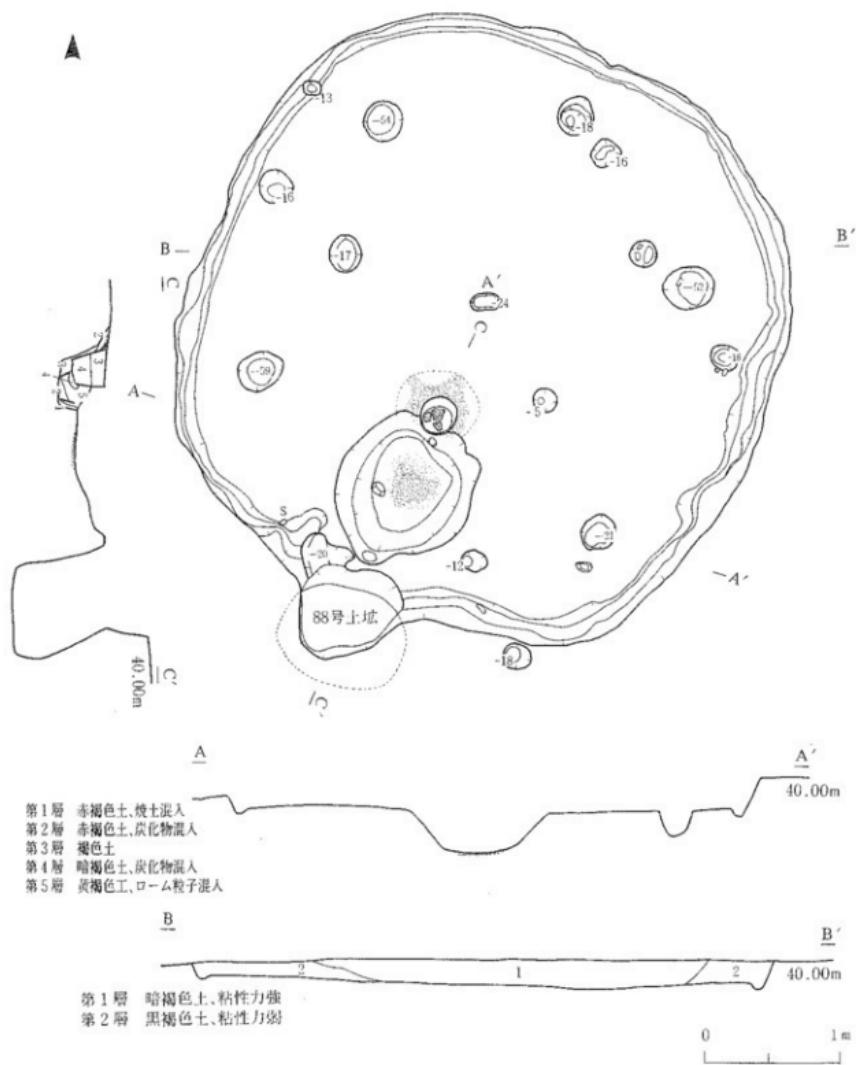
土製品（第102図23～28）



第14図 12号住居路



第15图 13号住居跡



第16図 14号住居跡

いざれも再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第86図23～27）

23は縦型石匙、24～26は削器状石器、27は小形磨製石斧である。他に剝片が多量に出土している。

15号住居跡（第17図）

調査区西側で検出された。

プランは直径5mのほぼ隅丸方形を呈し、確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、深い掘り方の6～7個が主柱穴と考えられる。炉は上器埋設部、石組部、掘り込みからなる。石組部には炉埋設土器と考えられる土器が置かれていた。底面には石が組まれ火熱を受けている。掘り込みはやや浅く壁に接し、東・西側面に一部焼けた痕跡が認められた。床は平坦で、全面的に堅いが、地山の礫が露出していた。床が部分的に焼け、覆土に焼土・炭化材が多量に認められたが火災住居かどうかは不明である。

出土遺物

土器（第42図21、第52図133～140）

21は炉埋設土器、他は覆土出土である。粘土紐を貼り付けてその両側を沈線で調整するもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。21は深鉢形土器の胴部で、地文はL R 単節斜楕文（縦位回転）である。

土製品（第102図29）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第87図28、29）

28は削器状石器、29は磨製石斧である。他に剝片が少量出土している。

自然遺体

炭化したどちの実が2個出土している。

16号住居跡（第18図）

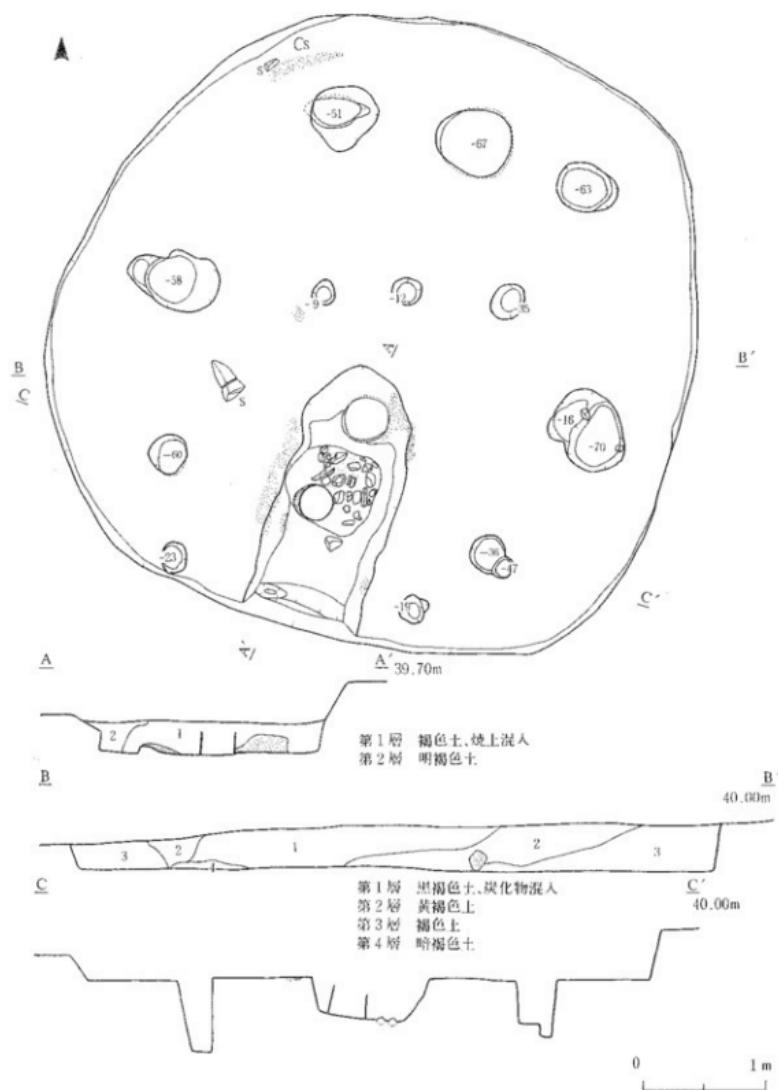
調査区西側で検出された。

プランは長軸5.8m、短軸5.3mの梢円形を呈し、確認面からの深さは20mで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは多数検出され、深い掘り方の3個が主柱穴と考えられ、壁際のピットについても柱穴と考えられる。炉は1基の埋設土器と、石開土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。上器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設してある。周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底・側面が火熱を受け、側面に石が組まれている。掘り込みは一段浅く壁に接する。床は平坦で、全面的に堅い。

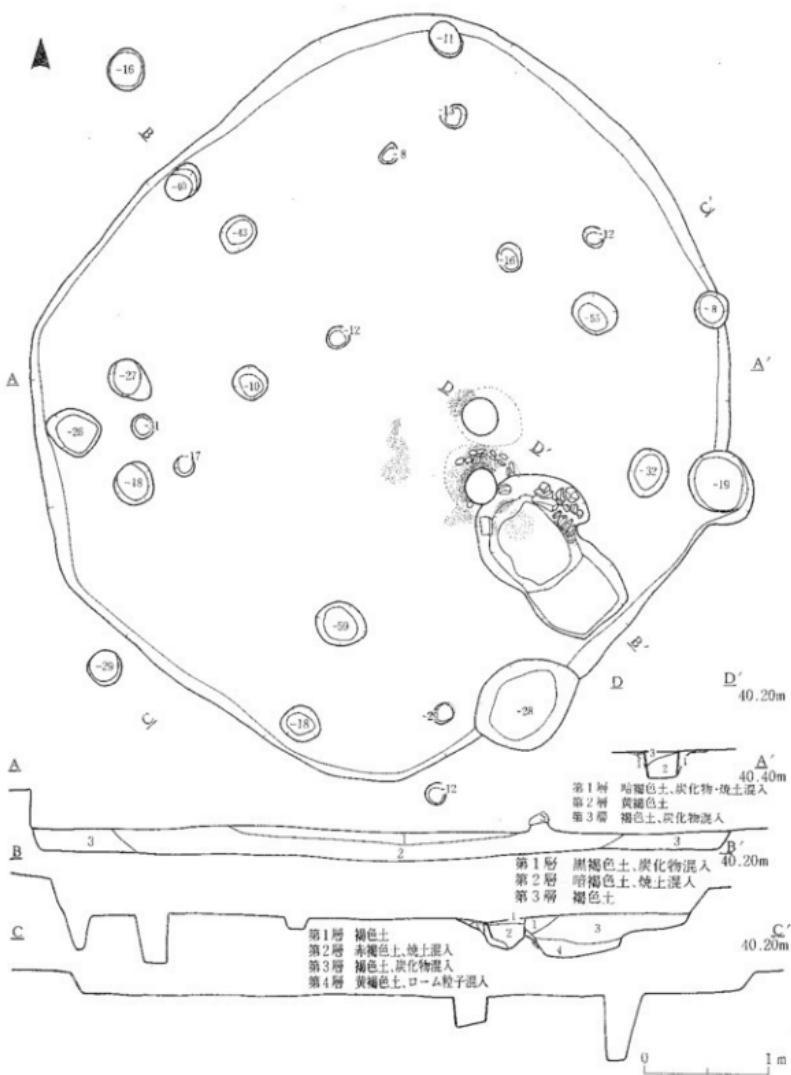
出土遺物

土器（第42図22・23、第52図141～144）

22は複式炉埋設土器、23は炉埋設土器、他は覆土出土である。細い粘土紐を貼り付けるもの、沈



第17図 15号住居跡



第18図 16号住居跡

線区画の磨消帯を施すものである。22は深鉢形土器の胴部で、地文はR L 単節斜縦文（縦位回転）である。23は複元不可能で拓本の掲載とした。

土製品（第102図30）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第87図30～35）

30は石錐、31は石錐、32は撫器、33・34は削器状石器、35は磨製石斧である。他に剣片が少量出土している。

17号住居跡（第19図）

調査区北側で検出された。

プランは長軸4.8m、短軸4.7mの変形隅丸方形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、壁際の6個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底・側面が火熱を受け、掘り込み側面に厚味のある平らな石を据えてある。掘り込みは一段浅く壁に近くなる。床は平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第43図24・25、第53図145～150）

24は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。24は図上復元したもので、地文はR L 単節斜縦文（縦位回転）である。

石器（第87図36～41）

36～38は石錐、39～41は削器状石器である。他に剣片が数点出土している。

自然遺体

炭化したとみる炎が多量に出土している。

18号住居跡（第20図）

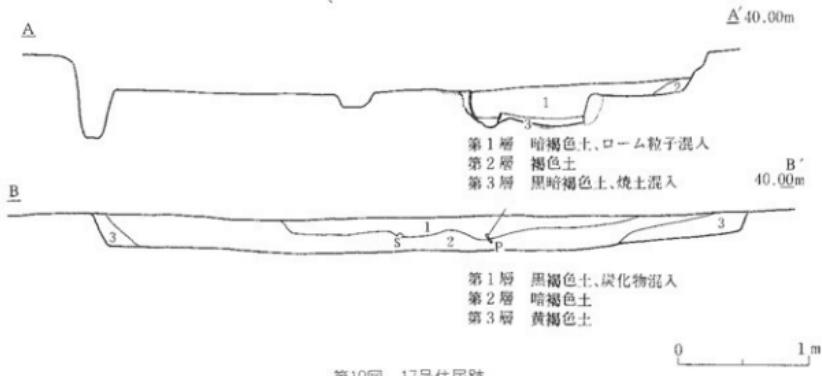
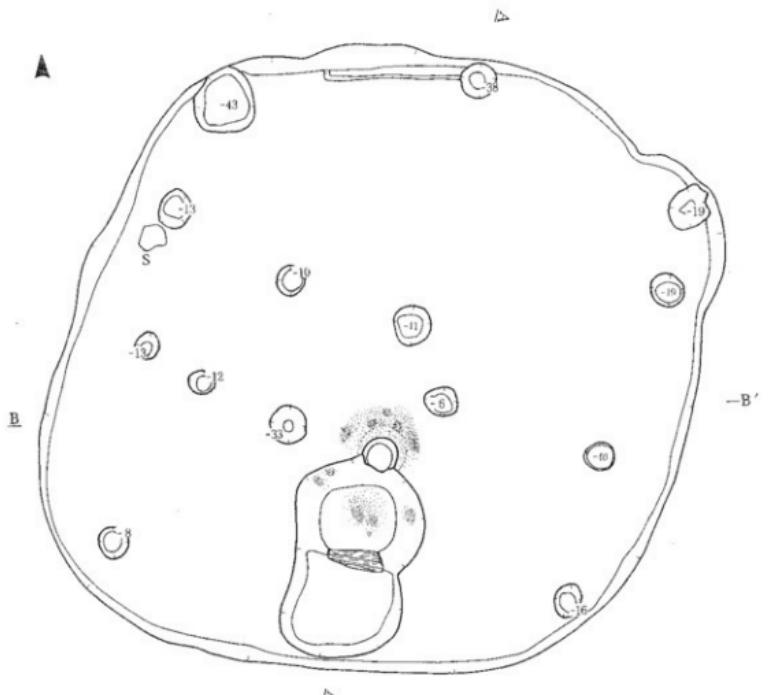
調査区北側で検出された。

プランは長軸3.3m、短軸3.1mの梢円形を呈し、西側も一段浅く掘り込まれている。確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。また、西側は確認面から深さ7cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、柱穴は壁際の深い掘り方4個と考えられる。炉は土器埋設部と掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺が火熱を受け赤変している。掘り込みは底・側面が火熱を受けている。床は平坦で、全面的に堅い。

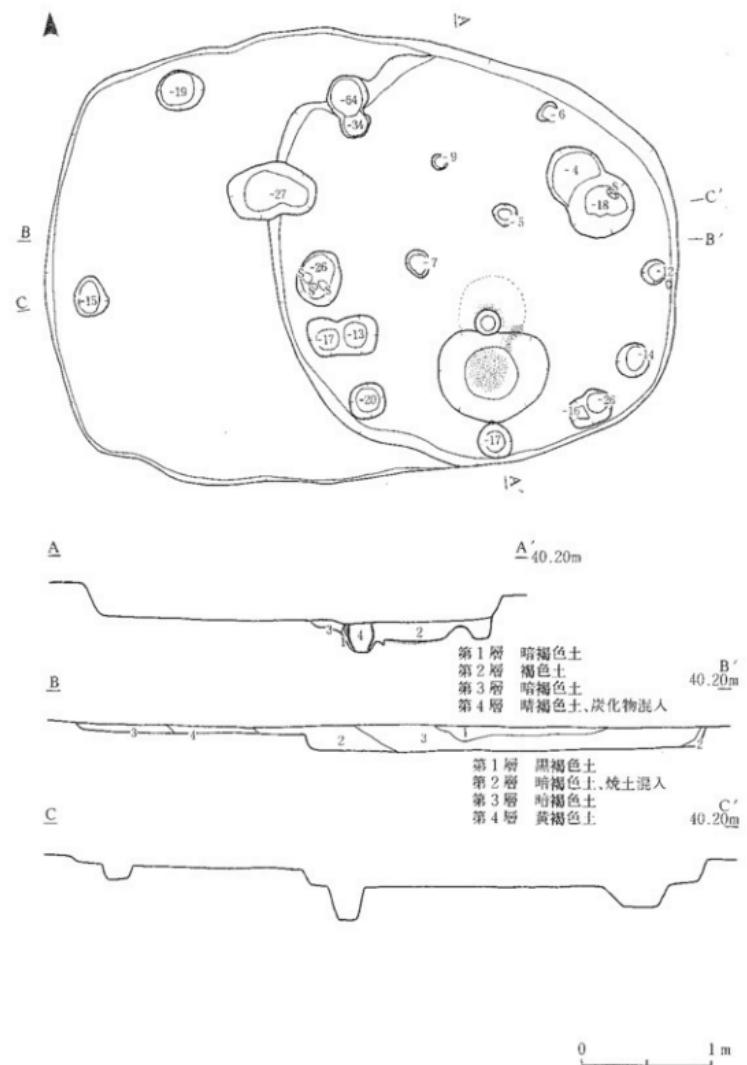
出土遺物

土器（第43図26～28、第53図151～154）

28は炉埋設土器、他は覆土出土である。口縁部文様帶に隆起を巡らし刺突を加飾し捺糸圧痕を施すもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。28は胴部が強く張る深鉢形土器で、地文はR L R 複



第19図 17号住居跡



第20圖 18號住居跡

斜縫繩文（縦位回転）である。26は胴下部に刺突が巡る。

石器（第86図42・43、第90図117・118）

42は石鏨、43は搔器、117は石皿、118はくぼみ石である。他に剝片が多量に出土している。

自然遺体

炭化したともの実が2個、胡桃が2個出土している。

19号住居跡（第21図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。

プランは径7.3mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは40cmで、壁は垂直に立ち上がり、幅20cm、深さ8cmの周溝が認められた。ピットは深い掘り方の5個が主柱穴と考えられる。か口は石凹土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。石凹土器埋設部は切り合いで認められた。つまり、古い埋設土器を埋め、その上部に石凹土器埋設部を構築している。周辺は強く焼け赤変している。石組部は底、側面が火熱を受けている。埋設土器との間に大きな川原石を配置し、側面には掌大的石を組んでいるが、まばらであり、抜き取ったものと考えられる。掘り込みは壁際まで掘られ、一段浅くなっている。床は平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第43図29～31、第53図155～164）

30は炉埋設土器、29は古い炉埋設上器の掘り方、31・160～163はピット、他は覆土出土である。半隆起線文を施すもの、細い粘土紐貼り付け及び粘土紐に連続爪形文を施すもの、木口状燃糸文を施すもの、口縁部文様帶に隆脊を巡らし刺突をし燃糸压痕を施すもの、沈縫区画の磨消帶を施すものの、工字文を施すものである。29は深鉢形土器の胴上半で、地文はL R単節斜縫文（縦・横位回転）である。30は深鉢形土器の胴部で、地文はL R単節斜縫文（縦位回転）である。胴下部は地文を施した後にヘラで整形を行っている。

土製品（第102図31・32）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第87・88図44～49、第91図119）

44・45は石鏨、46・47は縦型石匙、48は削器状石器、49は磨製石斧、119は磨石である。他に剝片が多量に出土している。

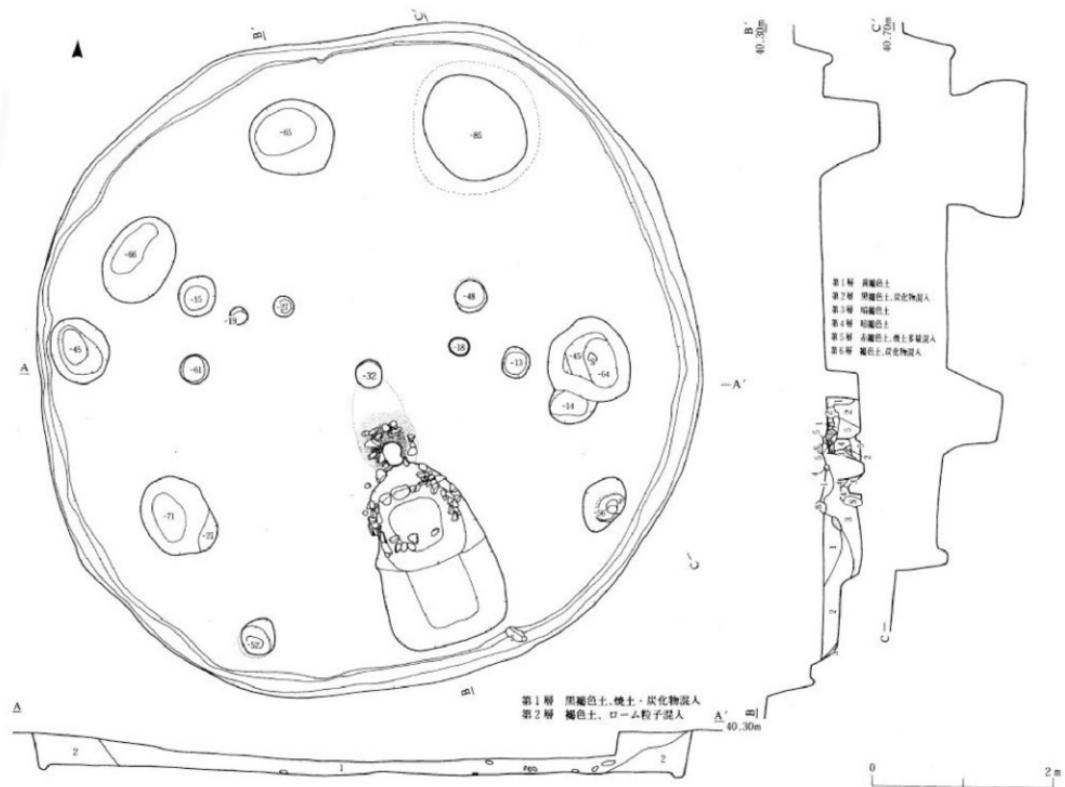
石製品（第118図5）

軽石に孔を穿ったものである。

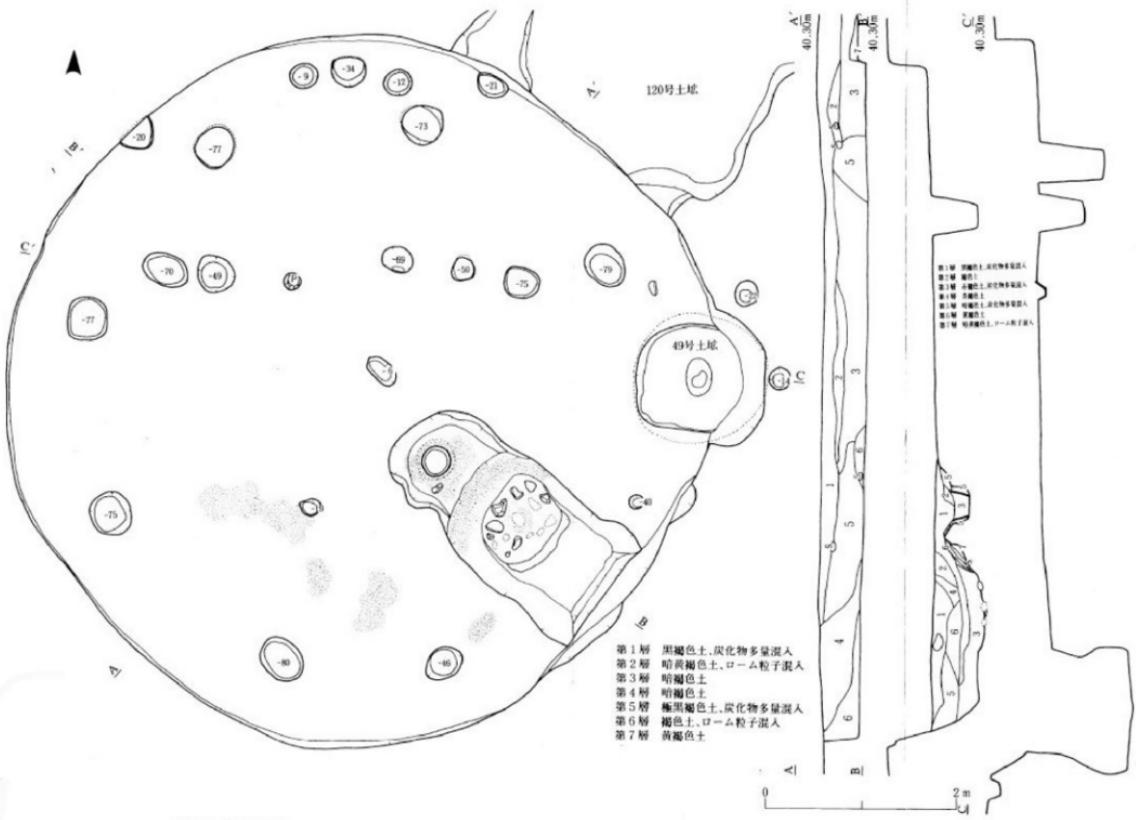
20号住居跡（第22図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。

プランは径7.3mのほぼ円形を呈し、49・120号土塗と重複する。確認面からの深さは40cmで、壁は垂直に立ち上がる。ピットは深い掘り方のものと浅い掘り方のものが検出され、深い掘り方6個



第21回 19号住居跡



第22図 20号住居跡

が主柱穴と考えられる。炉は石門土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胸部を倒立させて埋設してある。周辺が火熱を受け赤変し、焼けた石が1個確認された。石組部は底・側面が火熱を受けている。石は底面に数個組まれているが、抜き取った跡が確認された。掘り込みは一段浅く、壁に接する。床は平坦で、全体的に堅く、部分的に焼けた痕跡が認められた。住居跡の覆土には施棄された石が多量に混入していた。

出土遺物

土器（第44図32～35、第53・54図165～174）

32はがい埋設土器、35・168・171は炉石組部覆土、34はピット、他は廃土出土である。粘土組を満巻状に貼り付けるもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。32は胸部がやや膨らむ深鉢形土器である。口縁部より垂下する磨消帶の中程に匂状の貼り付けを施す。地文はR L 単節斜縫文（縦位回転）で、33は波状口縁をなす深鉢形土器で、地文はL R 単節斜縫文（縦位回転）である。34・35の地文はR L 単節斜縫文（縦位回転）である。

土製品（第102図33～36）

いざれも再利用土製品（内窓状土製品）である。

石器（第88図50～56、第91図120～123）

50～53は石鎚で50は両面にアスファルトが付着する。54は縦型石匙、55は削器状石器、56は磨製石斧、120～122は石皿、123はくぼみ石である。他に剝片が多量に出土している。

21号住居跡（第23図）

調査区南側、沢の縁辺部で検出された。

プランは長軸3.2m、短軸3.1mの橢円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁は北側がゆるく他はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出したが、柱穴は不明である。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は埋設土器が抜き取られている。石組部は全体的に火熱を受け側面に石組みが認められた。掘り込みは一段浅く壁に近くなる。また、炉の東側に火熱を受け赤変した部分と、石の認められる掘り込みがある。床は凹凸が著しい。

出土遺物

土器（第54図175～180）

すべて覆土出土である。粘土組を貼り付けその両側を沈線で調整するもの、沈線区画の磨消帯を施すもの、断面三角形の隆起線に2個1対の刻みを施すものである。

石器（第88図57～59、第91図124・125）

57は石鎚、58は縦型石匙、59は小形磨製石斧、124は石鍤、125は磨石である。他に剝片が少量出土している。

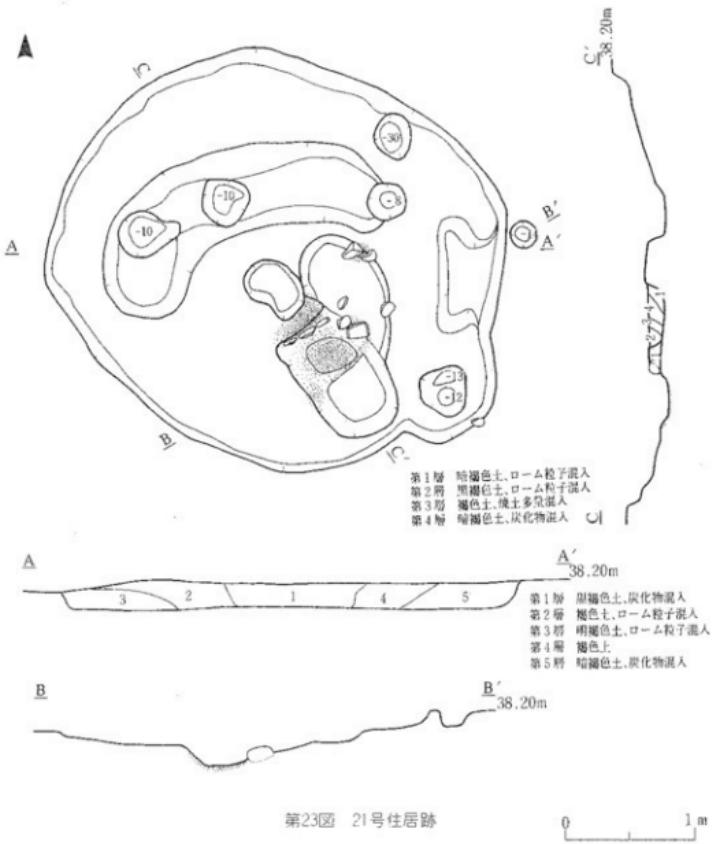
22号住居跡（第24図）

調査区南側、沢の縁辺部で検出された。

プランは長径3.1mの円形を呈し、南側が製鉄炉の周溝により切られ、西側が風倒木により破壊されている。確認面からの深さは20cmで、底はほぼ垂直に立ち上がる。幅15cm、深さ5cmの周溝が認められた。ピットは数個検出され、深い掘り方の4個（南西の柱穴は風倒木により破壊）が主柱穴と考えられる。炉は石團土器埋設部、敷石石組部、掘り込みからなる。石團土器埋設部は深鉢形土器の下半部を正立して埋設している。周辺は火熱を受け赤変している。敷石石組部は底・側面に石を組んでいる。掘り込みは一段浅く、周溝に接する。床はほぼ平坦で、堅い。

出土遺物

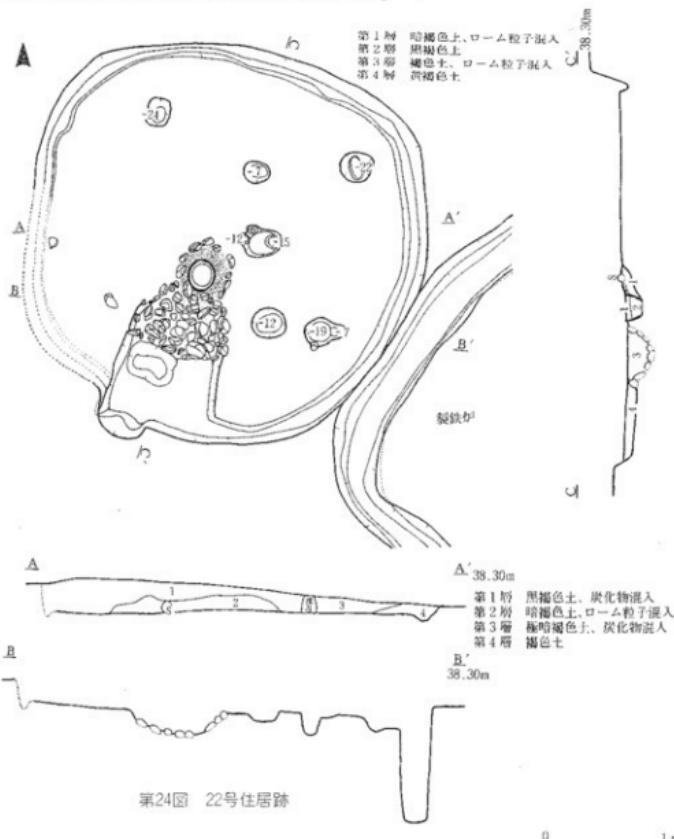
土器（第44図36、第54図181～186）



36は埋設土器、他は殷土出土である。沈線区画の磨滅帯を施すものである。36は深鉢形土器の下半部で、地文はL R 単節斜縄文（縱位回転）である。

(第88図60、第91図126)

60は石巣、126は3面に磨滅痕のみられる台石である。



23号住居跡 (第25図)

調査区南側の斜面で検出された。

プランは長軸4.3m、推定短軸3.5mを計る。18号住居跡同様西側にも掘り込みのみられる住居跡で、斜面ゆえに南側の壁は検出されず、86・87号土塙と重複する。確認面からの深さは北側で20cm

を計り、壁は垂直に立ち上がる。また、西側の掘り込みは15cmで、壁は垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、深い掘り方4個が主柱穴と考えられる。かほは石畳土器埋設部、敷石石組部、掘り込みからなる。石畳土器埋設部は深鉢形土器の上半分を正立して埋設してある。周辺は火熱を受け変容している。敷石組部は底、側面に石が組まれている。掘り込みは一段浅く、底面にピット・石が認められた。床は平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第45図37～39、第54図187～191）

39は炉埋設土器、他は覆土出土である。口縁部文様帯に捺条压痕及び隆起線の両側に捺条压痕を施すもの、沈縫区画の磨消帯を施すもの、隆起線に2個1対の刻みを施すものである。39は胸部がやや膨らむ深鉢形土器で、地文はLR単節斜縞文（継位回転）である。38は注口土器である。LR・RL縞文原体を使用しており、体中央部は羽状縞文となる。地文を施した後に磨消しを行い、頸部に瘤が4個、体中央部に刻みのある瘤が3個付く。

石器（第88図61）

磨製石斧である。他に剣片が9点出土している。

24号住居跡（第26図）

調査区北側で検出された。

プランは長軸2.3m、短軸2.1mのほぼ病円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁は垂直に立ち上がる。ピットは炉の北側に1個検出されただけである。炉は石畳土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。石畳土器埋設部は深鉢形土器の胴上部を正立てして埋設し、周辺は火熱を受け変容している。石組部は底面が火熱を受け、埋設土器との間に平らな石を配し、南側に拳大の石を組んでいる。掘り込みはゆるく立ち上がり、壁に接する。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第45図40、第54図192）

40は炉埋設土器、192は覆土出土である。40は口縁部がやや外傾する深鉢形土器で、沈縫区画の磨消帯を施す。地文はRL単節斜縞文（継位回転）であるが、施文方法が特徴的である。

石器（第92図127）

磨石である。他に剣片が3点出土している。

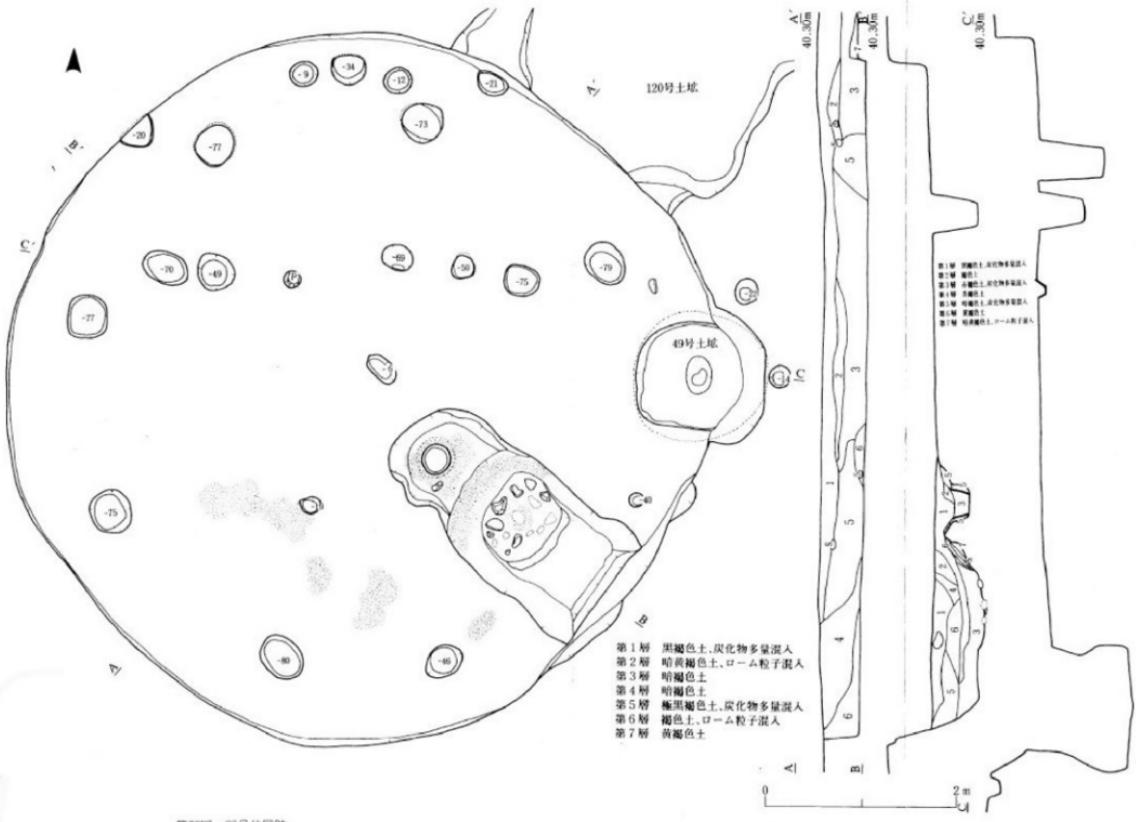
25号住居跡（第27図）

調査区北側で検出された。

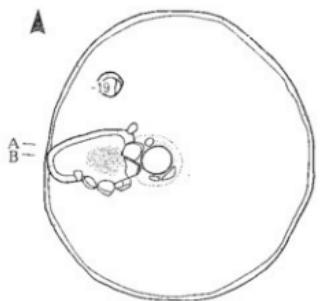
プランは径約3.5mの円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁は垂直に立ち上がる。ピットは住居内に3個、外側に1個検出されたのみである。かほは検出されない。床は平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第54図193～197）



第22回 20号住居跡



A 第1層 褐色土
第2層 暗褐色土 40.00m
B

第1層 暗褐色土、炭化物多量混入
第2層 褐色土、炭化物少量混入 40.00m
B'

第26図 24号住居跡 0 1 m

全て覆土出土である。半隆起線でもって文様を作り出すもの、刻線を網目状に施すもの、木目状燃条文を施すもの、沈縫区画の磨消帶を施すものである。

土製品（第102図37）

再利用上製品（円盤状土製品）である。

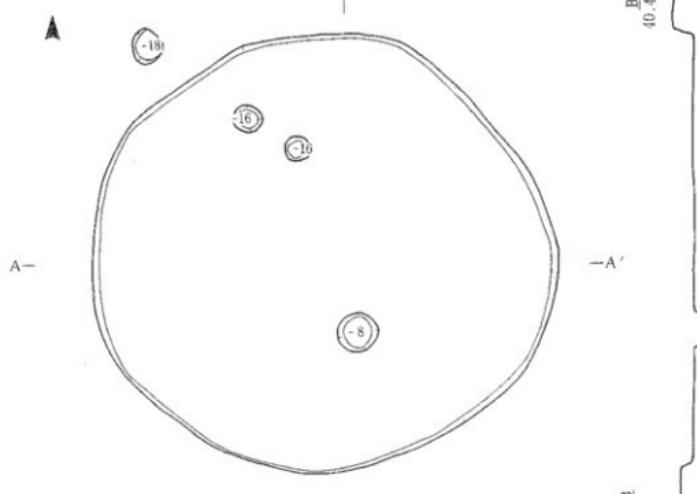
石器（第88図62）

縦型石匙である。他に剝片が3点出土している。
26号住居跡（第28図）

調査区北側で検出された。

プランは長軸2.7m、短軸2.1mの梢円形を呈し確認面からの深さは8cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北側の一部は判然としない。ヒットは3個のみの検出である。炉は検出されない。床は

40.40m



A 第1層 暗褐色土、炭化物混入
第2層 褐色土、ローム粒子混入
第3層 黄褐色土

A' 40.40m

第27図 25号住居跡 0 1 m

平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第54図198）

覆土出土で、沈線区画の

磨消帯を施すものである。

土製品（第102図38）

再利用土製品（円盤状上

製品）である。

27号住居跡（第29図）

調査区西側の斜面で検出

された。

プランは直径4.5mのほぼ

円形を呈し、確認面からの

深さは15cmで、壁はほぼ直

に立ち上がる。ピットは

数個検出され、深い掘り方

の4個が主柱穴と考えられ

る。炉は石器埋設部、

石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は切り合が認められた。古い埋設土器の上部に、新たに深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺は火熱により赤変している。石組部は側面に石が組まれている。掘り込みは一段浅く、壁に接する。不整形を呈し底面には凹凸がみられるが、擾乱を受けたとも考えられる。床は平坦であるが、地山の礫が露出していた。

出土遺物

土器（第46図41・42、第54図199）

41(新)・42(旧)は炉埋設土器、199は覆土出土である。41・42は沈線区画の磨消帯を施すものである。41は深鉢形土器の胴部で、地文はR L 単節斜縞文（縦位回転）である。42は口縁部がやせ外傾する深鉢形土器で、地文はL R 単節斜縞文（縦位回転）である。199は粘土紐を貼り付けその両側を沈線で調整するものである。

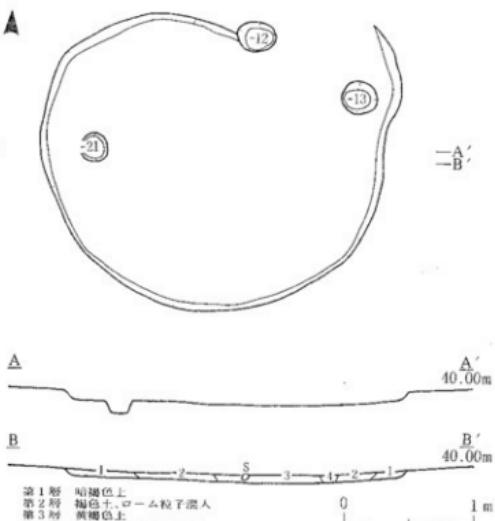
石器（第88図63・64）

63は縦型石匙、64は削器状石器である。他に剝片が数点出土している。

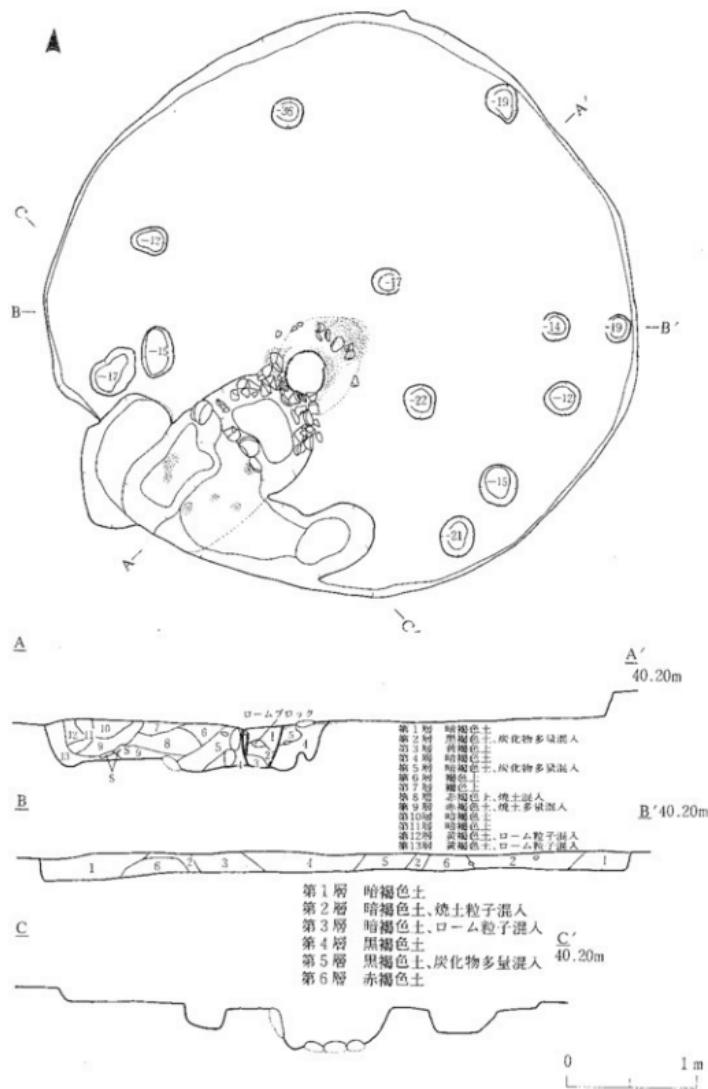
28号住居跡（第30図）

調査区西側で検出された。

プランは長軸7.4m、短軸6.7mの梢円形を呈し、119号土塙と重複し、南側は風倒木による擾乱を



第28図 26号住居跡



第29図 27号住居跡

受けている。確認面は北側が30cmを計り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは深い掘り方のもの、浅い掘り方のものが多数検出され、深い掘り方の6個が主柱穴と考えられる。これは石器埋設部、石組部、掘り込みからなる。石器埋設部は、胴部がやや膨らむ深鉢形土器を正立して埋設し、周辺は火熱により赤変している。石組部は底・側面が火熱を受けている。石はまばらであるが、抜き取ったと考えられる。掘り込みは一段浅く壁に近くなる。床は平坦で、全面的に堅いが、地山の縫隙が露出していた。

出土遺物

土器（第46図43～45、第55図200～211）

43は炉埋設上器、210は床面、206はビット、他は覆土出土である。細い粘土紙を貼り付けるもの、半隆起線文を施すもの、沈線区画の磨消帯を施すもの、平行沈線文の施すものである。43は胴部がやや膨らむ深鉢形土器である。口縁部より垂下する磨消帯の下方を沈線で印め地文を残している。地文はR L 単節斜縞文（縦位回転）である。44は三脚付土器底部である。45は波状口縁をなし、頭部に段をもつ鉢形土器で、地文はL R 単節斜縞文（縦・斜位回転）である。211はいわゆる捲縞文（付加条）である。

土製品（第100図1、第102図40）

1は無節斜縞文の施された土偶である。40は再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第88・89図65～72、第92図128・129）

65は石巖、66～68は石錐、69は撥形状石器、70は搔器、71は削器状石器、72は磨製石斧、128は石皿、129は磨面のある台石である。他に剥片が多量に出土している。

石製品（第118図3）

細長い自然石の両端に、両面から孔を穿ったものである。装飾品と考えられる。

29号住居跡（第31図）

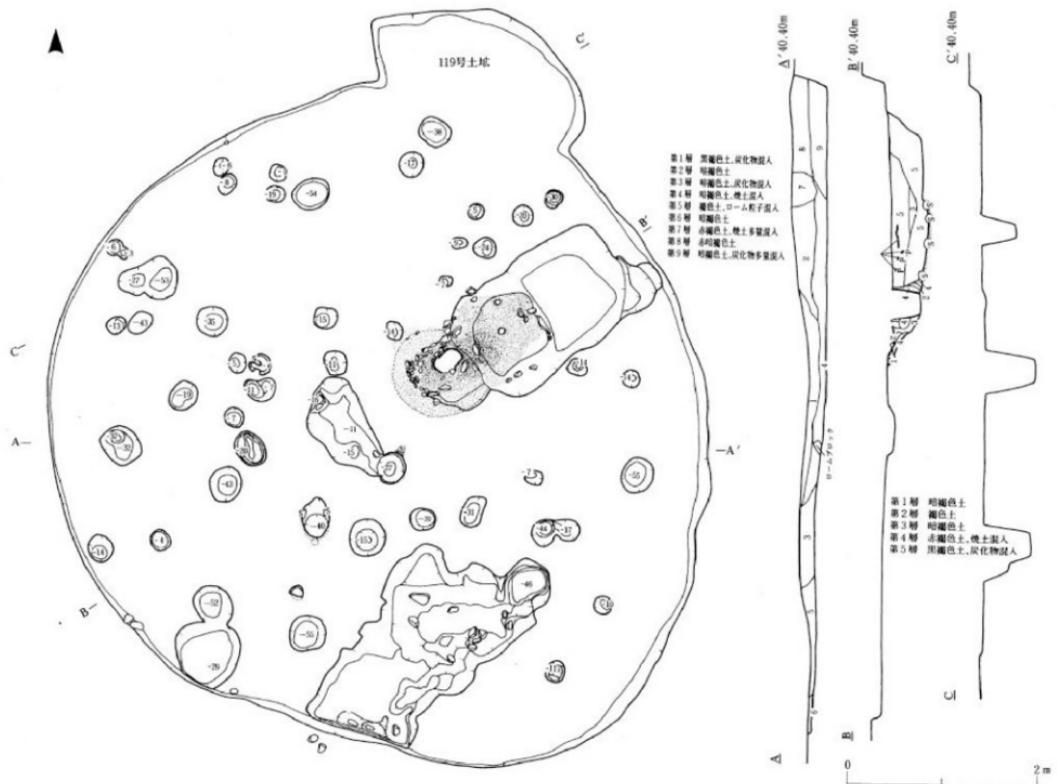
調査区西側の斜面で検出された。

プランは長軸4.1m、短軸3.7mの梢円形を呈し、34号住居跡と重複する。確認面からの深さは北側で40cmを計り、壁は垂直に立ち上がる。ビットは数個検出され、深い掘り方4個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は埋設土器が抜き取られ、焼けた痕跡のみが認められた。石組部は底・側面が火熱を受けている。石は底面に1個、側面に数個組まれているが、抜き取られたと考えられる。掘り込みは一段浅く、壁に接する。床は平坦で、全面的に堅いが、地山の縫隙が露出している。

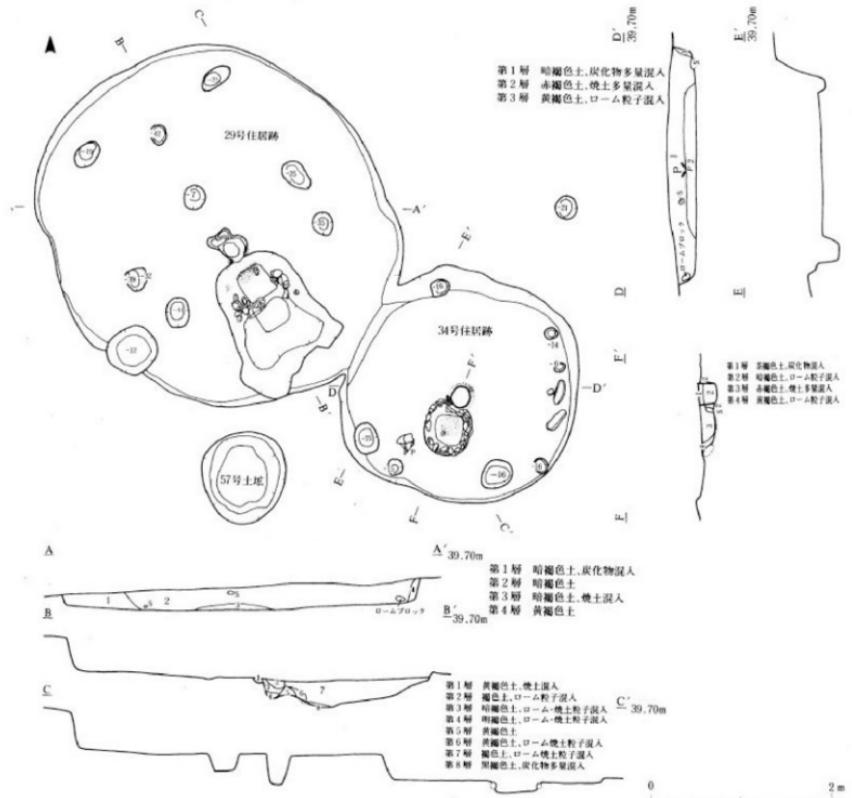
出土遺物

土器（47図46・49、第55図212～215）

全て覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すもの、また磨消帯に稜線がみられるものもある。46は口縁部がゆるく外傾する鉢形土器で、磨消帯を稜線で画している、磨消部にベニガラが塗布さ



第30图 28号居住跡



第31図 29・34号住居跡

れ、地文はL-R単節斜縞文（鏡位回転）である。

土製品（第102図41）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

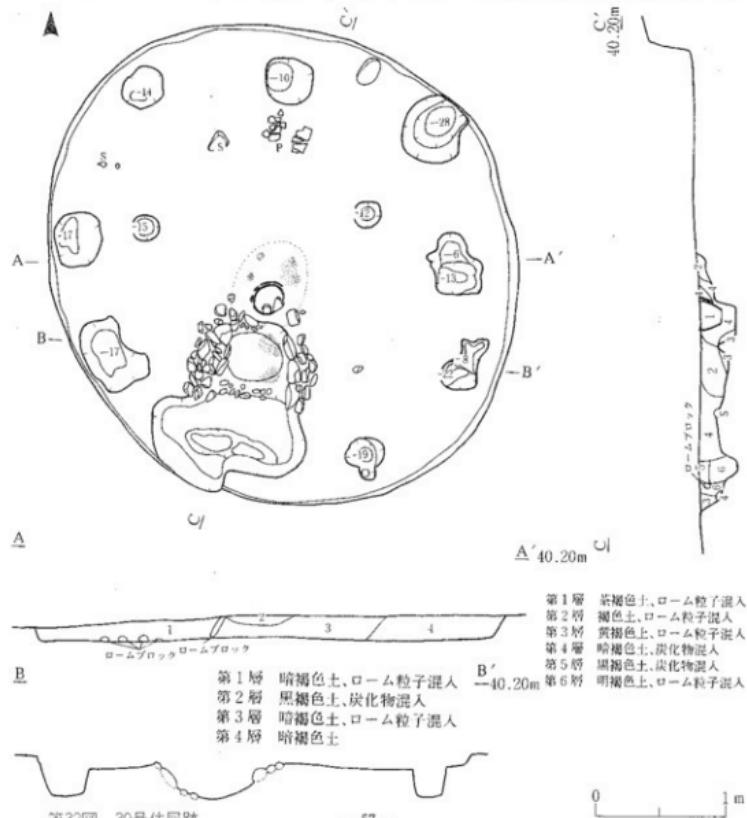
石器（第89図73～75）

73は石塙、74は搔器状石器、75は削器状石器である。他に剝片が多量に出土している。

30号住居跡（第32図）

調査区西側の斜面、沢の縁辺部で検出された。

プランは長軸4m、短軸3.6mの梢円形を呈し、確認面からの深さは北側で35cmを計り、壁はほぼ直立に立ち上がる。ピットは数個検出され、壁際の4個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は、二重（二個体）に埋設し、周辺は火熱を受けている。



石組部は底面が火熱を受け、側面に石が組まれている。掘り込みは一段浅く、壁に接する。また、不整形を呈し底面に凹部がみられるが擾乱の可能性も考えられる。床はほぼ平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第47図47・48・51、第55図216・217）

47（内側）・48（外側）は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すもの、カキ目が施されるものである。47は口縁部が内渦する鉢形土器で、地文は0段多条の複節斜縞文（縦位回転）である。48は深鉢形土器の胴部で、地文はL R 単節斜縞文（縦位回転）である。51は深鉢形土器の胴下部で梯状工具で直線、曲線にカキ目を施す。

石器（第89図76）

横型石匙である。他に剝片が数点出土している。

31号住居跡（第33図）

調査区西側の斜面、沢の縁辺部で検出された。

プランは径3.7mのほぼ円形を呈し。確認面からの深さは北側で50cmを計り、隨はほぼ垂直に立ち上る。ピットは數個検出されたが、規則的でない。炉は石圓土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。石圓土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺が火熱を受け赤変し、二～三重に石を組んでいる。石組部は底面が火熱を受け、数個の石が組まれている。掘り込みは石組部と同じレベルである。床は平坦で、全面的に堅い。床の一部及びピットの外周に焼けた痕跡がある事や、覆土に多量の燒土・炭化物が認められた事などから火災住居の可能性がある。

出土遺物

土器（第47図50、第55図218～223）

50は炉埋設土器、他は覆土出土である。口縁部文様帶に燃系圧痕及び降帶の両側に燃系圧痕を施すもの、粘上縁を貼り付けその両側を沈線で調整するもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。50は深鉢形土器の胴部で、地文はR L 単節斜縞文（縦位回転）である。223はいわゆる楓巻縞文（付加条）である。

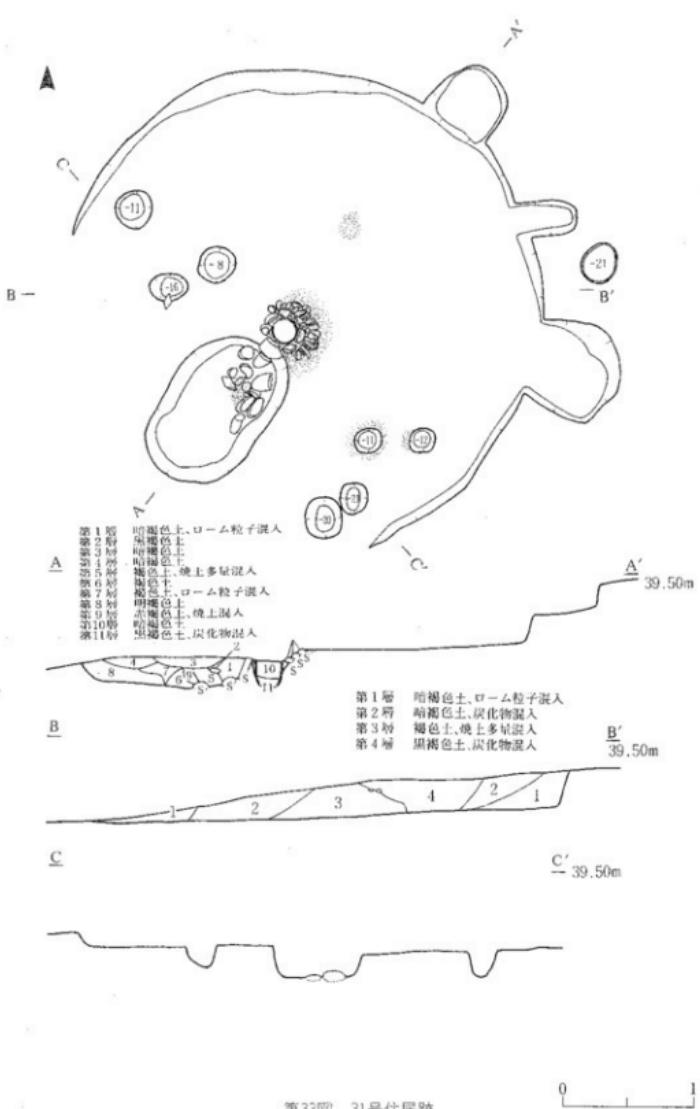
石器（第89図77～82）

77～80は石匙で、77の片面にはアスファルトの付着が認められる。81は横型石匙、82は換形状石器である。他に剝片が多量に出土している。

32号住居跡（第34図）

調査区中央部で検出された。

プランは径5.8mのほぼ円形を呈し、106・107号土塹と重複する。確認面からの深さは30cmで、随はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは數個検出され、深い掘り方の5個が主柱穴と考えられる。炉は西側と北側に検出された。西側の炉は土器埋設部、掘り込み、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は埋設土器が抜き取られ、周辺には火熱を受けた痕跡が認められた。掘り込みは底・側面が火



第33図 31号住居跡

熱を受けている。一段浅い掘り込みは不整形を呈する。北側のものは土器埋設部、掘り込み、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は先に住居の中央側に埋設した土器を抜き取り、新たに北側に深鉢形土器の上半分を正立して埋設している。周辺に火熱を受け、石が1個認められた。また、古い土器埋設部の底面には、埋設土器の破片が残っていた。掘り込みは底・側面が火熱を受け、古い炉の掘り込みも認められた。一段浅い掘り込みは不整形を呈し、壁に近くなる。床は平坦で、全体的に堅い。覆土に礫を含むロームが多量に堆積しており、107号土塙及び60号土塙の掘り方の土を捨てたと考えられる。

出土遺物

土器（第48図52、第55・56図224～231）

52はが埋設土器、他は覆土出土である。細い粘土紐を貼り付けるもの、撚糸圧痕の施されるもの沈線区画の磨消耗を施すもの、工字文の施されるものである。52は口縁部がやや聞く深鉢形土器で頸部に一条の沈線が巡る。地文はR L 単節斜櫛文（継位回転）である。

土製品（第102図42）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第89図83～85）

83は石礫で両面にアスファルトの付着が認められる。84は石錐、85は磨製石斧である。他に剥片が多量に出土している。

33号住居跡（第35図）

調査区南側の緩斜面で検出された。

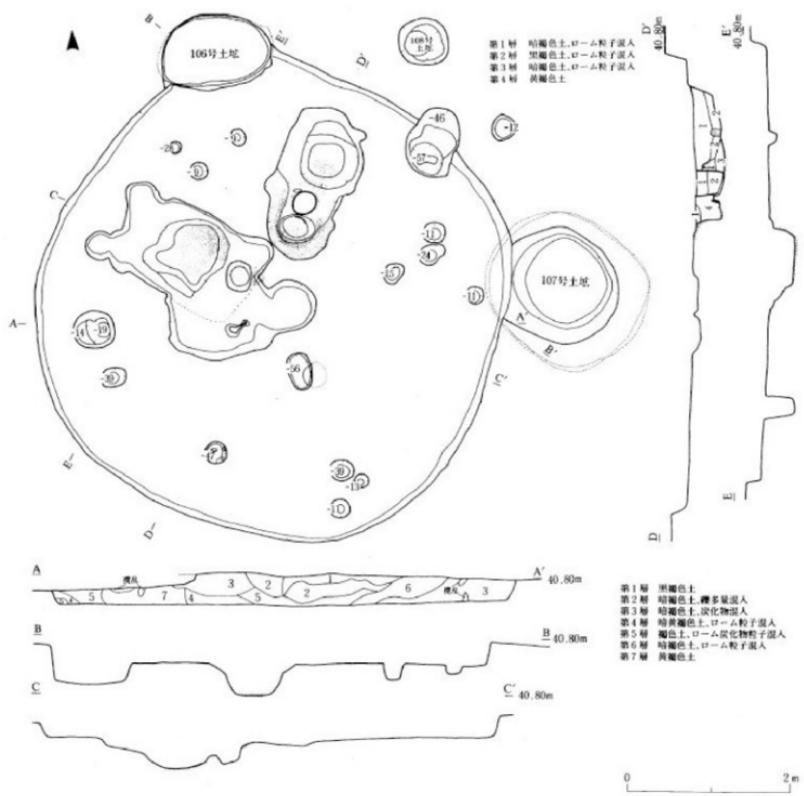
プランは径5.5mのほぼ円形を呈し、118号土塙と重複する。確認面からの深さ北側で35cmを計り壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、深い掘り方6個が主柱穴と考えられる。炉は上器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の下半分を正立してやや斜めに埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底面が火熱を受け、西側面と南底面に石が組まれている。掘り込みは一段浅く、壁に接する。幅広の不整形を呈するが、斜面である為に検出状況は良くなかった。床は若干凹凸が見られ、地山の縫隙が露出していた。

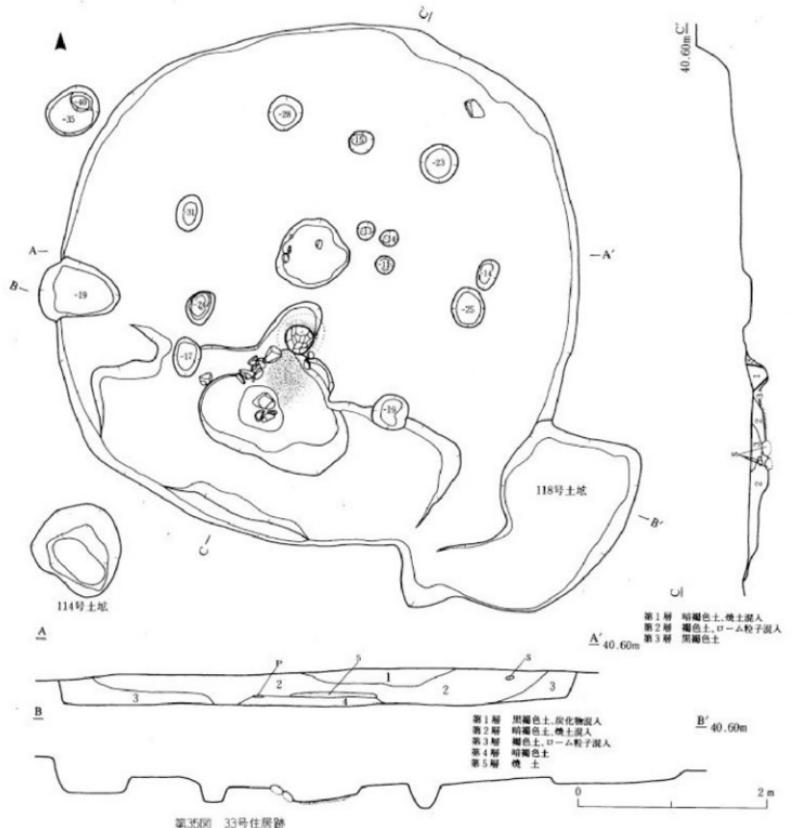
出土遺物

土器（第48図53～55、第55図232～248）

54は炉埋設土器、他は覆土出土である。口縁部文様帶に撚糸圧痕及び隆起線の両側に撚糸圧痕を施すもの、隆起線文を施すもの、沈線区画の磨消耗を施すもの、断面三角状の隆起線に2個1対の刻みを施すもの、網目状撚糸文の施されるもの、刻線を網目状に施すもの、カキ目を施すものである。54は胸部に膨らみのある深鉢形土器で、地文はR L 単節斜櫛文である。53は手づくね土器。54は小形の変形土器である。

土製品（第100図2、第102図43・44）





2は刺突を施す上側で、性器と思われる盛り上がりを貼り付けている。43・44は再利用土製品(円盤状土製品)である。

石器 (第89図86~94、第92図130・131)

86~87は石鏃、89は石錐、90・91は縦型石匙、99は横型石匙、93・94は搔器、130はくぼみ石、131は石鉗である。他に網片が多量に出土している。

34号住居跡 (第29図)

調査区南側の緩斜面で検出された。

プランは径2.5mの円形を呈する。29号住居跡と重複し上層断面等で明確な新旧関係をつかむ事が出来なかったが本住居が切っていると考えられる。確認面からの深さは北側で50cmを計り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数箇検出され、壁際の4個が柱穴と考えられる。炉は上器埋設部と石組部からなる。上器埋設部は深鉢形土器を正立して埋設し、周辺が火熱を受け赤変している。石組部は底面が火熱を受け、側面に石が組まれている。床は平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器 (第49図56~58、第56図249~251)

56は炉埋設土器、57はピット、58は床面、他は覆土出土である。粘土紐を貼り付けその両側を沈線で調整するもの、沈線区画の磨消帶を施すものである。56は口縁部がやや聞く深鉢形土器で、地文はR L 単節斜縫文(縦位回転)である。57は口縁部が外傾する鉢形土器で、地文はR L 単節縫文(縦位回転)である。58は胴部にやや膨らみのある深鉢形土器で、胴部にR L 単節斜縫文(縦位回転)が施される。

石器 (第90図95、第92図132~134)

95は石錐、132はくぼみ石、133は石皿状石器、134は磨石である。他に網片が少量出土している。

35号住居跡 (第36図)

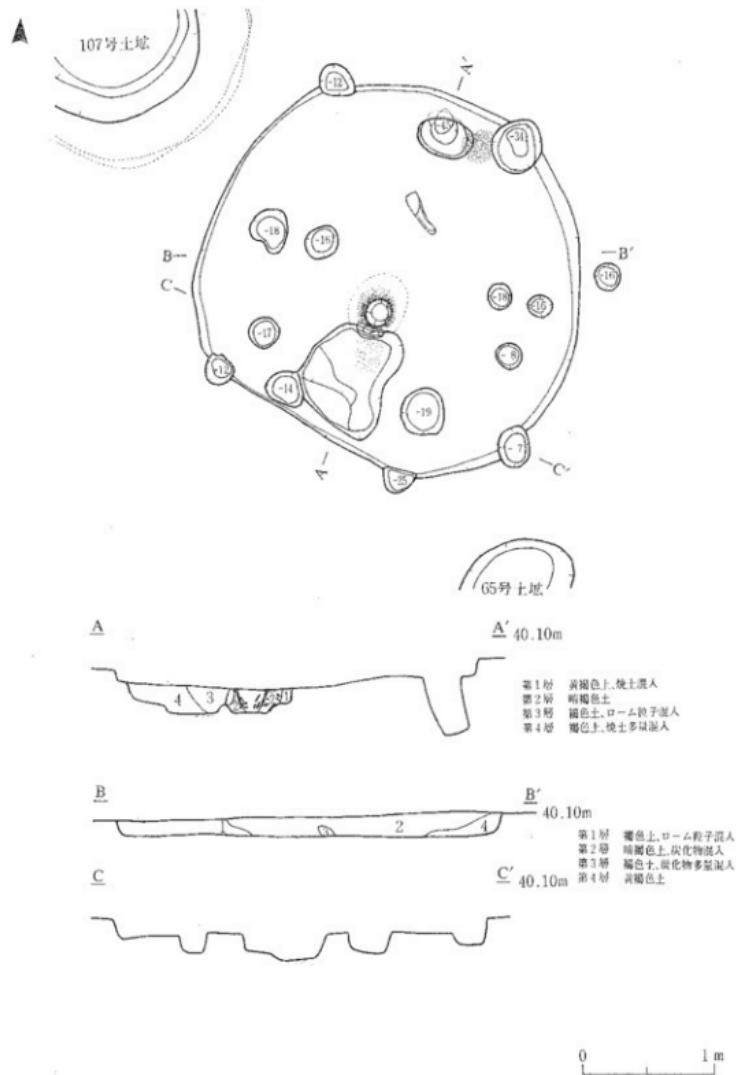
調査区中央部で検出された。

プランは径3 mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数箇検出され、壁際の4個が柱穴と考えられる。炉は上器埋設部、石組部、掘り込みからなる。上器埋設部は鉢形土器の上半部を正立して埋設し、周辺が火熱を受けている。石組部は底が火熱を受け、埋設土器との間に厚味のある平らな石を据えてある。掘り込みは一段浅く、壁に近くなる。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器 (第49図59・60、第56図252~254)

59は炉埋設土器、60はピット、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帶を施すものである。59は口縁部が内湾する鉢形土器、地方はR L 単節斜縫文(縦位回転)である、60はR L R複節斜縫文(縦位回転)を施し、底部に網代模をもつ。



第36図 35号住居跡

石器（第90図96）

縦型石匙である。他に剝片が数点出土している。

36号住居跡（第37図）

調査区東側で検出された。

プランは長軸2.7m、短軸2.4mの橢円形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上る。ピットは数個検出されたが、柱穴は不明である。かは土器埋設部と掘り込みからなる。土器埋設部は鉢形土器（復元不可）

を埋設し、周辺が火熱を受けて赤変している、掘り込みは橢円形を呈し、ピットが認められる。また、かの北東側にも土器埋設かが検出され、周辺が火熱を受け赤変している。床は一部に凹凸が認められたが、他は平坦である。

出土遺物

土器（第56図255・256）

いずれも覆土出土で、沈線区画の磨消帶を施すものである。

石器（第90図97）

縦型石匙である。他に剝片が4点出土している。

37号住居跡（第38図）

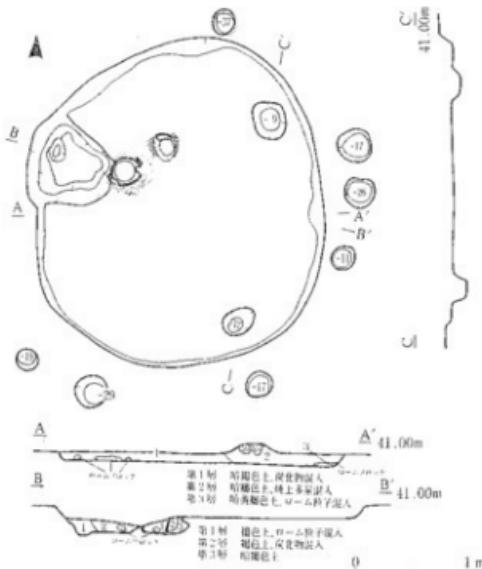
調査区西側の斜面で検出された。

プランは径2.5mのほぼ円形を呈するが、南壁は斜面ゆえに検出されなかった。確認面からの深さは北側で30cmを計り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出されたが、柱穴は不明である。かは土器埋設部と、掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を輪切りにして埋設し、周辺が火熱を受け赤変している。掘り込みはほぼ円形を呈し、深さ13cmを計る。床は平坦であるが、地山の礫が露出していた。

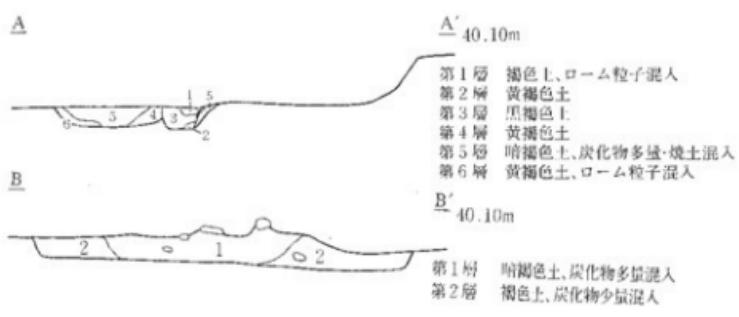
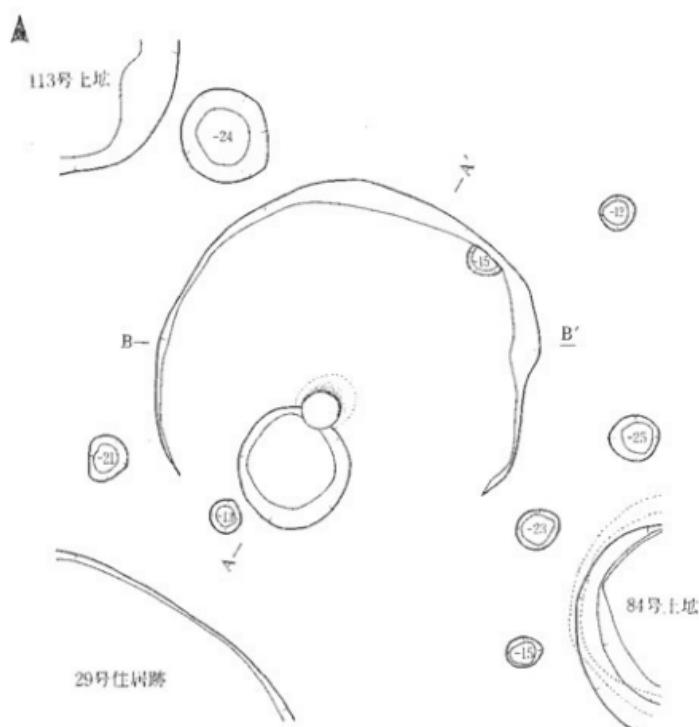
出土遺物

土器（第49図61、第56図257・258）

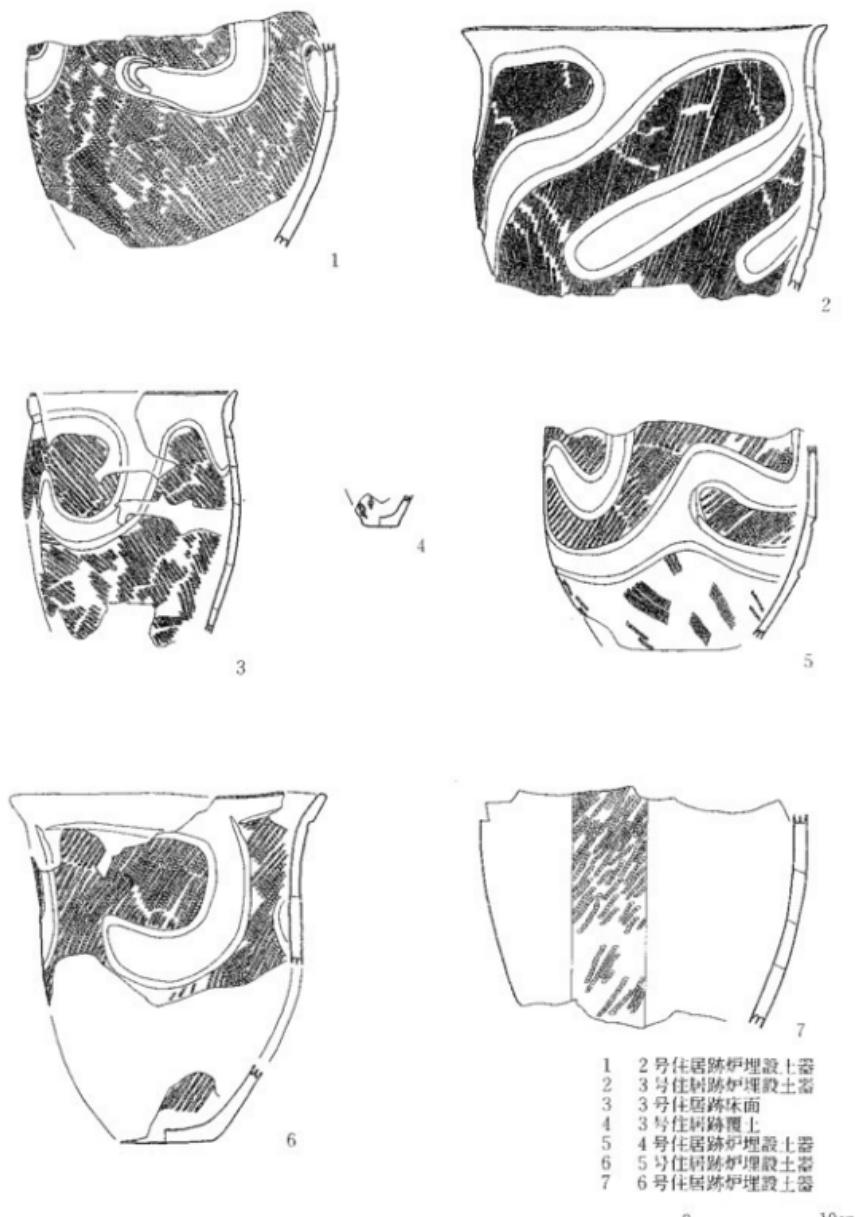
61は灰埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帶を施すものである。61は深鉢形土器の胴部で、R L 単節斜縞文（縦位回転）が施される。



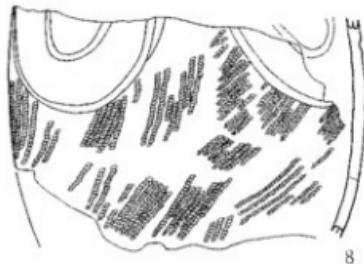
第37図 36号住居跡



第36図 37号住居跡



第39図 造構内出土土器



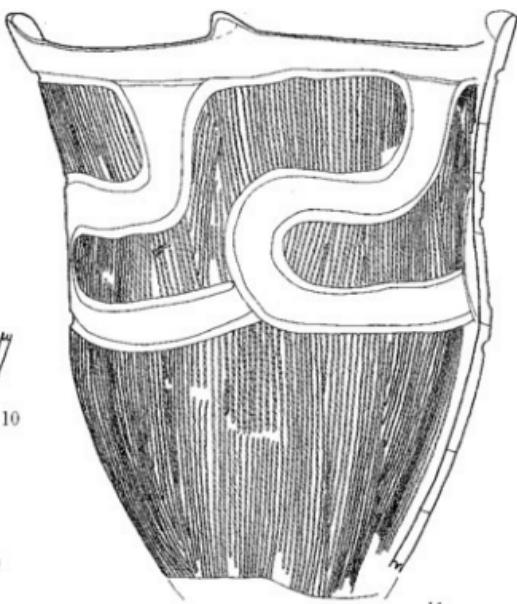
8



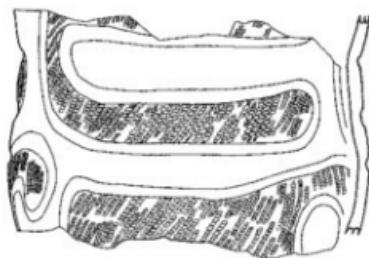
9



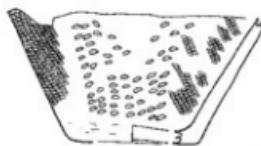
10



11



12



13

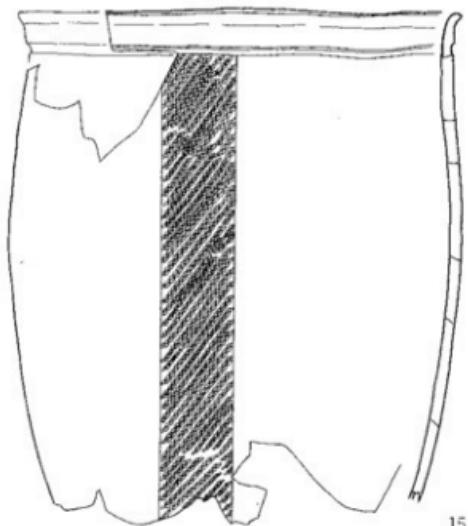


14

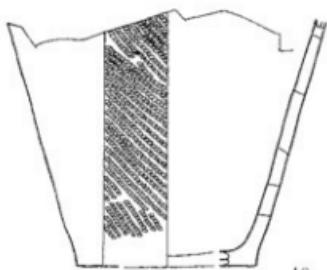
- | | |
|------|-------------|
| 8 | 7号住居跡炉埋設土器 |
| 9·10 | 8号住居跡覆土 |
| 11 | 8号住居跡炉埋設土器 |
| 12 | 9号住居跡炉埋設土器 |
| 13 | 10号住居跡炉埋設土器 |
| 14 | 11号住居跡炉埋設土器 |

0 10cm

第40図 遺構内出土土器



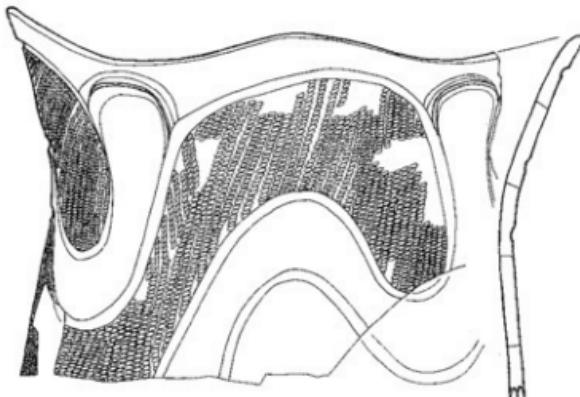
15



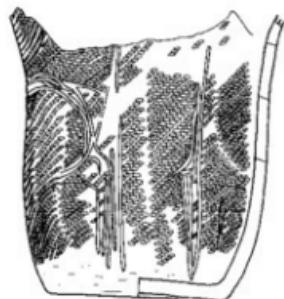
16



17



18

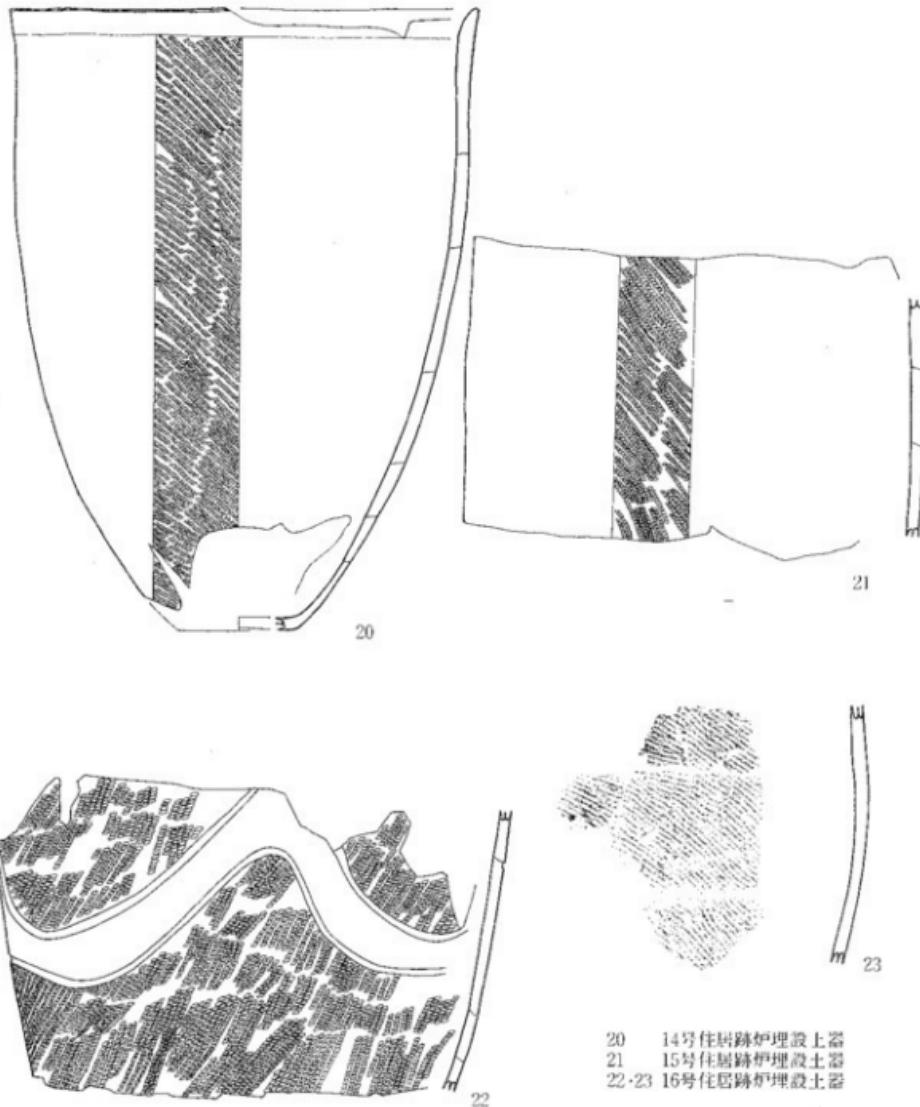


19

- 15-16 12号住居跡炉埋設土器
17 12号住居跡覆土
18 12号住居跡床面
19 13号住居跡炉埋設土器



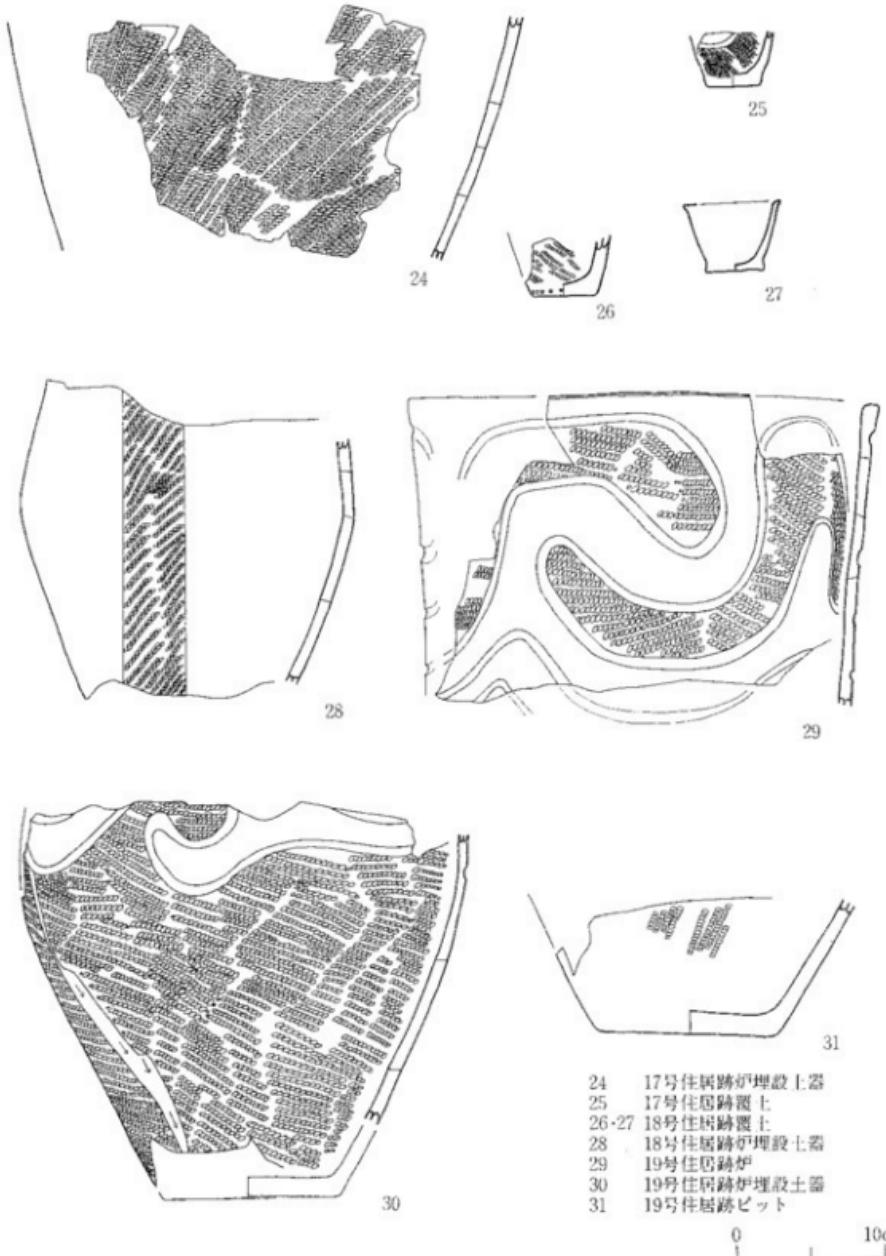
第41図 造構内出土土器



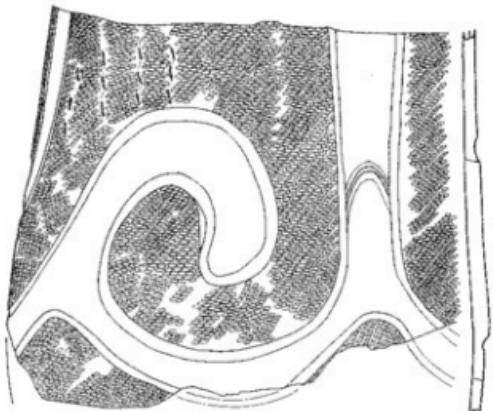
20 14号住居跡炉埋設土器
21 15号住居跡炉埋設土器
22・23 16号住居跡炉埋設土器

0 10cm

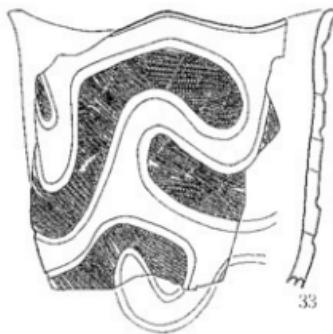
第42図 遺構内出土土器



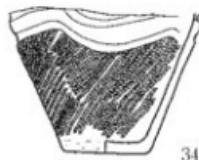
第43図 遺構内出土土器



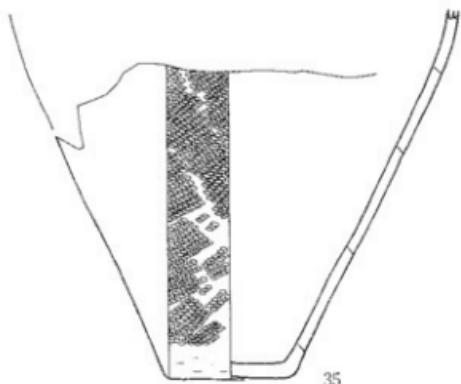
32



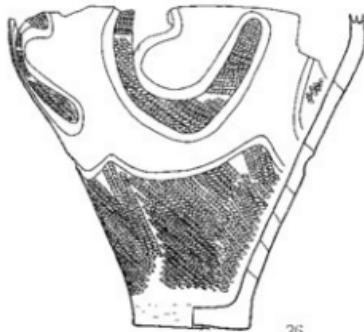
33



34



35

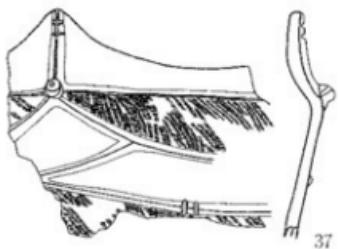


36

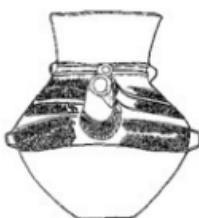
- 32 20号住居跡埋設土器
 33 20号住居跡覆土
 34 20号住居跡ピット
 35 20号住居跡炉石組部覆土
 36 22号住居跡埋設土器



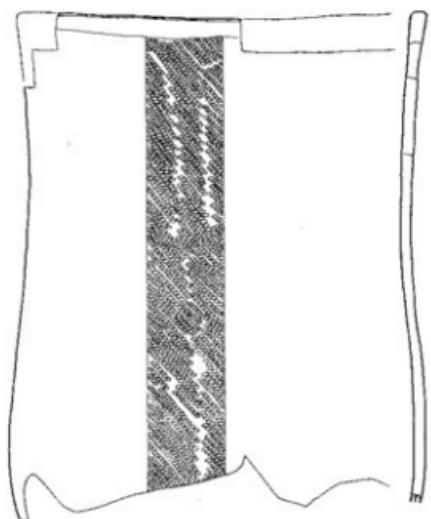
第44図 遷構内出土土器



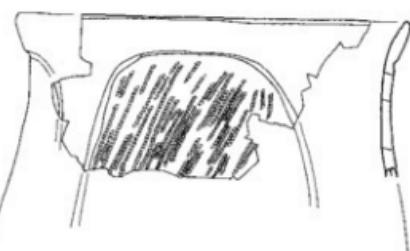
37



38



39

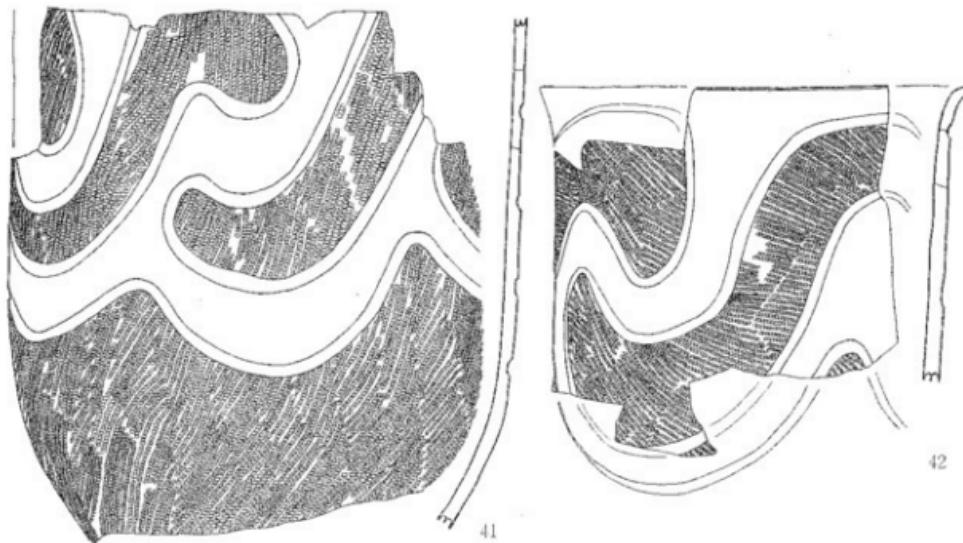


40

37・38 23号住居跡覆土
39 23号住居跡炉埋設土器
40 24号住居跡炉埋設土器

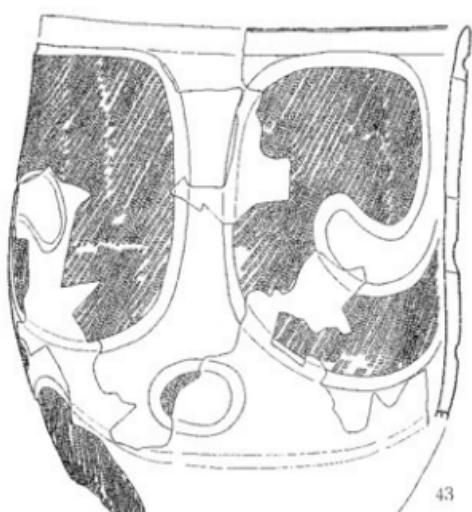


第45図 遺構内出土土器

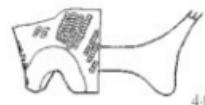


41

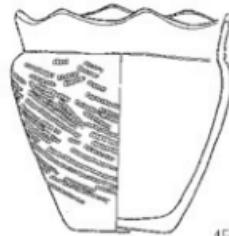
42



43



44

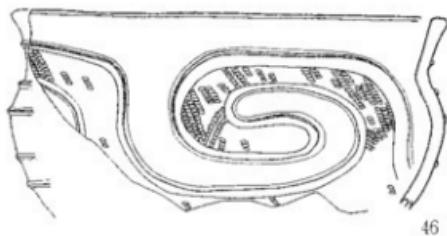


45

- 41 27号住居跡埋設土器
 42 27号住居跡埋設土器
 43 28号住居跡埋設土器
 44-45 28号住居跡覆土



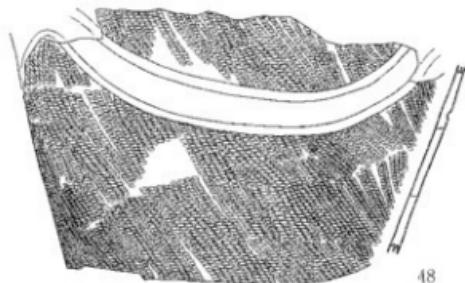
第46図 遺構内出土土器



46



47



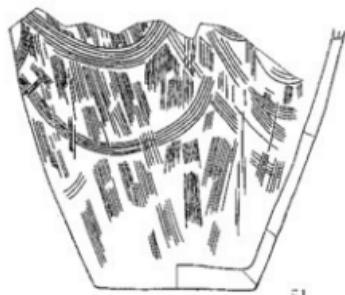
48



49



50

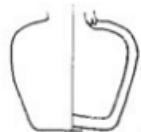
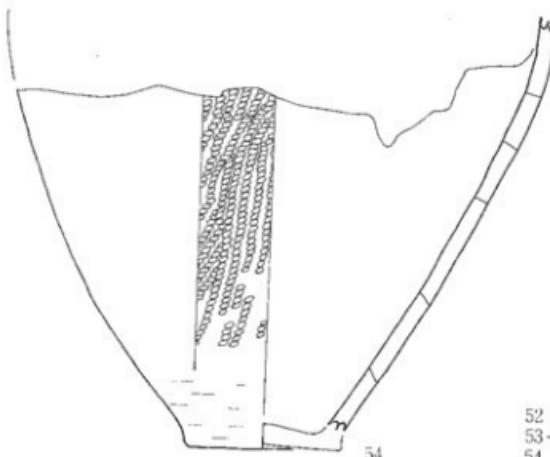
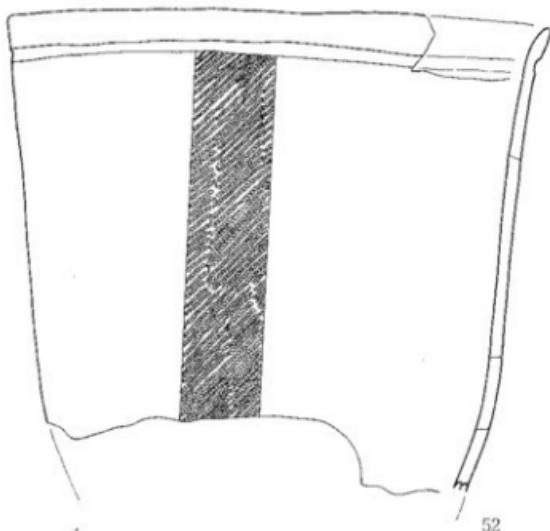


51

46-49 29号住居跡覆土
47-48 30号住居跡炉埋設土器
50 31号住居跡炉埋設土器
51 30号住居跡覆土



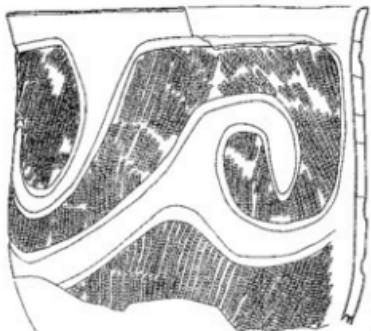
第47圖 通柄內出土土器



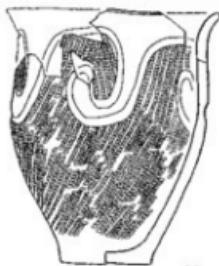
52 32号住居跡炉埋設土器
53・55 33号住居跡覆土
54 33号住居跡炉埋設土器



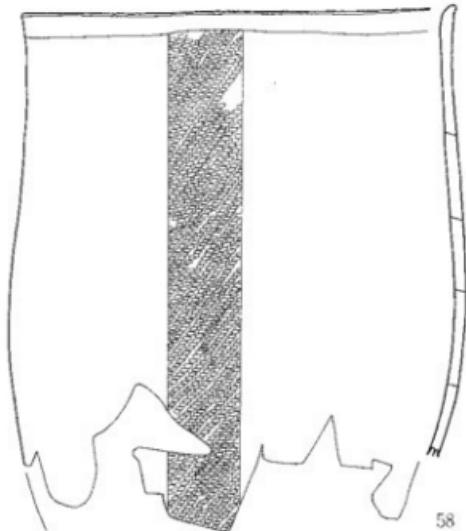
第48図 遺構内出土土器



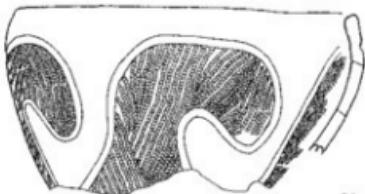
56



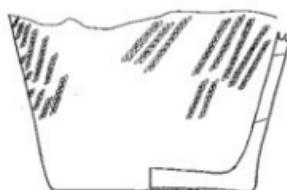
57



58



59



60



61

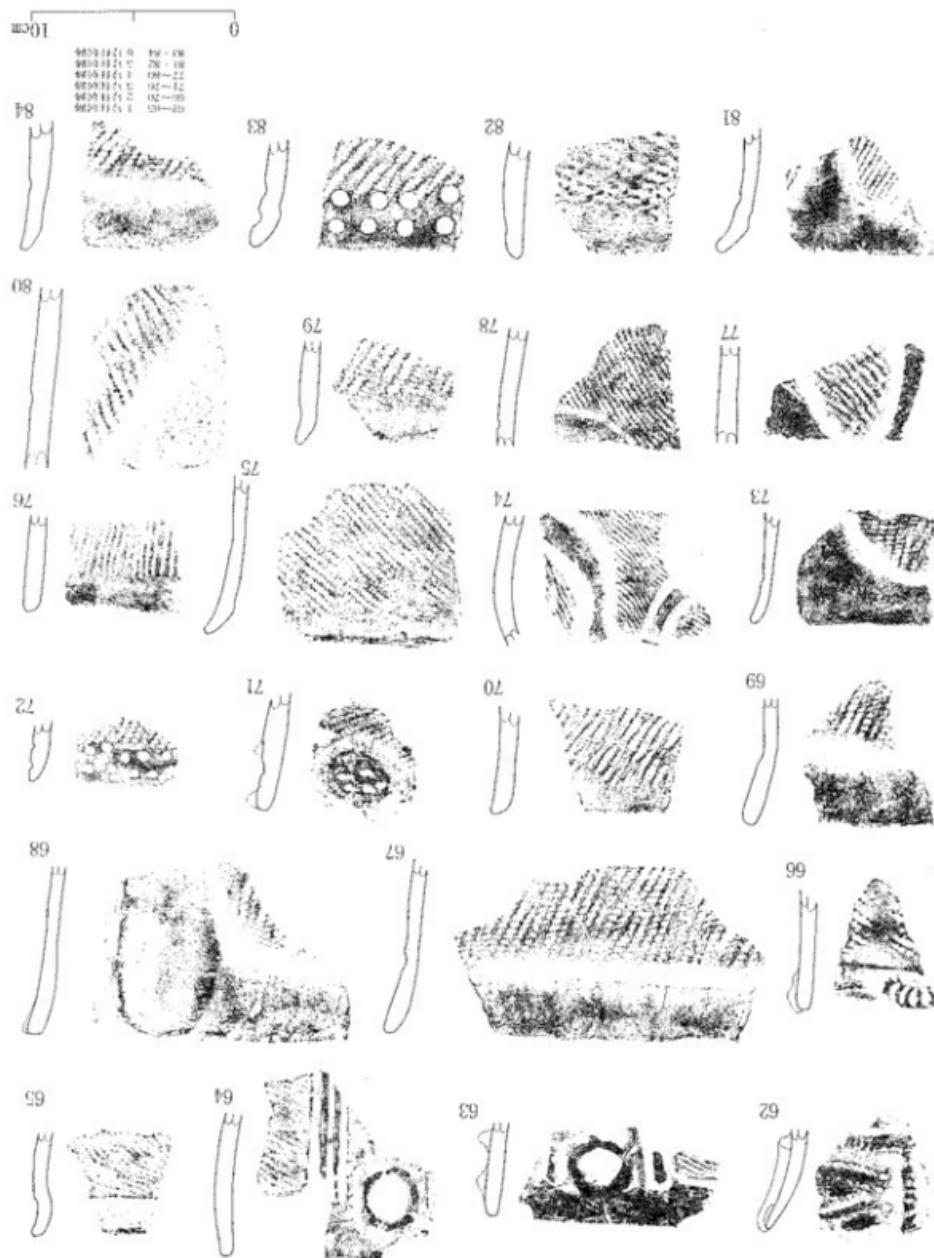


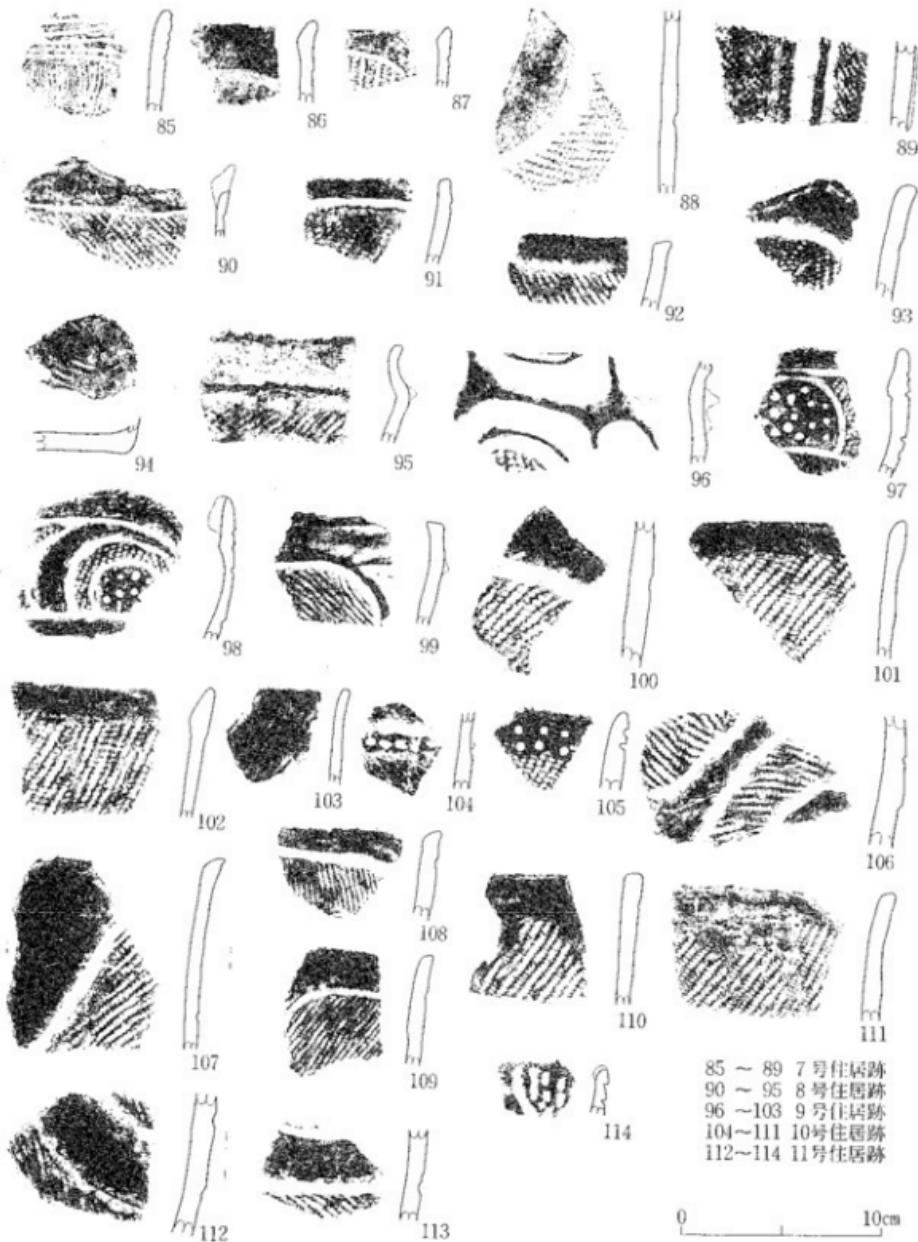
- 34号住跡炉埋設土器
34号住跡ピット
34号住跡床面
35号住跡炉埋設土器
35号住跡ピット
37号住跡炉埋設土器



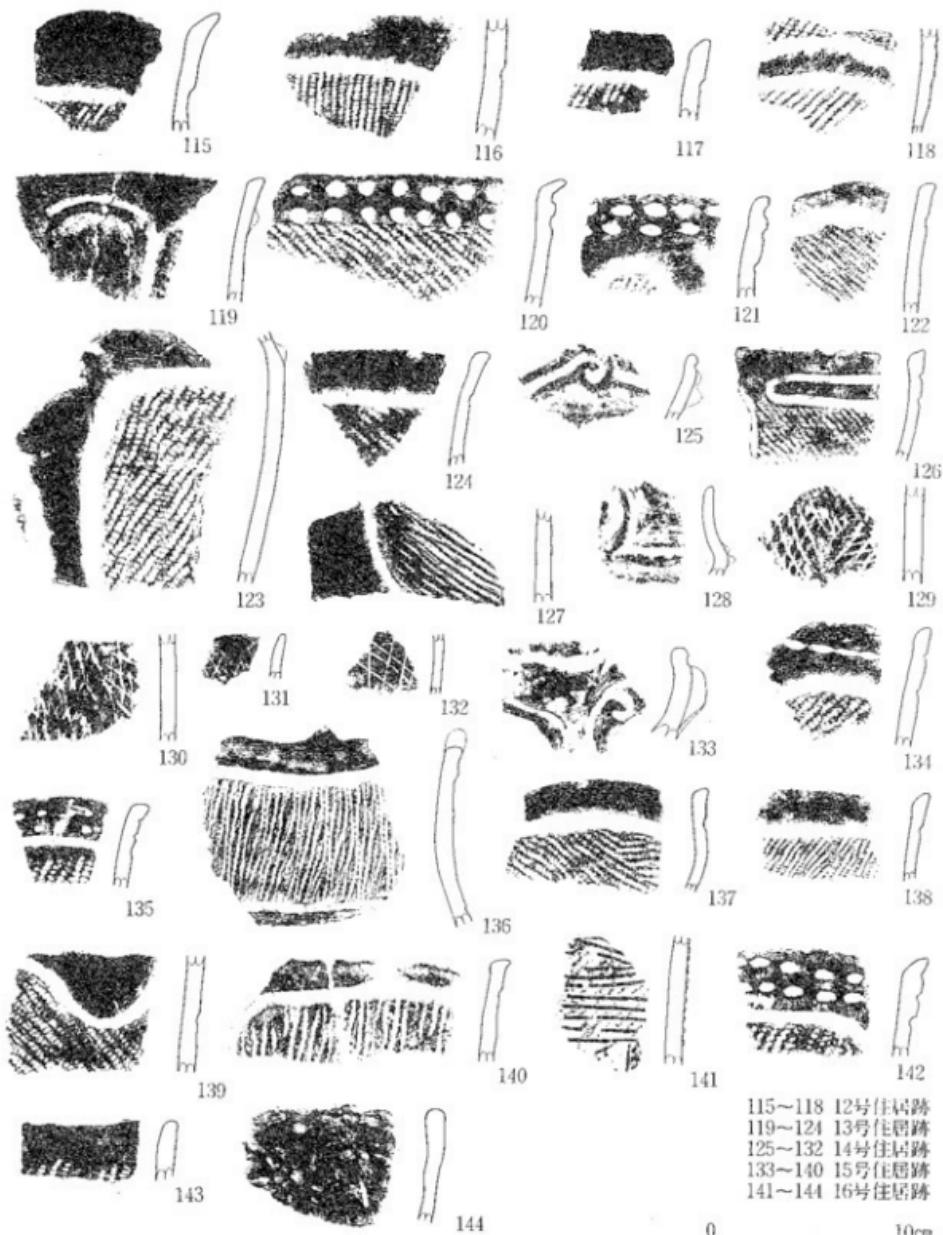
第49図 造構内出土土器

图50 遗物出土土器

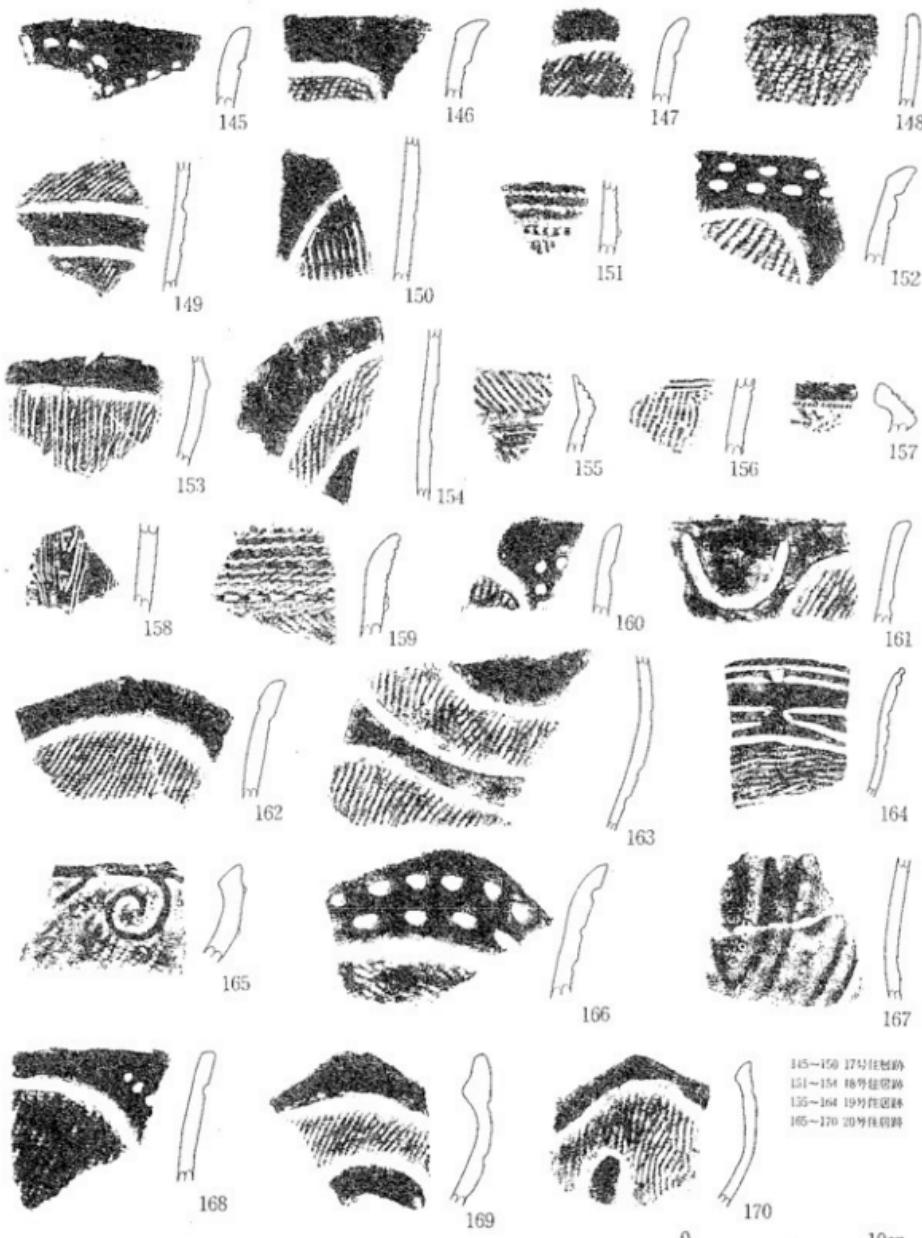




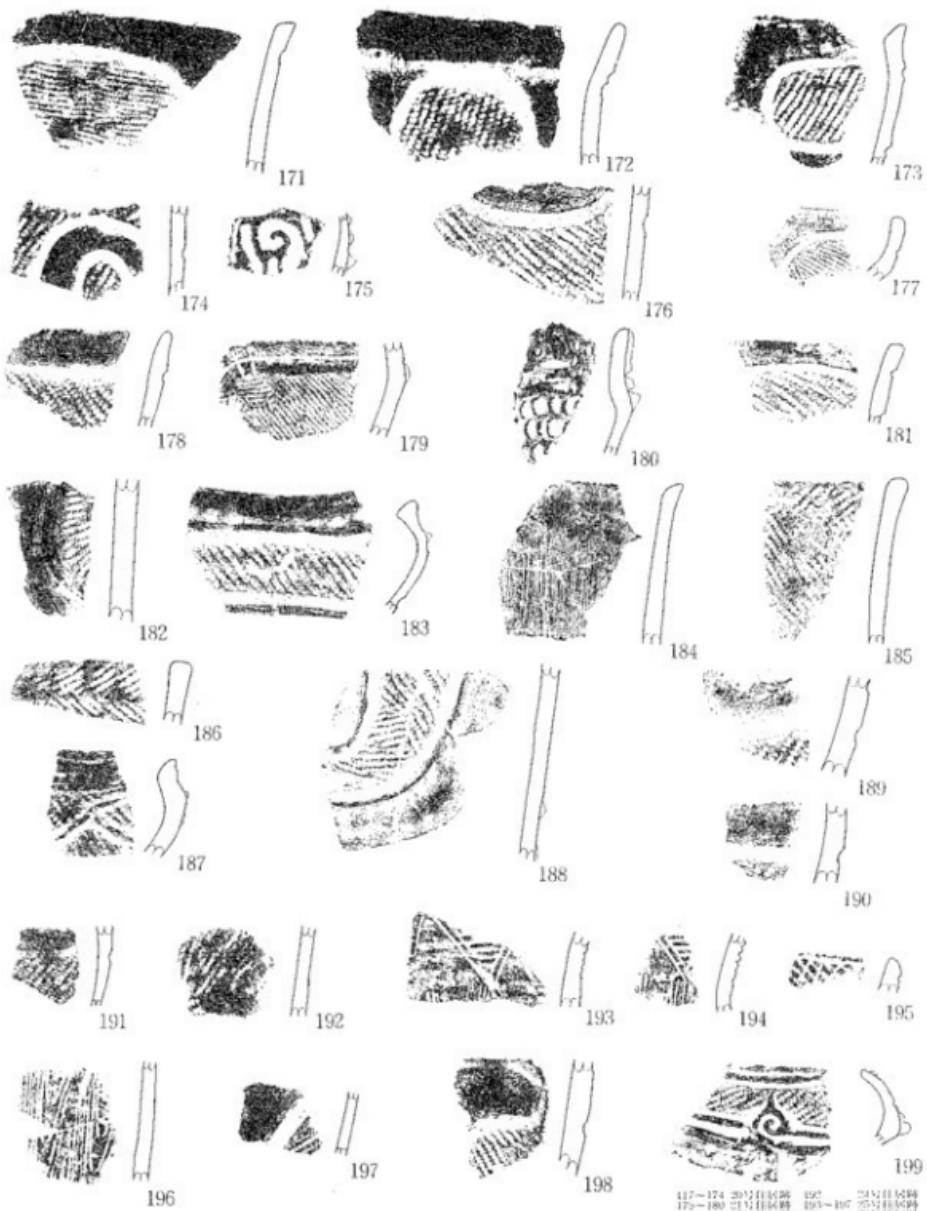
第51図 通構内出土土器



第52図 造構内出土土器



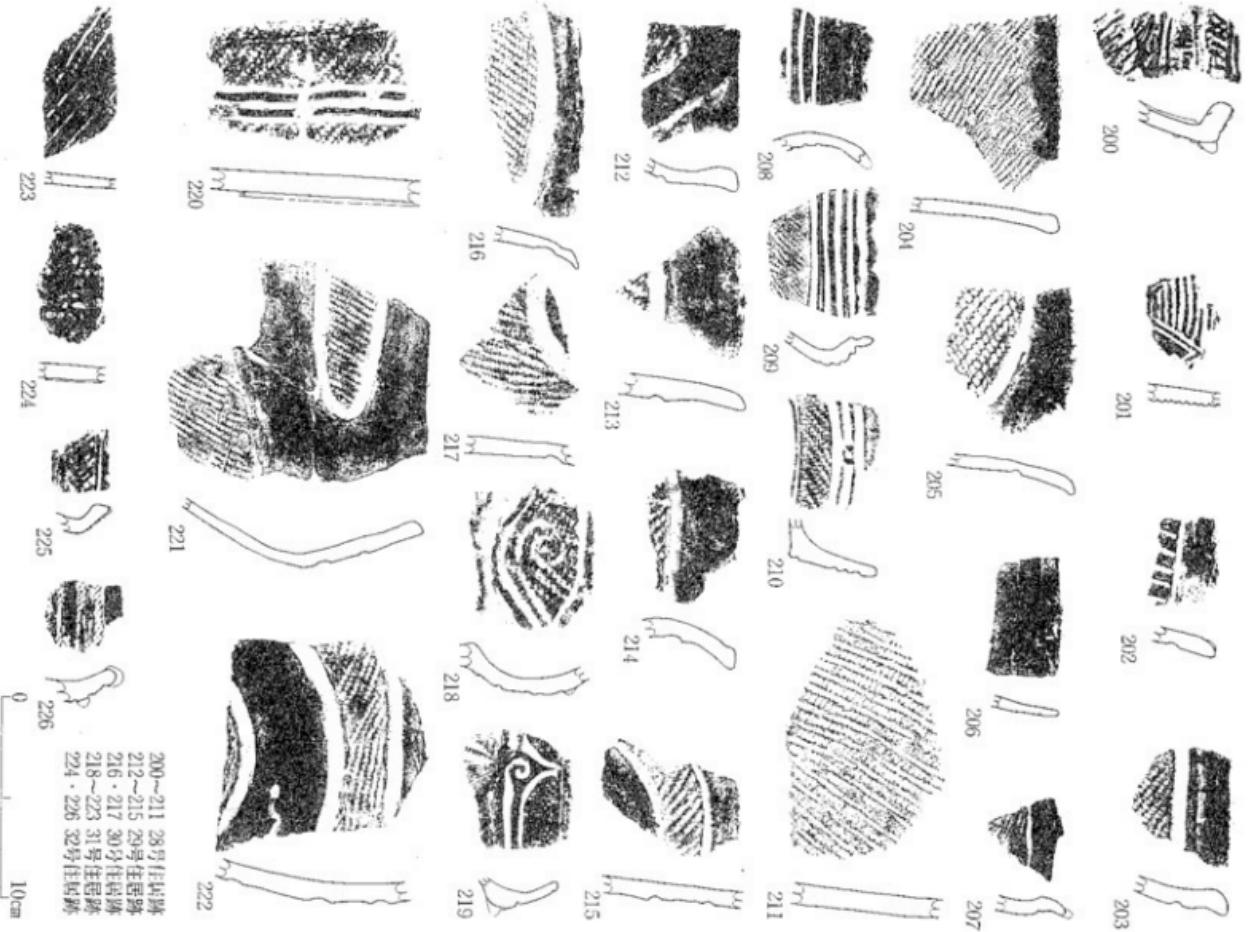
第53図 造構内出土土器



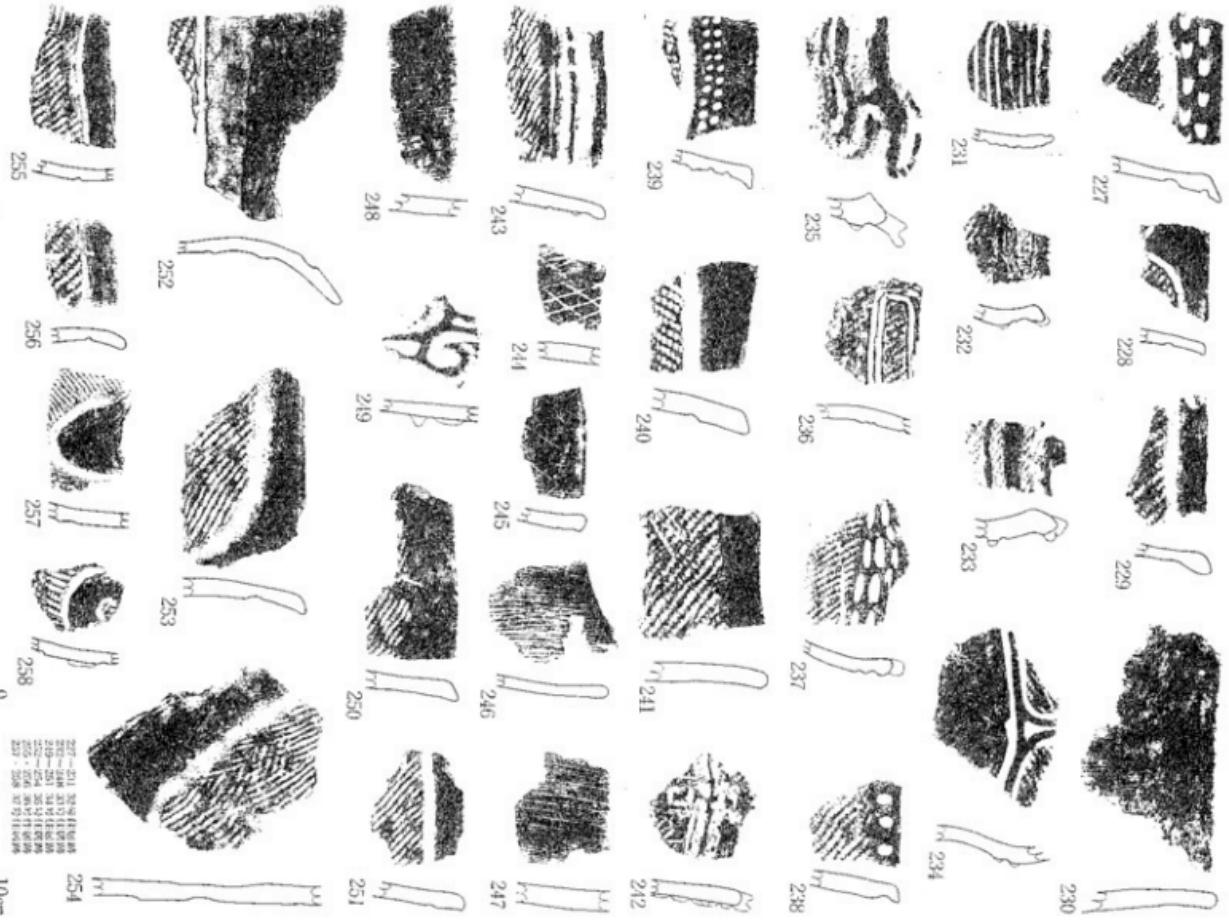
117~174 20.2月16.36
175~180 21.1月16.37
181~186 25.1月16.38
187~191 25.2月16.39
192~199 27.3月16.40

0 1 10cm

第51図 遺構内出土土器



第55圖 遷構內出土土器



第56図 遺構内出土土器

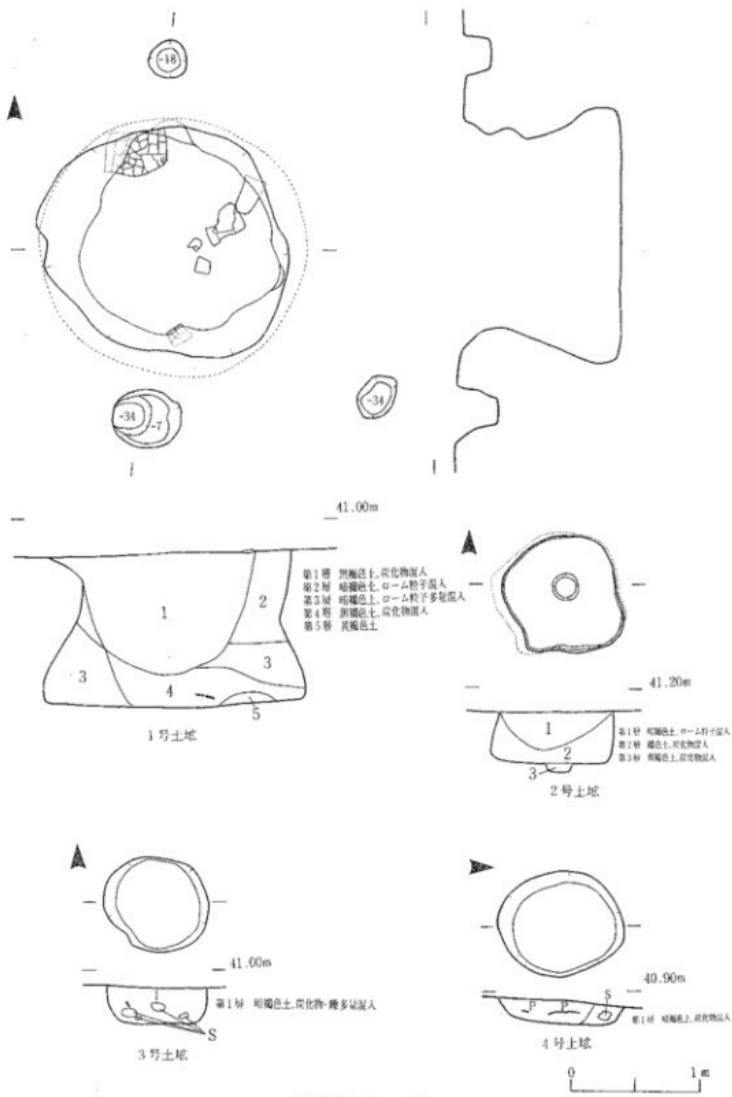
土 塚 一 覧 表

番 号	規 模 (cm)			平 面 形	断 面 形	出 土 遺 物
	長 軸	短 軸	深 さ			
1 号土塚	186	172	120	椭 圆 形	袋 状	第78回259・26、第82回286・287、縄文前期末(円筒下層d式)、第90回98(石器)
2	90	88	40	不 整 形	袋 状	第82回288～290、縄文中期末(大木10式)
3	80	70	28	椭 圆 形	鍋 底 状	第82回291、縄文
4	99	81	18	椭 圆 形	鍋 底 状	第82回292、縄文中期
5	135	62	16	長 形	皿 状	縄文
6	89	81	20	椭 圆 形	鍋 底 状	
7	93		13	円 形	袋 状	第79回261・262、第82回293、縄文中期末(大木10式)
8	100	88	103	椭 圆 形	袋 状	第82回294～298、縄文中期末(大木10式)、第92回 135(くぼみ石)
9	87		15	円 形	鍋 底 状	第82回299・300、縄文中期末(大木10式)
10	80		23	円 形	鍋 底 状	第82回301、縄文中期末(大木10式)
11	83	76	55	椭 圆 形	袋 状	第82回302、縄文中期末(大木10式)
12	77		35	円 形	鍋 底 状	第82回303・304、縄文
13	90	78	35	椭 圆 形	鍋 底 状	第82回305・306、縄文中期末
14	150	122	18	椭 圆 形	皿 状	
15	110		20	円 形	鍋 底 状	縄文
16	88		20	円 形	袋 状	第82回307・308、縄文中期末(大木10式)
17	180	170	20	椭 圆 形	鍋 底 状	第82回309、縄文前期末(大木6式)
18	60		16	円 形	鍋 底 状	縄文
19	88	83	42	椭 圆 形	袋 状	第82回310～312、縄文中期末、第92回136(磨石)
20	93		33	円 形	平 底	第82回313・314、縄文中期末(大木10式)、 第90回99・100(石器)、第90回101(石器)
21	87		39	円 形	袋 状	第82回315、縄文中期末
22	88		56	円 形	袋 状	第82回316、縄文
23	103	95	40	椭 圆 形	鍋 底 状	第82回317～320、縄文中期末(大木10式)
24	132	88	22	椭 圆 形	鍋 底 状	第83回321、縄文
25	100	87	42	椭 圆 形	鍋 底 状	第83回322・323、縄文中期(大木8b式・大木10式)
26	84		53	円 形	袋 状	第83回324、縄文中期末(大木10式)
27	105	75	13	椭 圆 形	鍋 底 状	第83回325、縄文中期末(大木10式)
28	102		31	円 形	鍋 底 状	第83回326・327、縄文中期末(大木10式)
29	68		18	円 形	鍋 底 状	縄文
30	98		16	円 形	鍋 底 状	
31	88		11	円 形	鍋 底 状	第83回328、縄文中期末(大木10式)

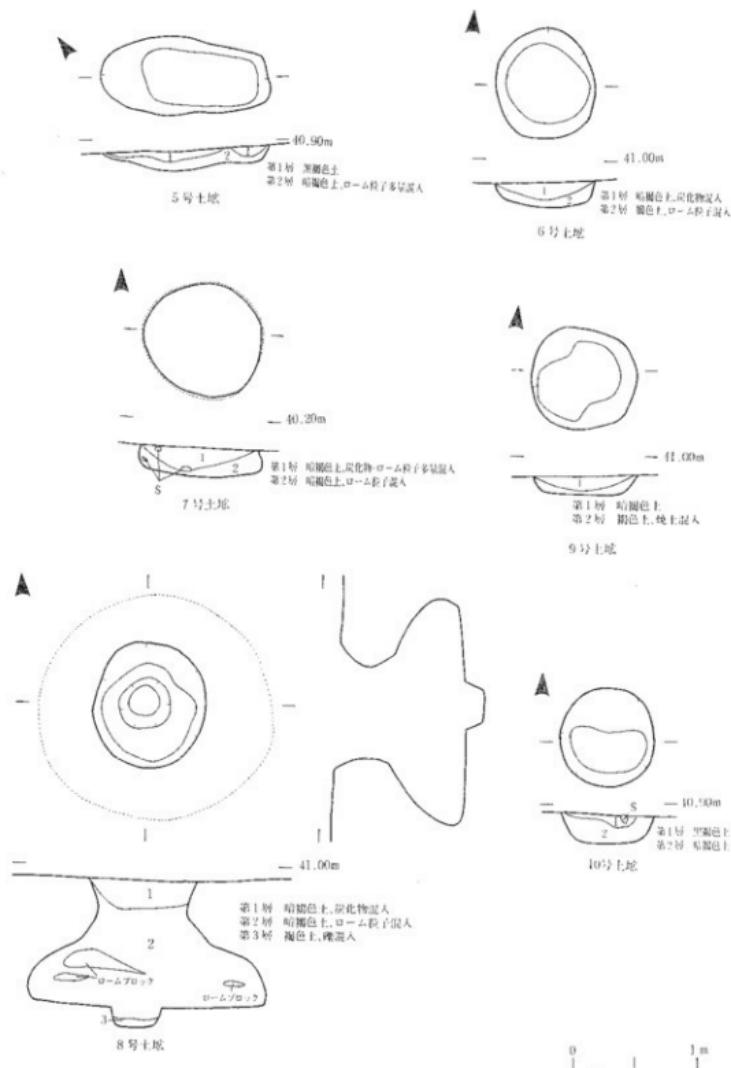
番号	規模(cm)			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
32号土壙	103	91	18	椭円形	平底	第83図329~331、縄文中期末(大木10式)
33	92	82	38	不整形	鍋底状	第83図332・333、縄文中期末(大木10式)
34	105	83	20	椭円形	鍋底状	第83図334・335、縄文中期末(大木10式)
35	80		28	円形	鍋底状	第83図336~338、縄文中期末(大木10式)
36	82		15	円形	鍋底状	第83図339・340、縄文中期末(大木10式)
37	172	150	50	椭円形	鍋底状	第83図341・342、縄文中期末(大木10式)、 第101図12(土製品)
38	103	75	12	椭円形	鍋底状	縄文
39	95	83	52	椭円形	袋状	
40	123	105	60	椭円形	袋状	第83図343・344、縄文中期末(大木10式)
41	205	105	65	椭円形	鍋底状	第79図263・264、縄文晚期
42	62	58	18	椭円形	鍋底状	
43	58	55	18	椭円形	鍋底状	
44	127		37	円形	鍋底状	
45	118	105	70	椭円形	袋状	第79図265・266、第83図345・346 縄文中期末(大木10式)、縄文晚期
46	135	125	69	椭円形	袋状	第79図267・268、第83図347・348、 縄文中期末(大木10式)、縄文晚期 第90図102(石錐)、第92図137(くぼみ石)
47	130	126	70	椭円形	袋状	第83図349・350、縄文中期末(大木10式)
48	136	108	13	椭円形	鍋底状	縄文
49	135	112	142	椭円形	袋状	第79図269、縄文中期末(大木10式)
50	80		31	円形	鍋底状	第83図351・352、縄文前期末(大木6式)
51	73	50	25	椭円形		第83図353、縄文中期末(大木10式)
52	85	77	35	椭円形	平底	第83図354・355、縄文中期末(大木10式)
53	105	90	39	椭円形		第84図356、縄文中期(大木8b式)
54	155	145	39	円形		第84図357、縄文中期末(大木10式)、 第100図7(三角形土製品)
55	160	140	22	椭円形	鍋底状	
56	94	85	25	椭円形		第84図358、縄文中期末(大木10式)
57	102	95	38	椭円形	鍋底状	
58	120	105	7	椭円形	平底	
59	126	113	82	椭円形	袋状	第84図359・360、縄文
60	170	123	85	椭円形	袋状	第84図361~364、縄文中期末(大木10式)、 第92図138(磨石)

番号	規模(cm)			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
61号土培	118	113	28	楕円形	鍋底状	繩文
62	78	72	30	楕円形	丸底	
63	84	65	15	不整形		第84回365~367、繩文、第92回139(磨石)
64	153	92	31	長形		
65	92	71	21	楕円形	鍋底状	繩文
66	113	110	18	楕円形	鍋底状	第84回368、繩文中期末(大木10式)
67	150		48	円形	平底	第80回270、第84回369~373、繩文中期末(大木10式) 第102回45(再利用土製品)
68	83	76	18	楕円形	鍋底状	繩文
69	114	87	25	楕円形		
70	65	60	16	楕円形	鍋底状	
71	75	63	44	楕円形	平底	第84回374、繩文
72	115	72	32	楕円形	鍋底状	
73	78	56	15	楕円形	平底	
74	138	133	14	楕円形	平底	
75	63	60	18	楕円形		
76	175	105	19	長形	平底	
77	78	65	22	楕円形	鍋底状	
78	98	87	15	不整形	鍋底状	第84回375~377、繩文前期末~中期
79	80	70	40	楕円形	鍋底状	繩文
80	136	108	12	不整形		繩文
81	75	65	47	隅丸方形	袋状	第84回378、繩文
82	83	68	27	楕円形	鍋底状	第84回379、繩文中期末(大木10式)
83	118	108	16	不整形	平底	第84回380、繩文中期末(大木10式)
84	154	138	143	楕円形	袋状	第84回381~382、繩文中期末(大木10式) 第90回103(石錐)
85	60	50	38	隅丸方形	バケツ状	第84回383、繩文中期末(大木10式)
86	65		27	円形	平底	
87	58		17	円形	鍋底状	
88	78	74	98	不整形	袋状	第80回273~275、第85回384、繩文中期末(大木10式) 第90回104(石錐)
89	64	51	23	楕円形	平底	第85回385~387、繩文前期末(大木6式)、繩文中期末(大木10式)
90	148	98	58	不整形	鍋底状	繩文
91	123	41	43	構状	U字状	繩文
92	60		32	円形	逆台形状	第85回389、繩文

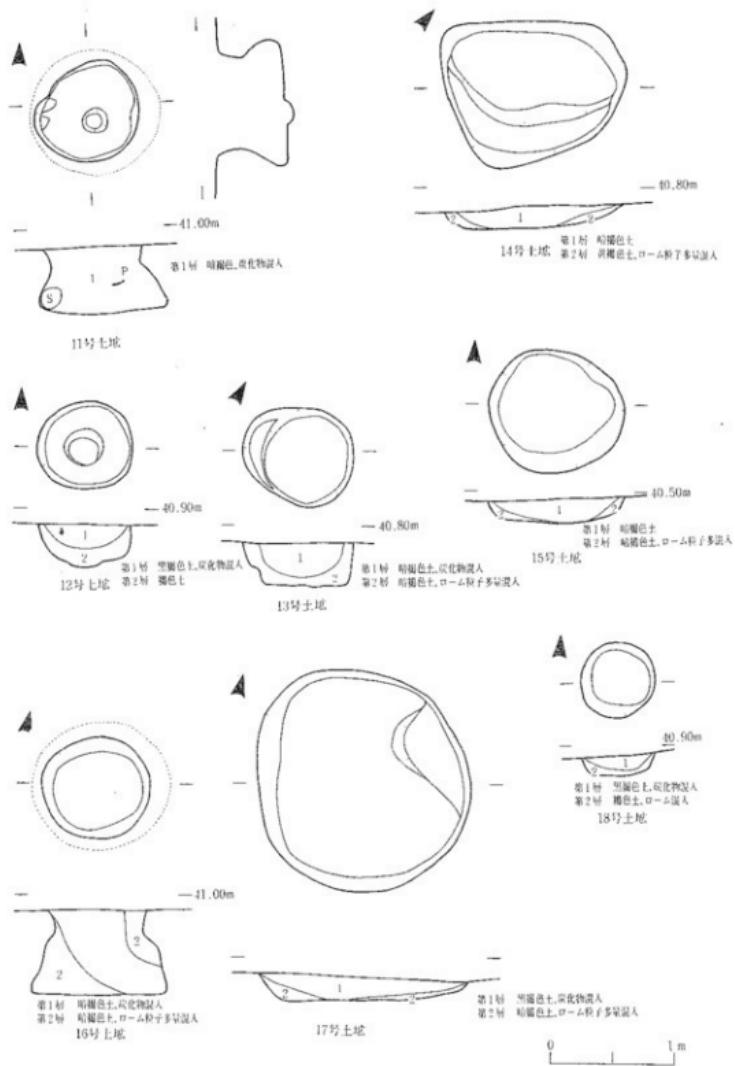
番号	規模(cm)			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
93号土爐	69	62	19	椭円形	鍋底状	
94	45		18	円形	鍋底状	第85図390・391、繩文
95	65	46	16	椭円形	鍋底状	繩文
96	60		16	円形	鍋底状	
97	120	60	54	長形	平底	第85図388・392・393、繩文前期末(大木6式) 第90図105(石器)、106(石錐)
98	77	75	15	隅丸方形	鍋底状	第90図107(石器)
99	58	53	16	椭円形	平底	
100	240	156	22	不整形	鍋底状	第85図394、繩文中期末(大木10式)
101	100		65	円形	袋状	
102	198	38	15	溝状	鍋底状	
103	89	84	28	椭円形	鍋底状	
104	107	95	26	椭円形	平底	第85図395・396、繩文中期末(大木10式)
105	168	131	30	椭円形	鍋底状	第90図108(石器)
106	140	96	53	椭円形	平底	第80図271・272・276、繩文後期、第102図46(再利用土製品)
107	160		150	円形	袋状	第85図397、繩文中期末(大木10式)、 第90図109(石器)、第93図140(くぼみ石)
108	68		17	円形	鍋底状	
109	140	105	20	椭円形	平底	
110	70	58	21	椭円形		第85図398・399、繩文中期末(大木10式)
111	53	42	15	椭円形	鍋底状	第80図277、繩文
112	85	76	13	椭円形	鍋底状	
113	63		27	円形	鍋底状	
114	90	84	30	不整形	鍋底状	
115	186	114	17	不整形	鍋底状	第85図400・401、繩文中期末(大木10式)、第93図141(磨石)
116	128	73	13	不整形	鍋底状	
117	270	105	50	不整形	鍋底状	
118	228	170	12	不整形	平底	
119	250	150	15	不整形	平底	
120	300	250	10	椭円形	平底	第85図402・403・405、繩文前期末(大木6式) 繩文中期末(大木10式)
121	300	250	45	椭円形	平底	第85図404・406、繩文中期末(大木10式)
122	400	270	45	椭円形	平底	第85図407~410、繩文前期末(大木6式) 繩文中期末(大木10式) 第93図142(くぼみ石)、143(石棒)



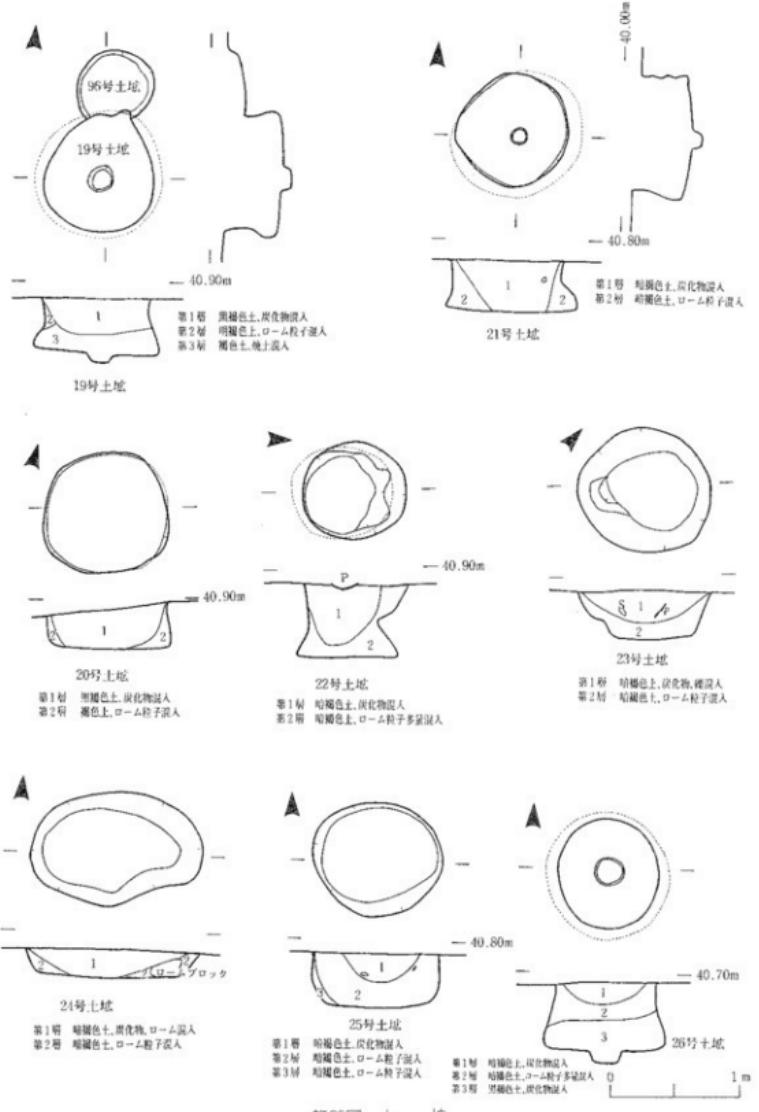
第57図 土 塚



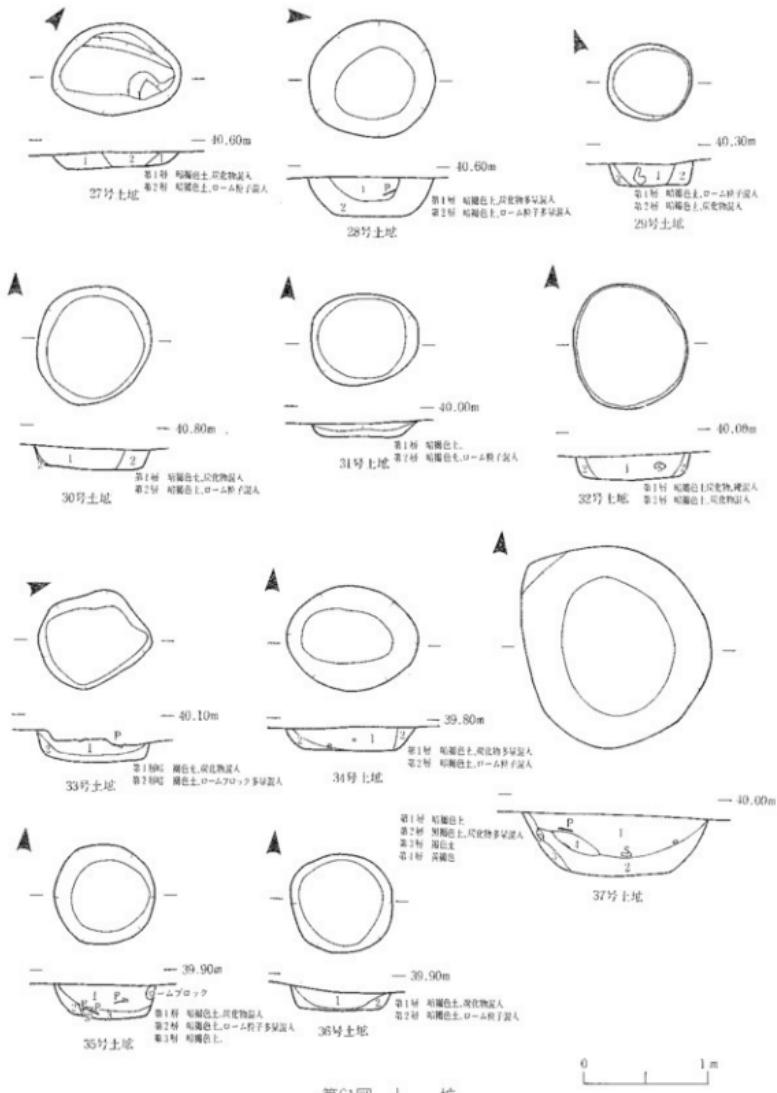
第58図 土 壤



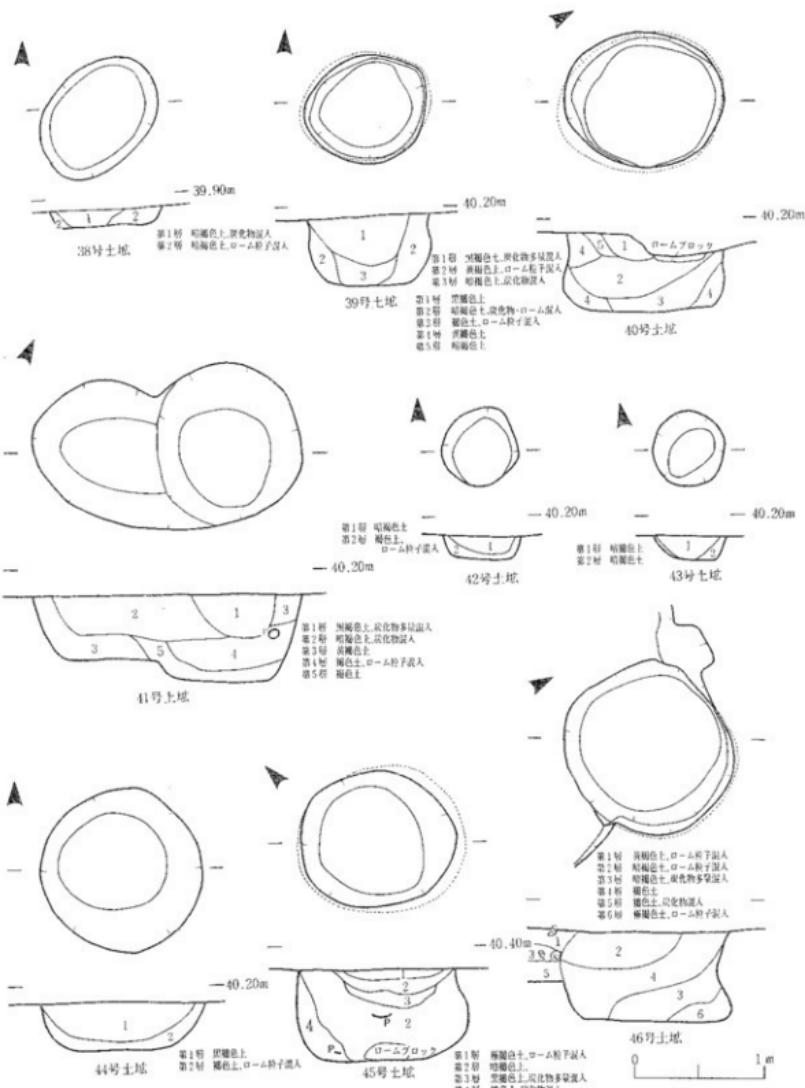
第59图 土 坡



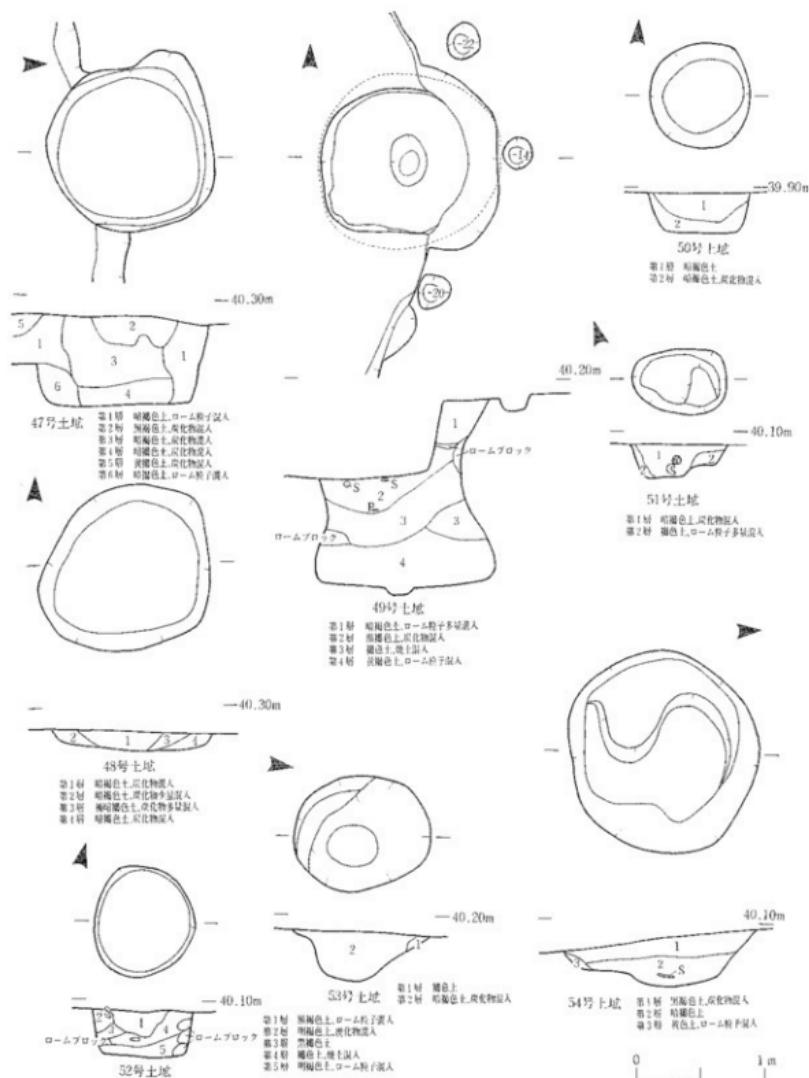
第60図 土 壴



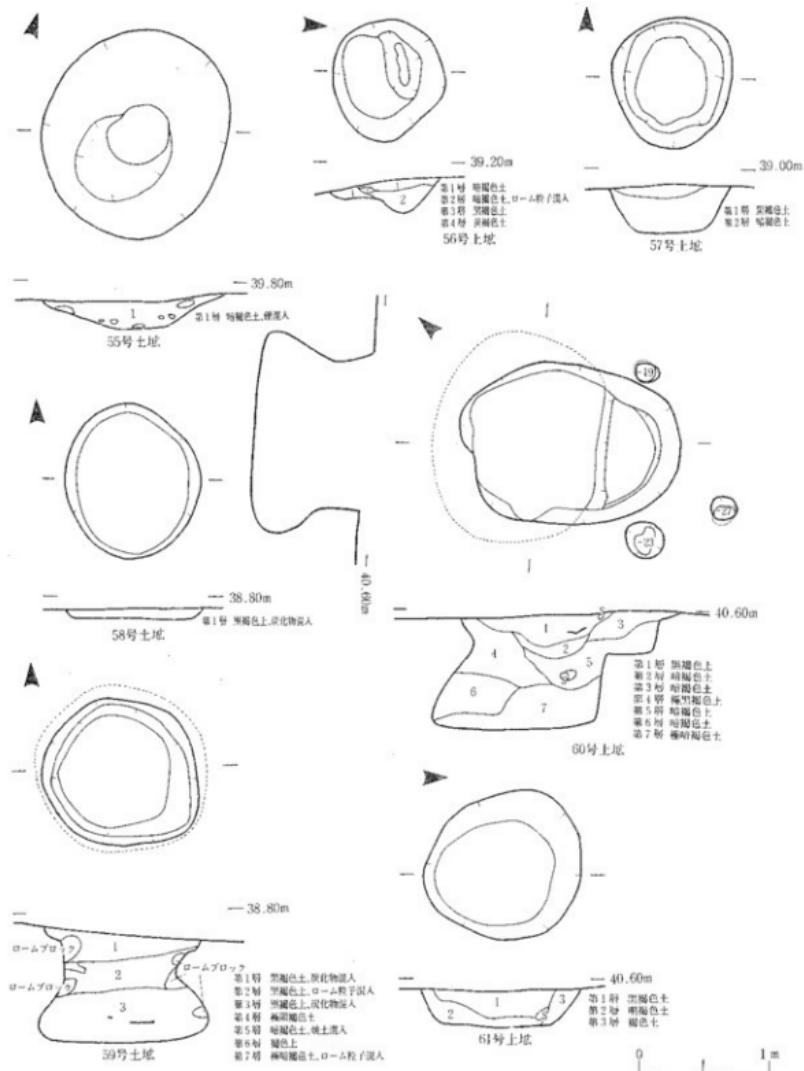
第61図 土 塚



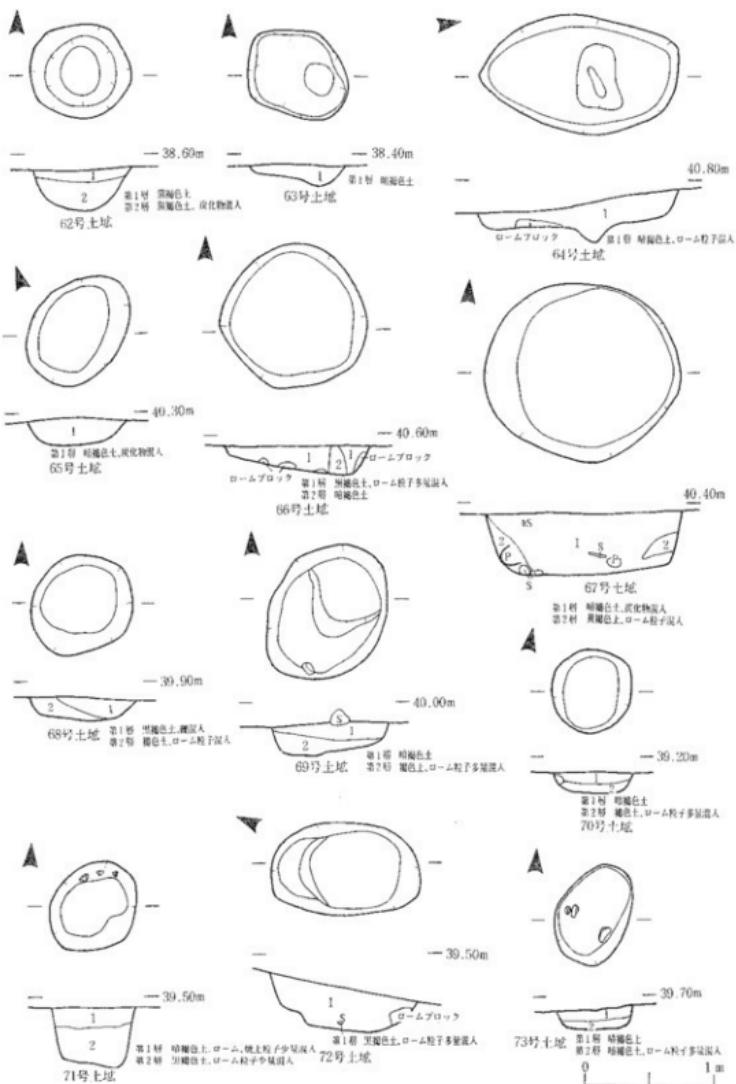
第62図 土 塚



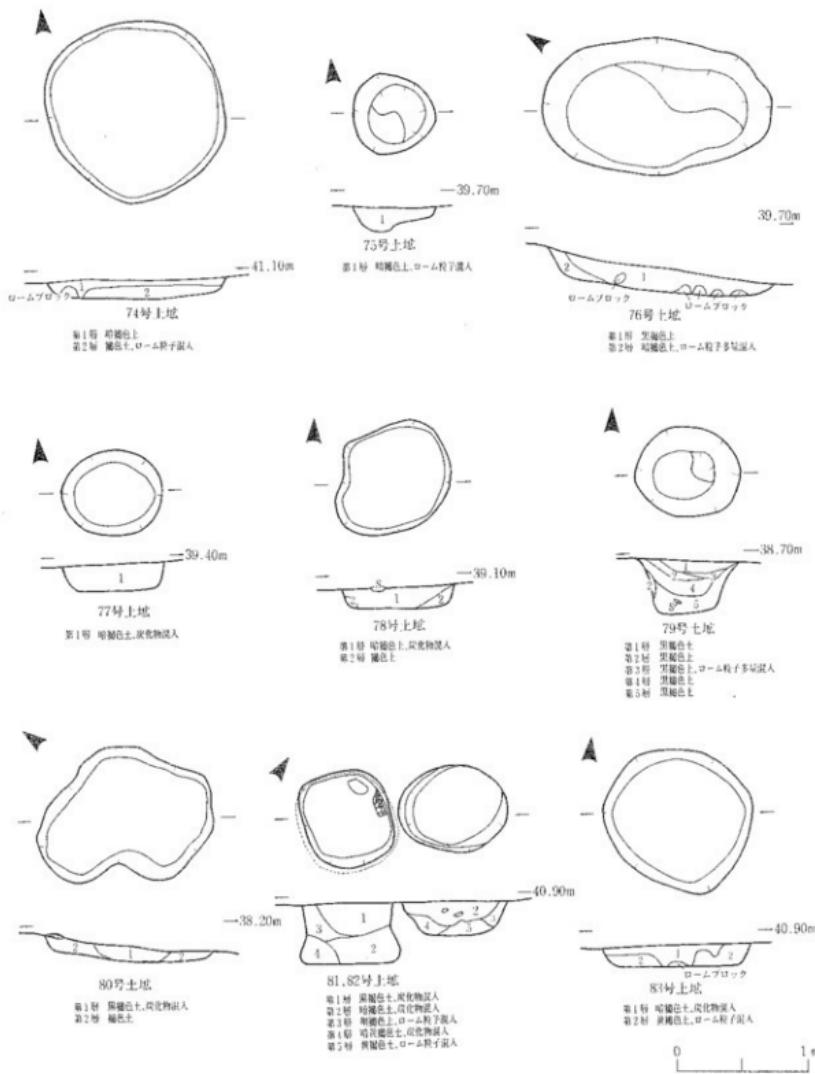
第63図 土 坡



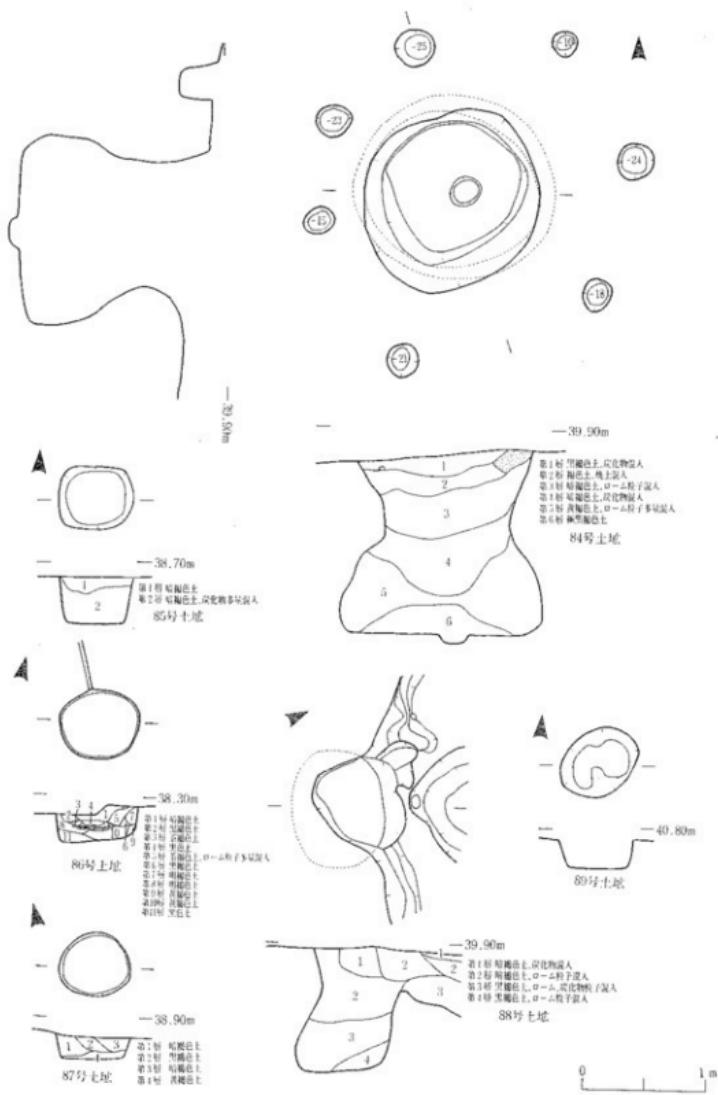
第6-1図 土 塚



第65図 土 塚

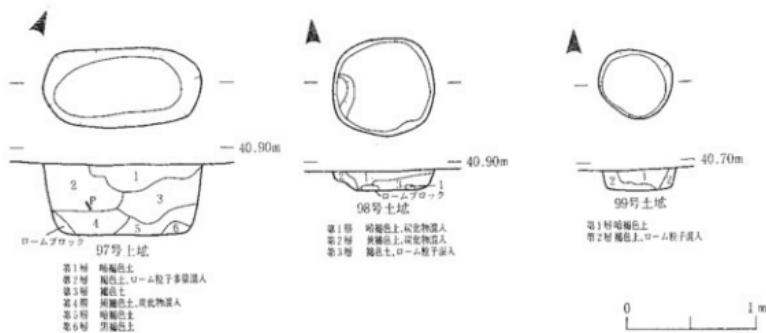
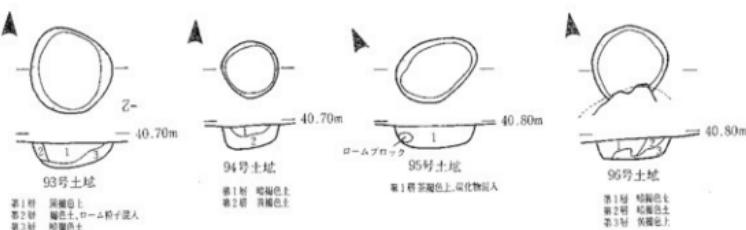
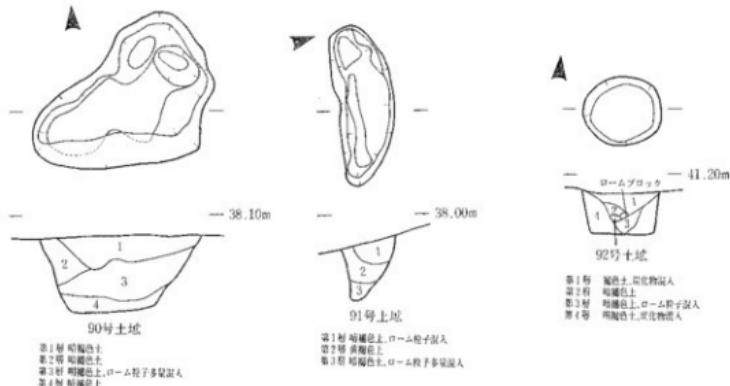


第66図 土 塚



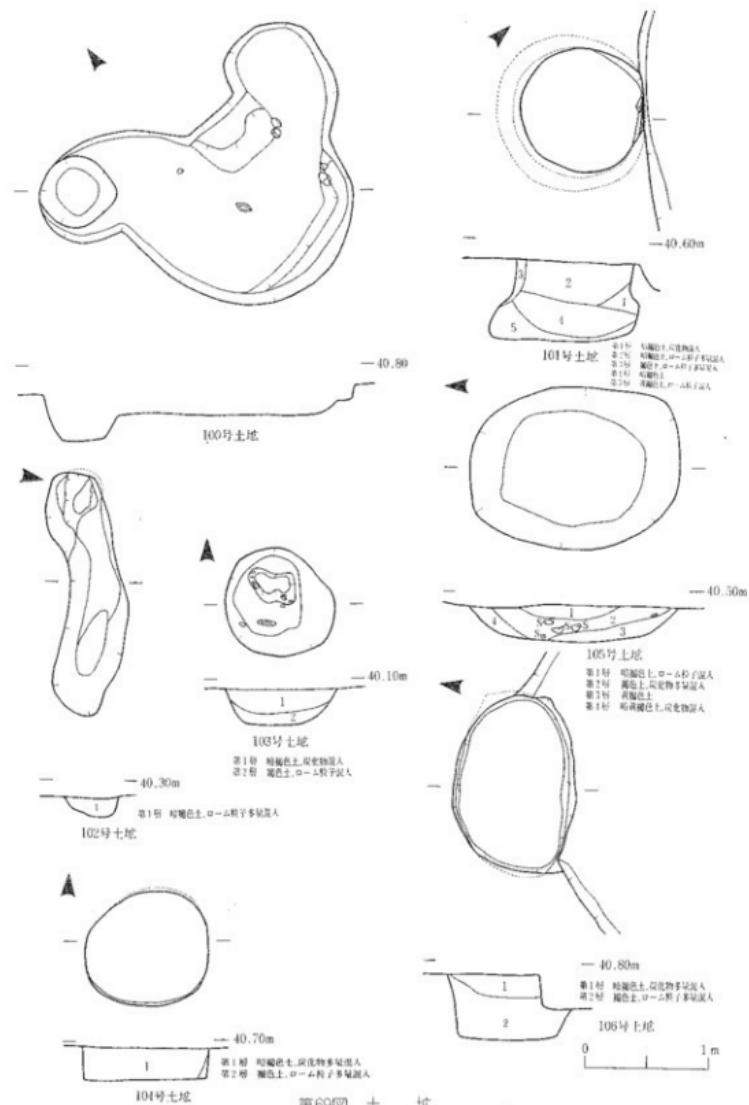
第67図 土 塚

第68図 土 塚

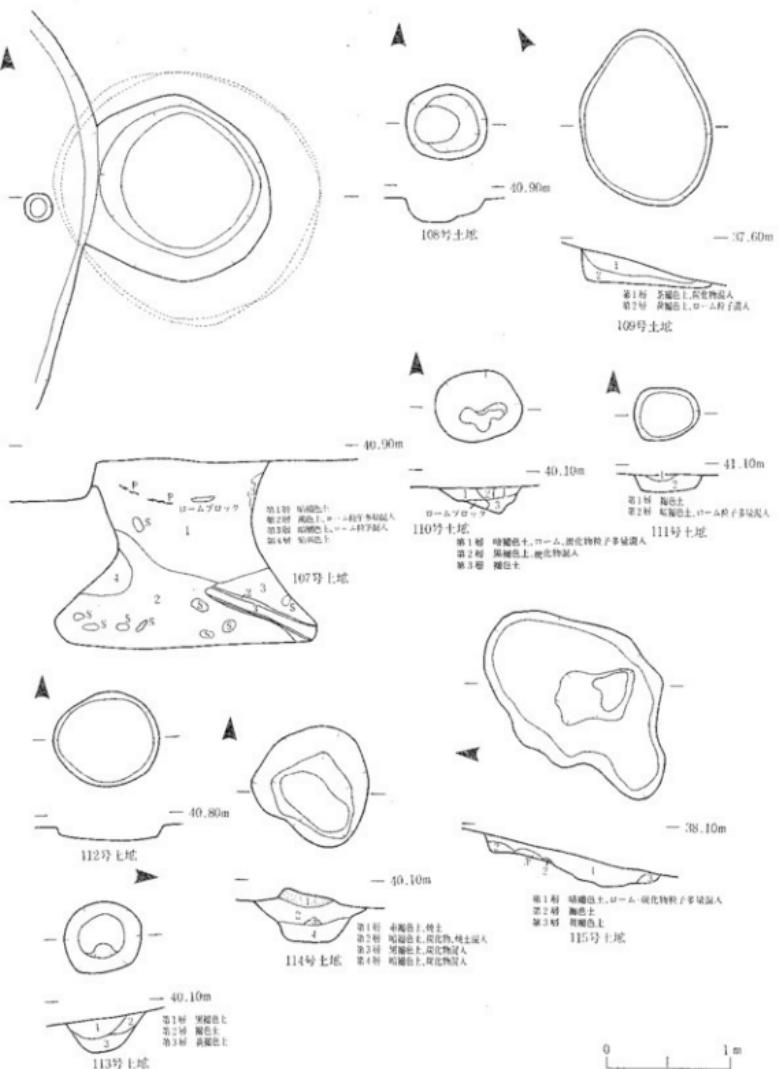


0 1m

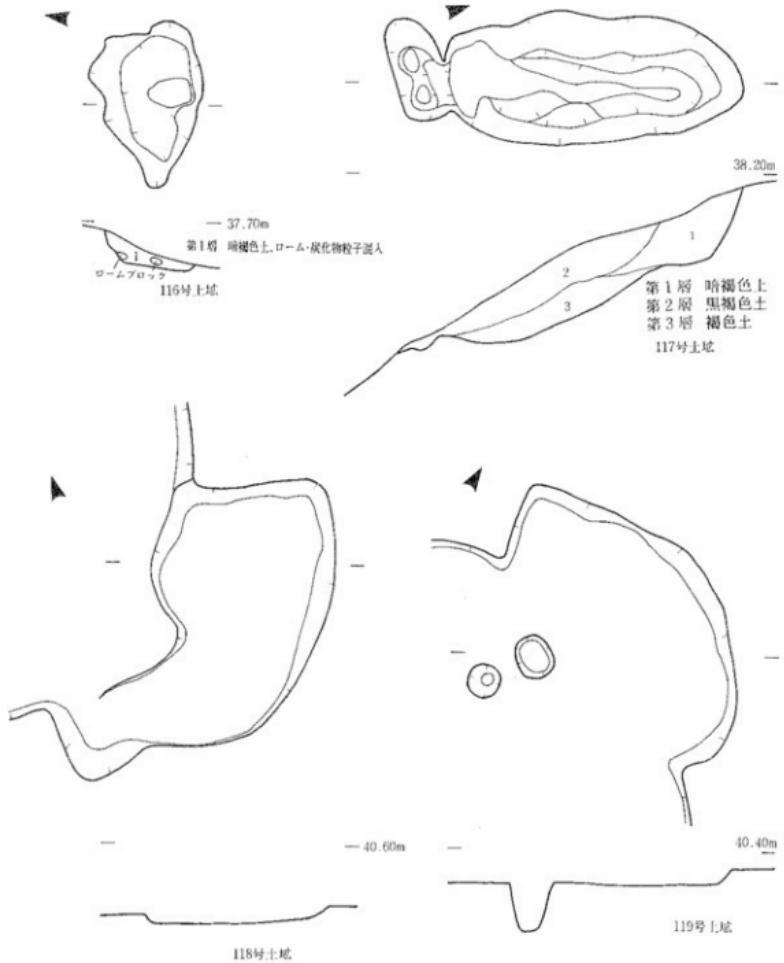
第68図 土 塚



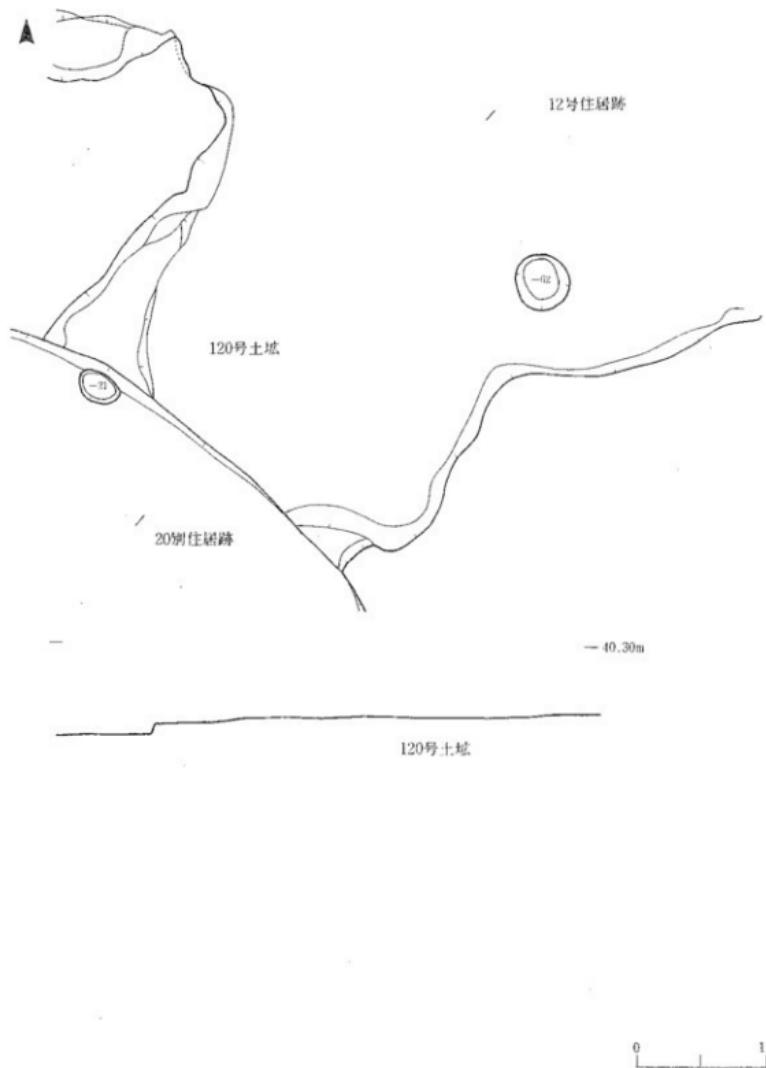
第69図 土 墓



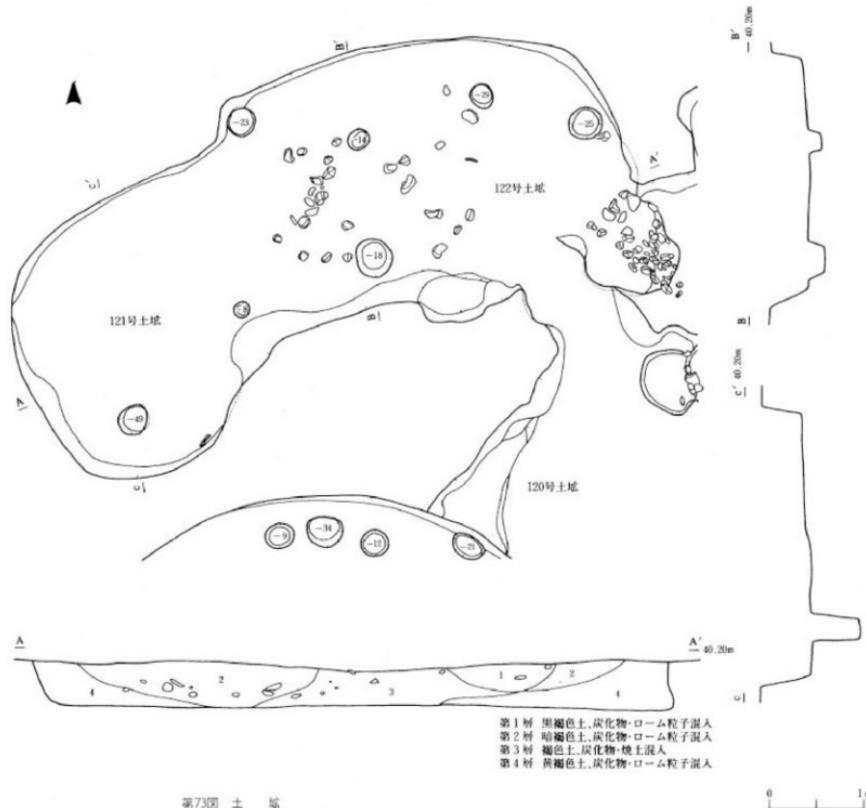
第70図 土 塚



第71図 土 塚



第72図 土 塚



第73回 土 域

埋設土器遺構（第74図）

11個検出され、全てローム面で確認された。深鉢形・鉢形土器の埋設で、6号埋設土器の北東側には掘り込みが、7号埋設土器の回りには石が認められた。

炉（第74図）

2基検出された。石陣をなし、火熱を受けている。第2層面検出で、住居の壁、柱穴は検出されなかった。

製鉄炉（第75図）

調査区南側、沢の急斜面で検出された。炉は橢円形を呈し、末広がりとなる。残存高さは65cmで壁は内湾気味に立ち上がる。2~3cmのスサ入り粘土を貼り付け、2~3回の貼り付けが認められる。高熱を受けガチンガチンに焼け、上部はガラス状と化している。また、壁全面には指の跡が認められた。炉底は南に緩傾斜し、前庭部の壁とともに火熱によりガチンガチンである。炉を画す溝が西・北・東側に認められた。溝は確認面から北側が最深1mを計り、沢の方へ若干傾斜する。排水溝と考えられ、22号住居跡を切っている。ピットが数個検出されているが、性格は不明である。

炭焼窯（第76図）

調査区南側、沢の縁辺部で検出された。窯体は全長6.5m、最大幅1.3mを計る地下式である。当初はトンネル状に掘られていたが、調査中に崩落してしまった。窯は作り変えが認められ、検出された底面は古いもので、新しい底面は20cm上である。煙出しは先端と左右両側にある。先端の煙出しの西側には、煙出しを作ろうとして途中まで掘った痕跡が認められた。窯改築時に幅を広げた際煙突状に掘られた煙出しの一部が崩れ、粘土及び鉄滓などで補修を行ない、新しい底面のやや上から煙排出の口が作られていた。焼成部には取り出せなかった炭が整然と認められた。材の長さは50~60cmで、鉈状の工具で尖らせたものである。燃焼部は火熱により壁が赤化していた。前庭部は沢の斜面にある。煙出しの補修には鉄滓も使用されており、西側に検出された製鉄炉との関係が考えられる。

その他の遺構（第77図）

調査区南側の斜面、沢の縁辺部で検出された。沢へ向かって末広がりとなり、深さ60cmを計る。沢の地形を利用したと考えられる。109号土塗を内包し、覆土には礫が多量に混入していた。

出土遺物

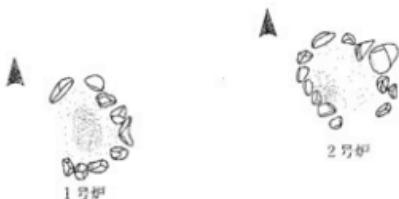
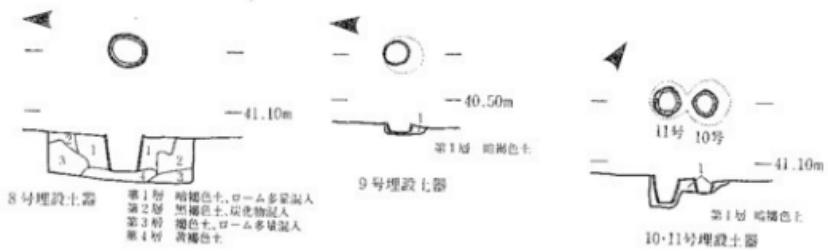
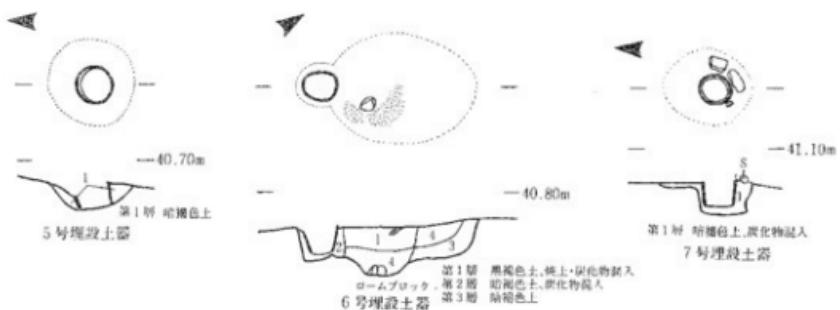
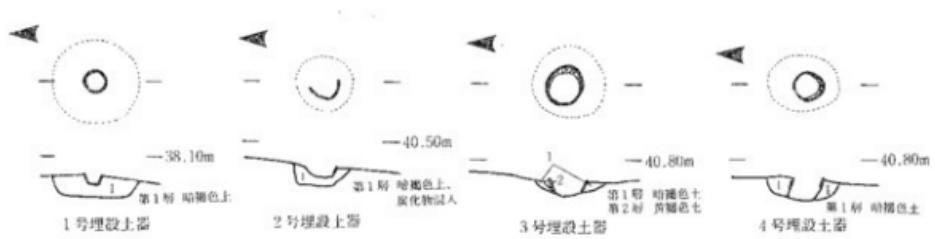
土器（第85図411~416）

全て覆土出土である。沈線は凹の磨消帶を施すもの、平行沈線を施した後に縦位に2条の列点文を施すもの、入組文の施されるものである。

出土土器

遺構内、遺構外の土器について、群に大別し類に細別して述べてみたい。

1群土器



第74図 埋設土器遺構, 炉

1類 (第53図157、第55図200・225、第85図385・392、第94図426、第95図427～432)

細い粘土紐を直線・锯齒状に貼り付け、平行する隆線に半截竹管状工具内面による連續爪形文を施すものである。器形は鉢形で、口唇部がくの字状に折れるものもある。426は把手部である。

2類 (第52図141、第55図224、第83図351・352)

細い粘土紐を貼り付けるもので、1類のように锯齒状の貼り付けや連續爪形文を施さないものである。器形は鉢形である。

3類 (第53図155・156、第85図393、第95図433～435)

細い半截竹管状工具内面による半隆起線文を施すものである。口縁部に縱・斜位、口唇部・口頭部に横走する半隆起線文を施して文様を作り出す。口縁部がくの字に折れる鉢形土器もみられる。435は半隆起線の上に細い粘土紐を格子目状に貼り付けている。

4類 (第54図193・194、第55図201、第85図402・403・407、第95図436～438)

半截竹管状工具内面による半隆起線文を施すもので、半隆起線は三角形及び菱形にも区画されている。口縁部がやや外傾する鉢形土器が多い。

5類 (第51図85、第53図151・159、第78図259・260、第95図439～445)

頸部隆帯に刺突を施し、口縁部に撚糸圧痕及び単軸絡糸圧痕を施すものである。器形は深鉢形で器肉が厚い。地文は撚糸文、木目状撚糸文、単節斜繩文などである。260は波状口縁をもつ深鉢形土器で、口径33.6cm、高さ45.8cmである。

6類 (第54図196、第84図375、第85図388)

木目状撚糸文の施されるもので、深鉢形土器である。

2群土器

1類 (第54図187、第55図218・226、第56図232・233・235、第95図446～450)

口縁部文様帯に粘土紐貼り付け及び撚糸圧痕を施すものである。撚糸圧痕は平行、渦巻状に施され、隆起線の両側も撚糸圧痕を施して調査している。器形は鉢形・浅鉢形のものがある。

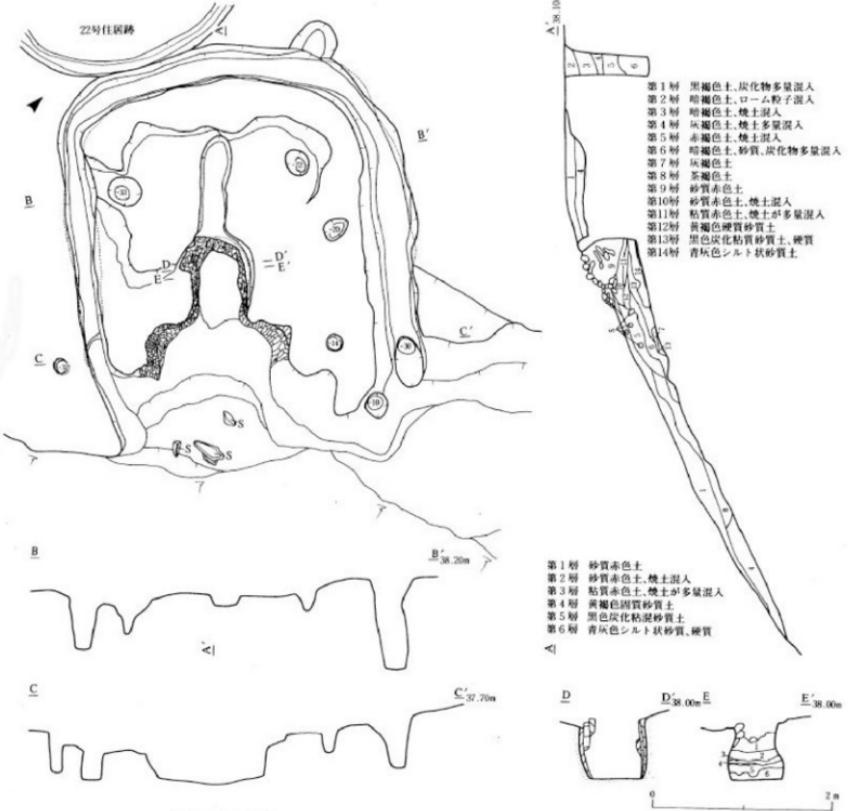
2類 (第41図19、第51図96、第52図125・133、第53図165、第54図175・199、第55図219・220、第56図234・249、第83図322、第84図356、第95・96図451～463)

粘土紐を貼り付けてその両側を沈線で調整するものである。沈線で調整された隆起線は円形文・渦巻文となる。器形は深鉢形土器で、器肉が厚く、口縁部がくの字状に折れるものもある。また、沈線による直線・曲線で文様を作り出すものもある。

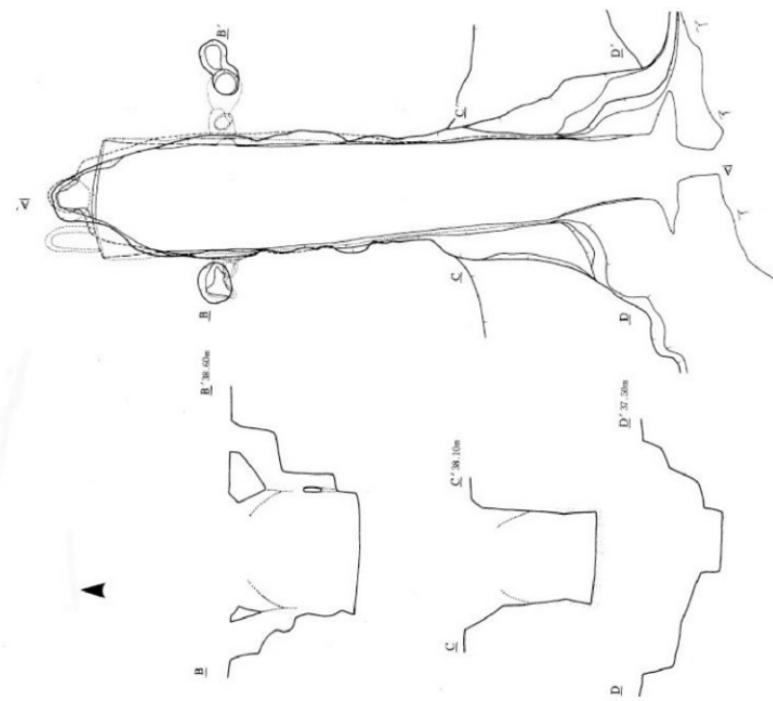
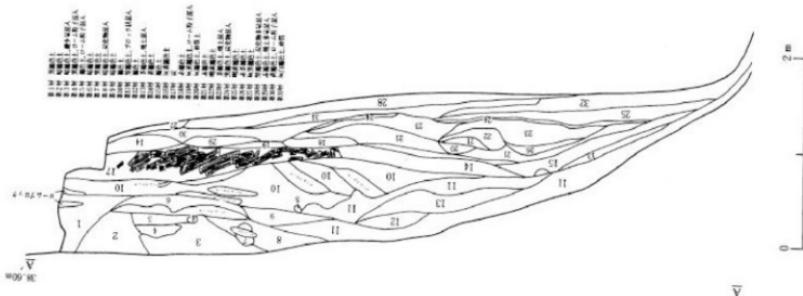
3類 (第50図63・64)

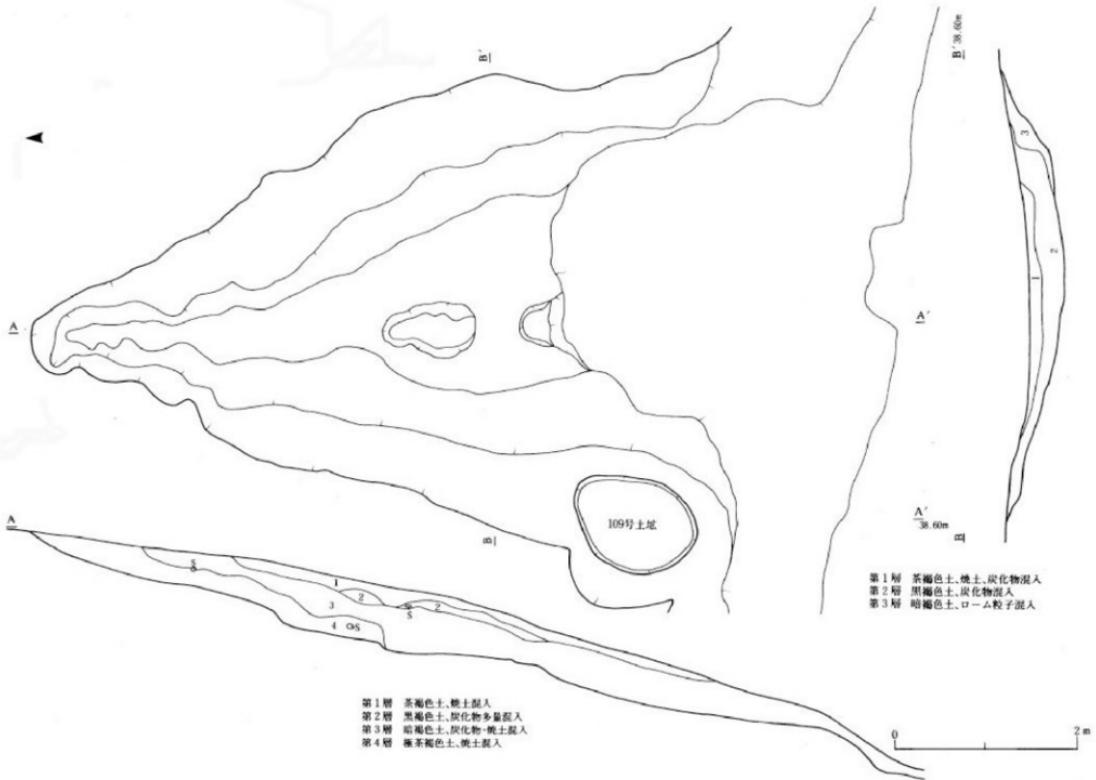
粘土紐貼り付けによる円形文や、沈線を直線・曲線的に施すものである。平縁口縁の鉢形土器である。

4類 (第39図1～3、5～7、第40図8・11・12・14、第41図15・16・18、第42図20～23、第43図24～31、第44図32～36、第45図39・40、第46図41～43、第47図46～50、第48図52・54、第49図56)



第75図 製鉄炉





第77図 その他の遺構

～61、第50図67～84、第51図86～88・90～93・97・98・100～104、第52図115～124・126・127・134～140・142・143、第53図145～150・152～154・160～163・166～170、第54図171～174・176～178・181～183・188～192・197・198、第55図203～205・212～217・221・222、第56図227～229・236～241・250～258、第79図269、第80図270、第81図280・281、第82図286・288・293・301・302・305・307・308・313・317～320、第83図323～327・329～350・353・354、第84図357・358・361～364・368～370・376・379～383、第85図384・387・394・395・397・398・400・401・404～406・408～412、第94図421・424、第96～98図465～519)

地文を施した後に、沈線区画の磨消帯を曲線的に施すものである。磨消帯は、J字状・U字状・S字状・波状などがみられ、稜線区画のもの、地文部よりも浮き上がるもの、刺突を施すものもある。器形・口縁部・口唇部には数種類の作りがみられるが、口縁部がやや外傾する平縁口縁で、胴部にやや膨らみのある深鉢形土器が多い。

5類（第45図37、第51図95、第54図179・180、第56図242・243、第80図276、第81図279、第82図290・292・297・306・311・315、第84図371～373、377、第98・99図520～530）

粘土紐を貼り付けて2個1対の刺みを施すもので、口縁部は粘土紐貼り付けなどで複雑な作りをする。隆起線で区画された部分を磨消しするものもある。器形は頸部が内傾し、口縁が立ち上がる鉢形土器である。

6類（第50図62、第96図464）

口縁部文様帶に粘土紐を貼り付け、隆帶及び文様帶に燃糸圧痕を施すものである。口縁部がやや外傾する深鉢形土器である。

3群土器（第52図129～132、第53図158、第54図195、第56図244・245、第79図263・264・266、第82図299・303・312、第85図391・413～416、第94図423、第99図533～546）

J字文、変形J字文の施されるものである。口縁部に2個1対の瘤が付くもの、口唇部に刺みを施したり突起をもつものがある。器形は鉢形・台付鉢形・浅鉢形などである。

4群土器（第99図554・555）

須恵器甕の破片である。表面に条線状の叩き板模、裏面に条線状の當て具板痕が認められる。

5群土器

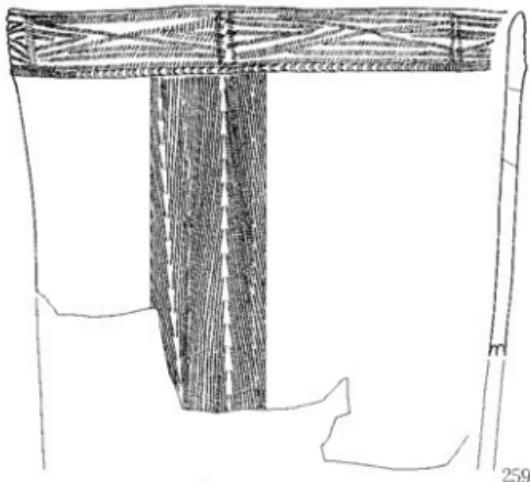
上述の分類に該当しないものや、地文のみのものを本群とした。

1類（第47図51、第80図272）

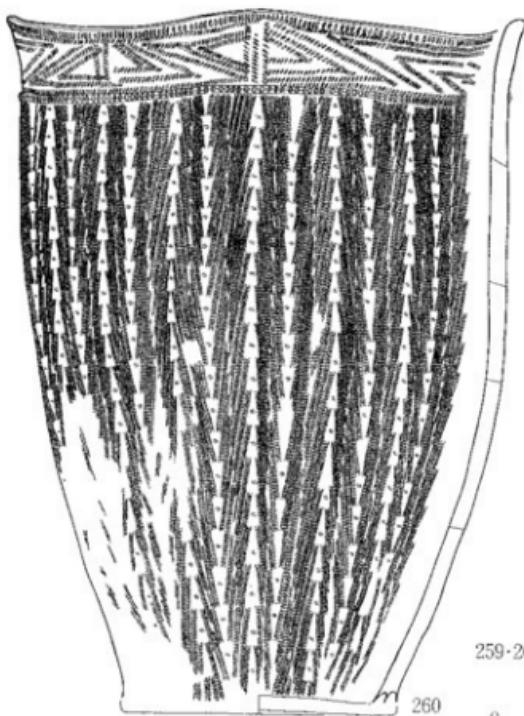
カキ目文を施すものである。櫛状工具によるもので、口唇部から底部の方へ施すものが主であるが、U字状、もしくは曲線的に施すのもみられる。272は平縁口縁をなす深鉢形土器で、口径33cm高さ44cmである。

2類（第45図38）

注口土器である。L.R・R.L繩文原体を使用し、器体中央部は判状繩文となる。地文を施した後



259



259・260 1号土塚

260

0 10cm

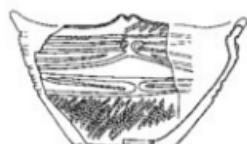
第78図 遺構内出土土器



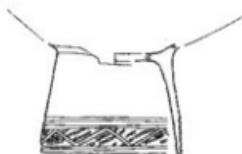
261



262



263



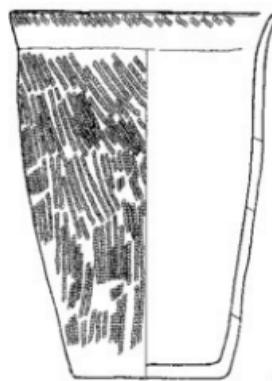
264



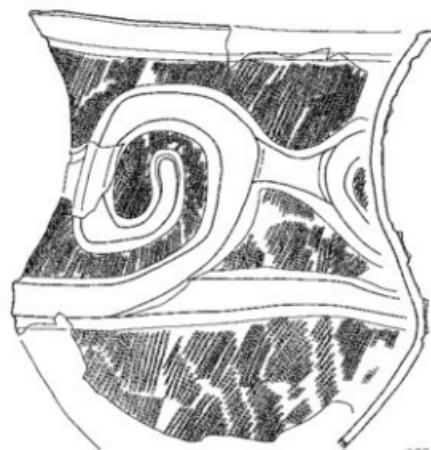
265



266



267

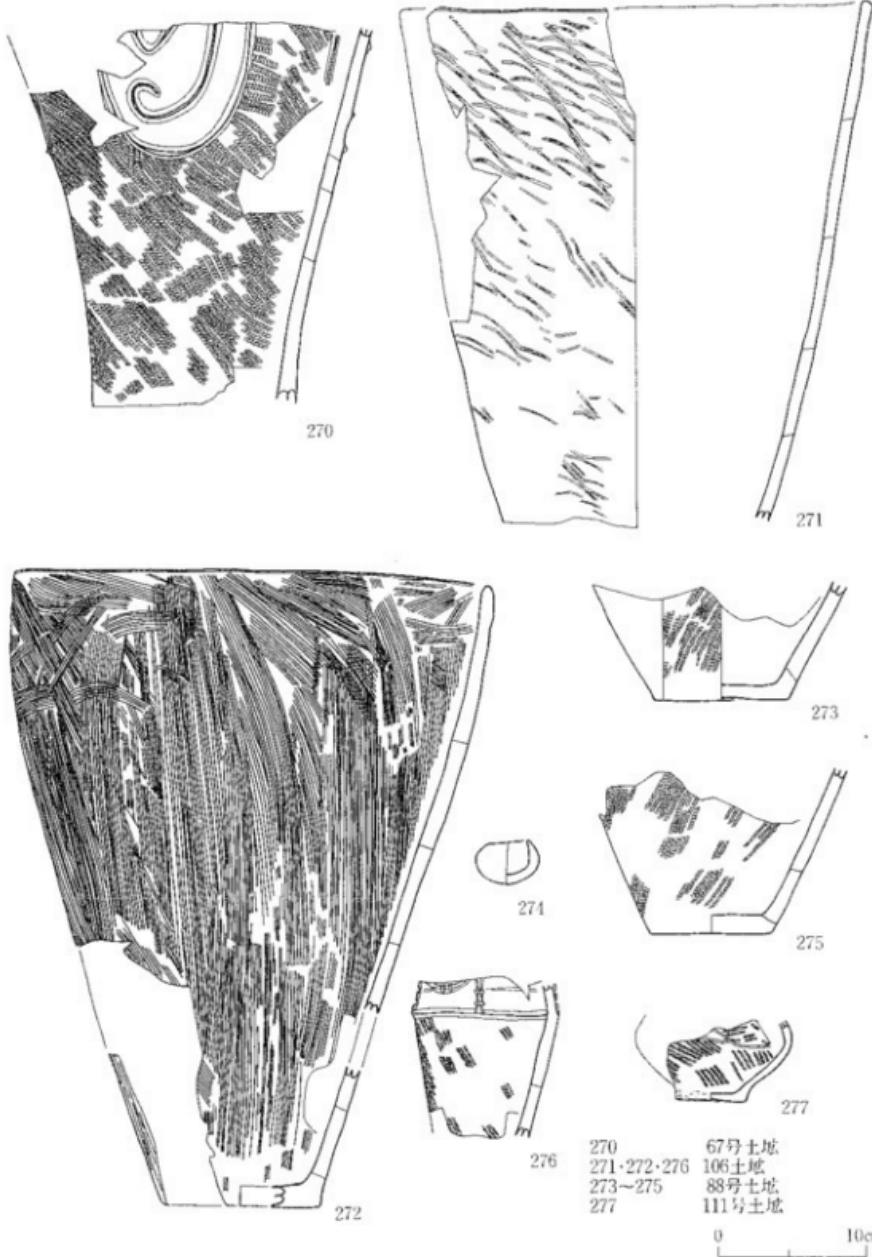


268

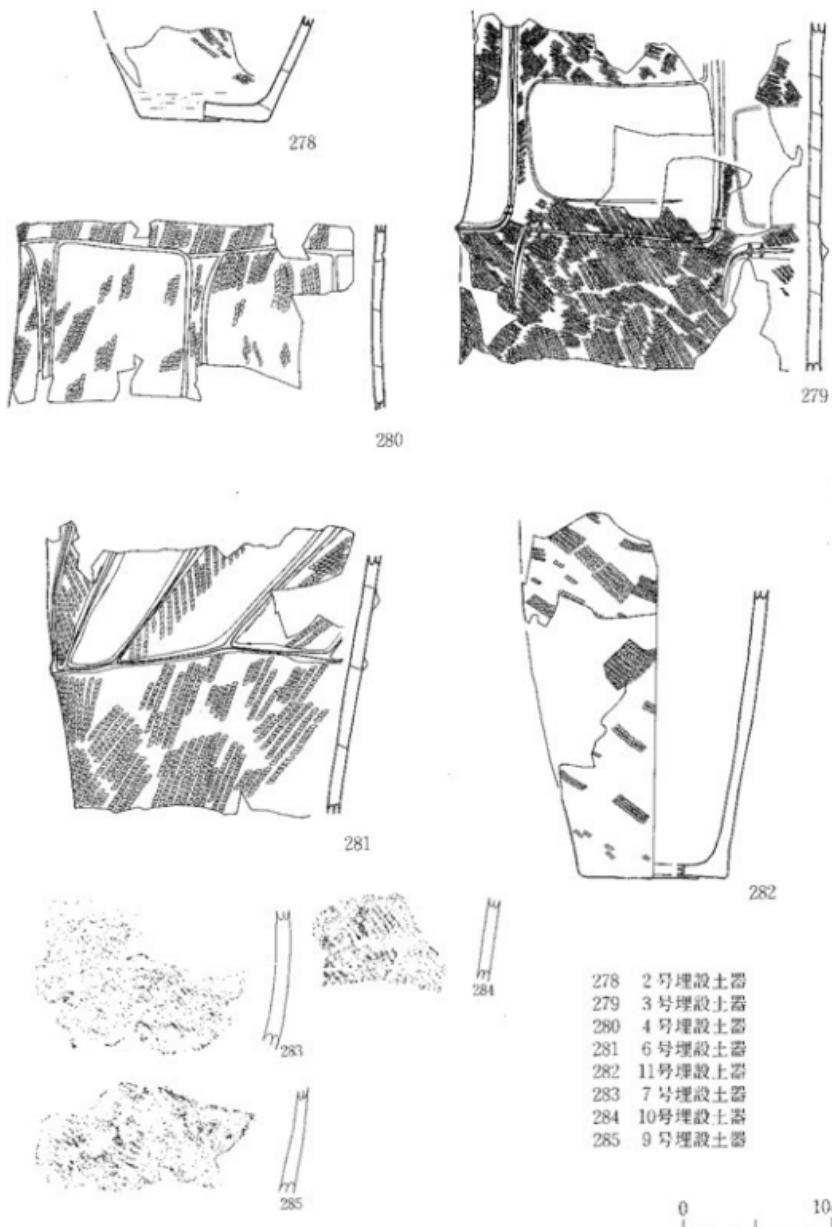
261·262 7号土壙
263·264 41号土壙
265·266 45号土壙
267·268 46号土壙
269 49号土壙

0 10cm

第79図 遺構内出土土器

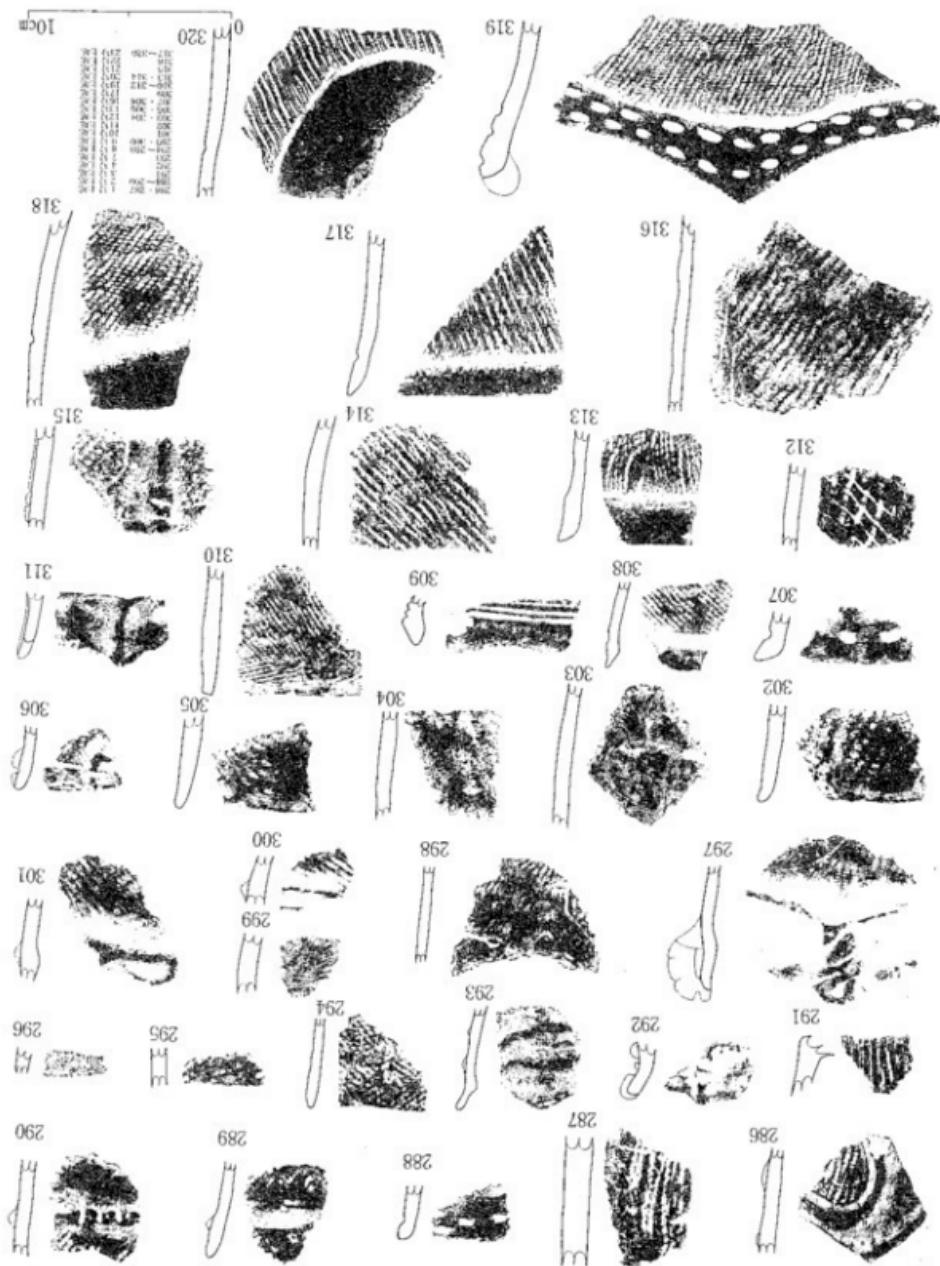


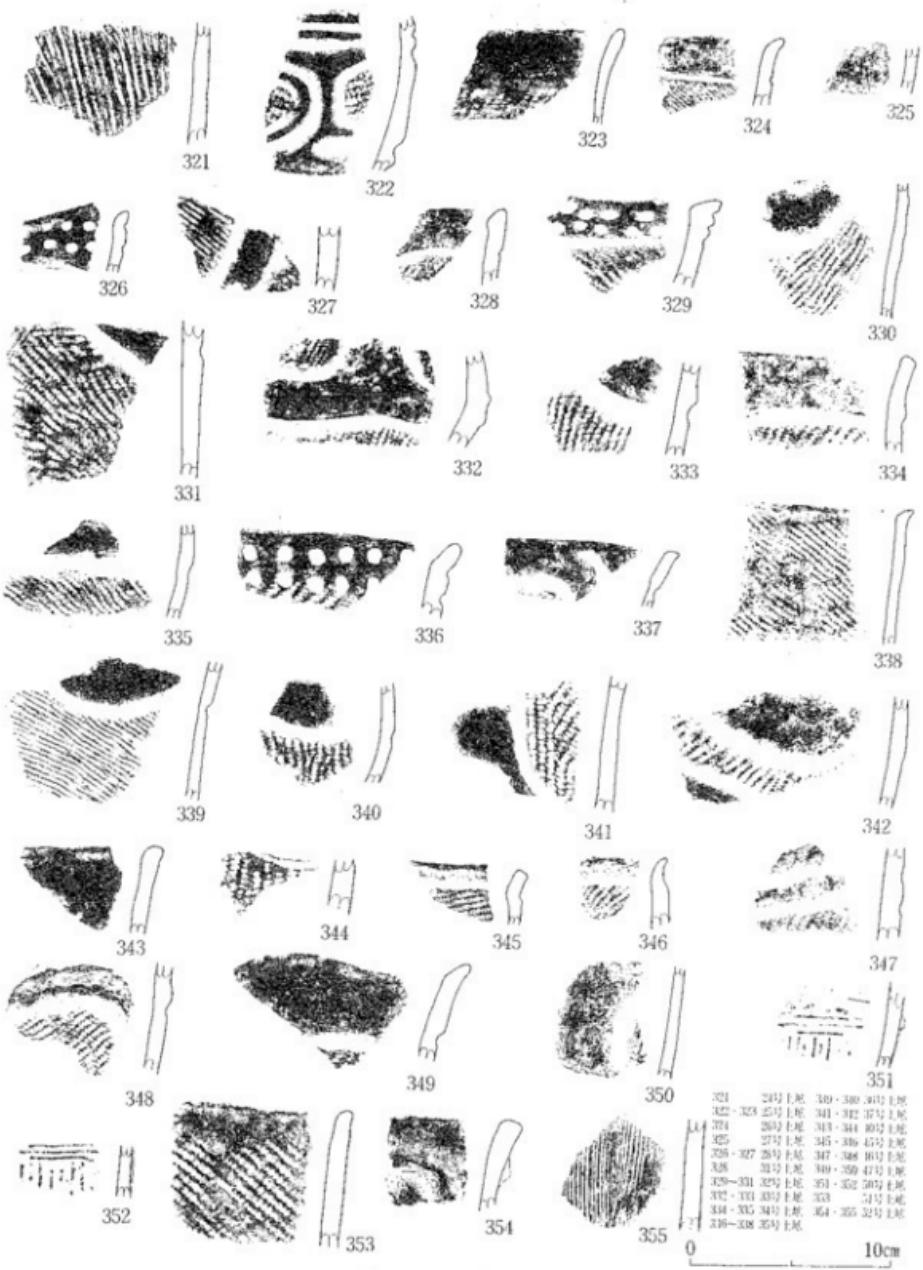
第80図 滝構内出土土器



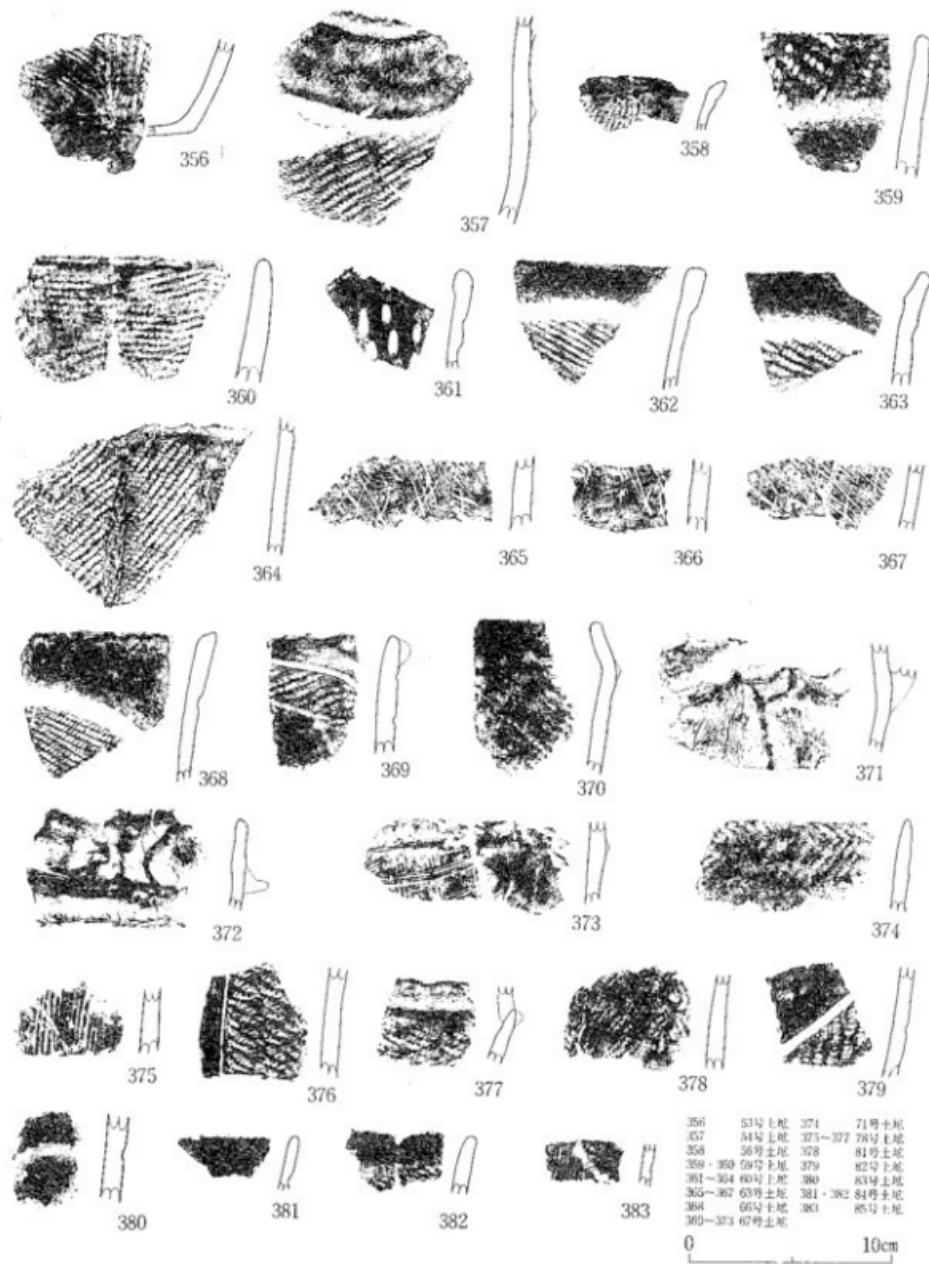
第81図 遺構内出土土器

第28图 遗物出土土器

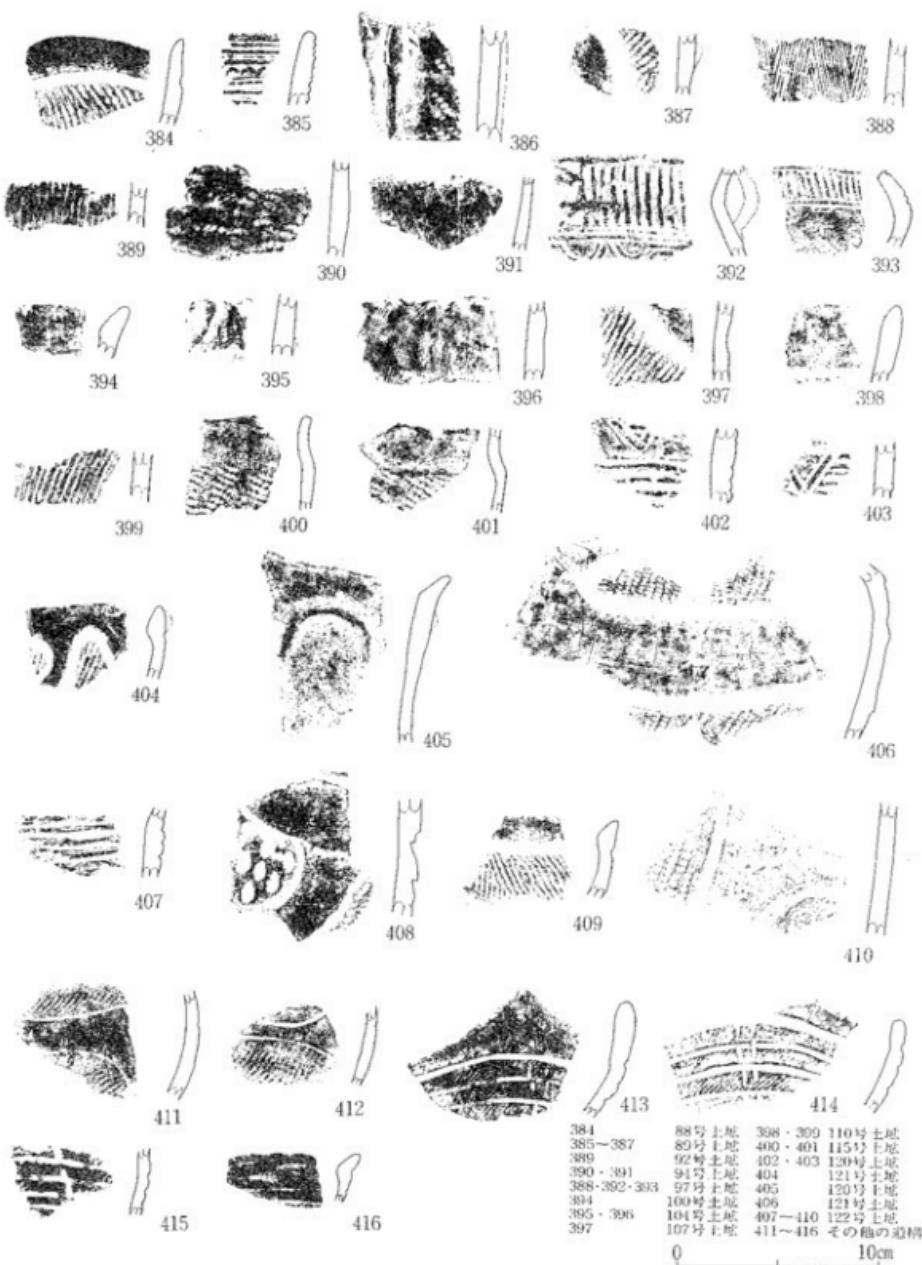




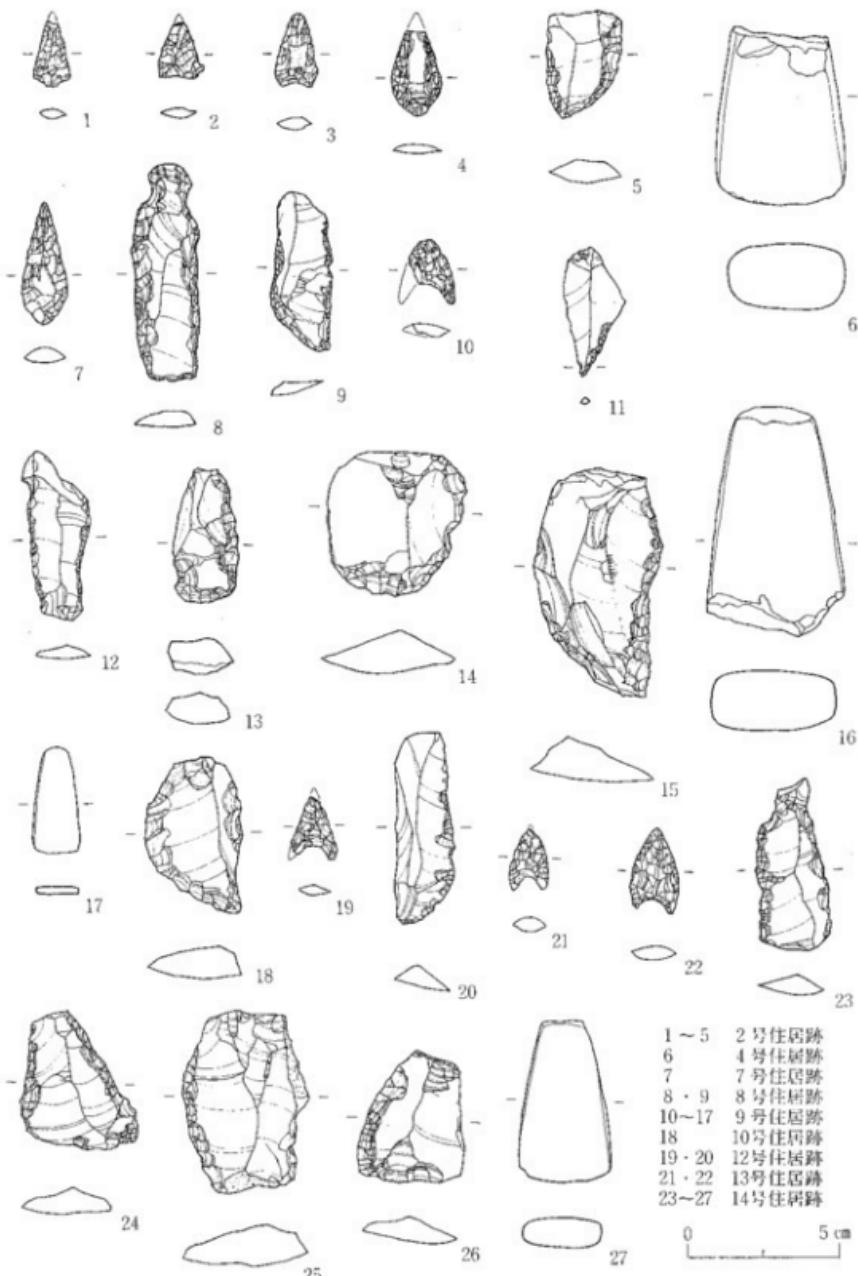
第83図 遺構内出土土器



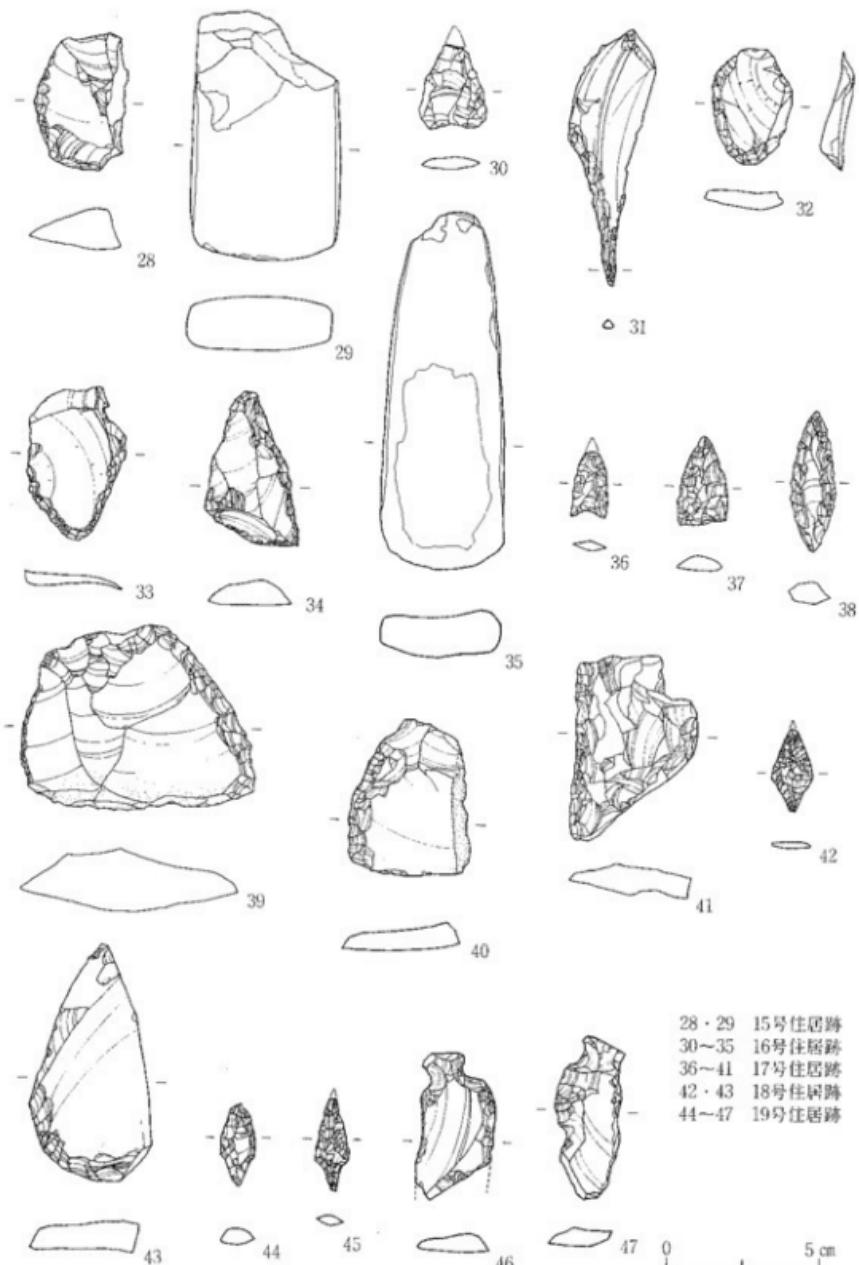
第84図 造構内出土土器



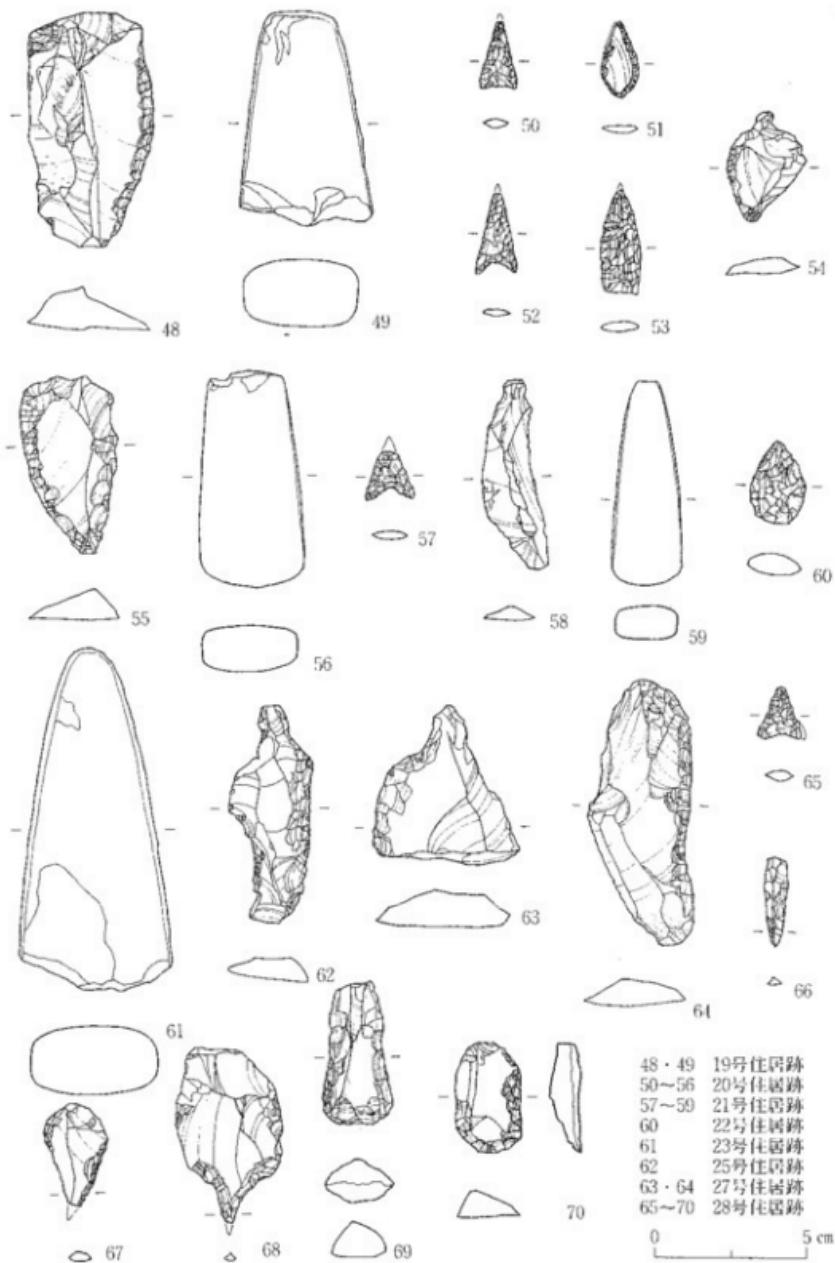
第85図 遺構内出土土器



第86回 遺構内出土石器



第87圖 遺構內出土石器

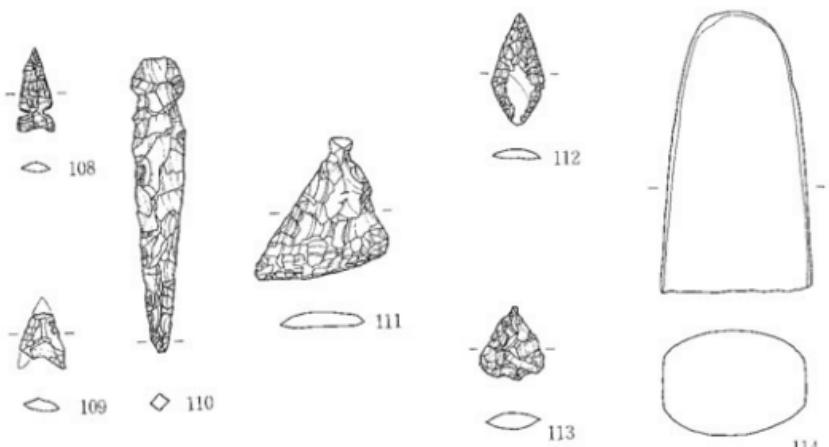
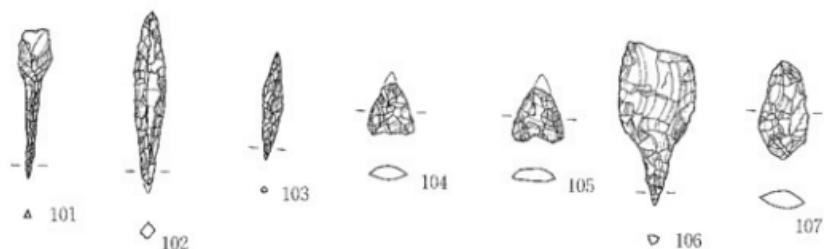
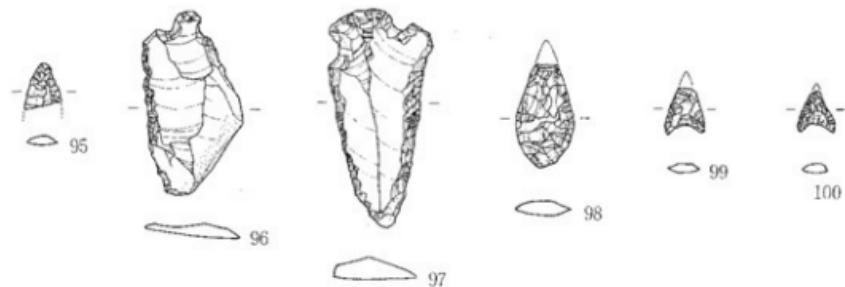


第88図 造構内出土石器



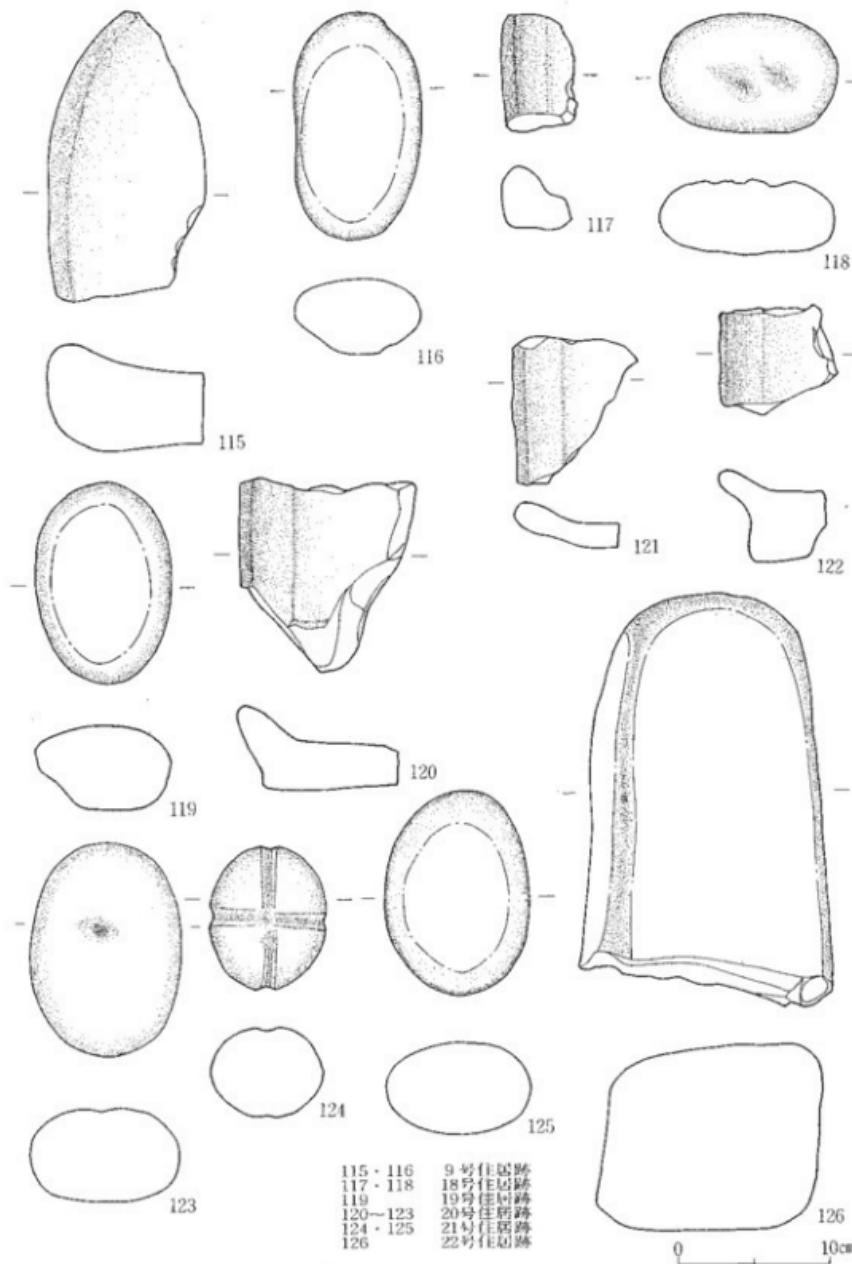
71・72 28号住居跡
 73～75 29号住居跡
 76 30号住居跡
 77～82 31号住居跡
 83～85 32号住居跡
 86～94 33号住居跡

第89図 通構内出土上石器

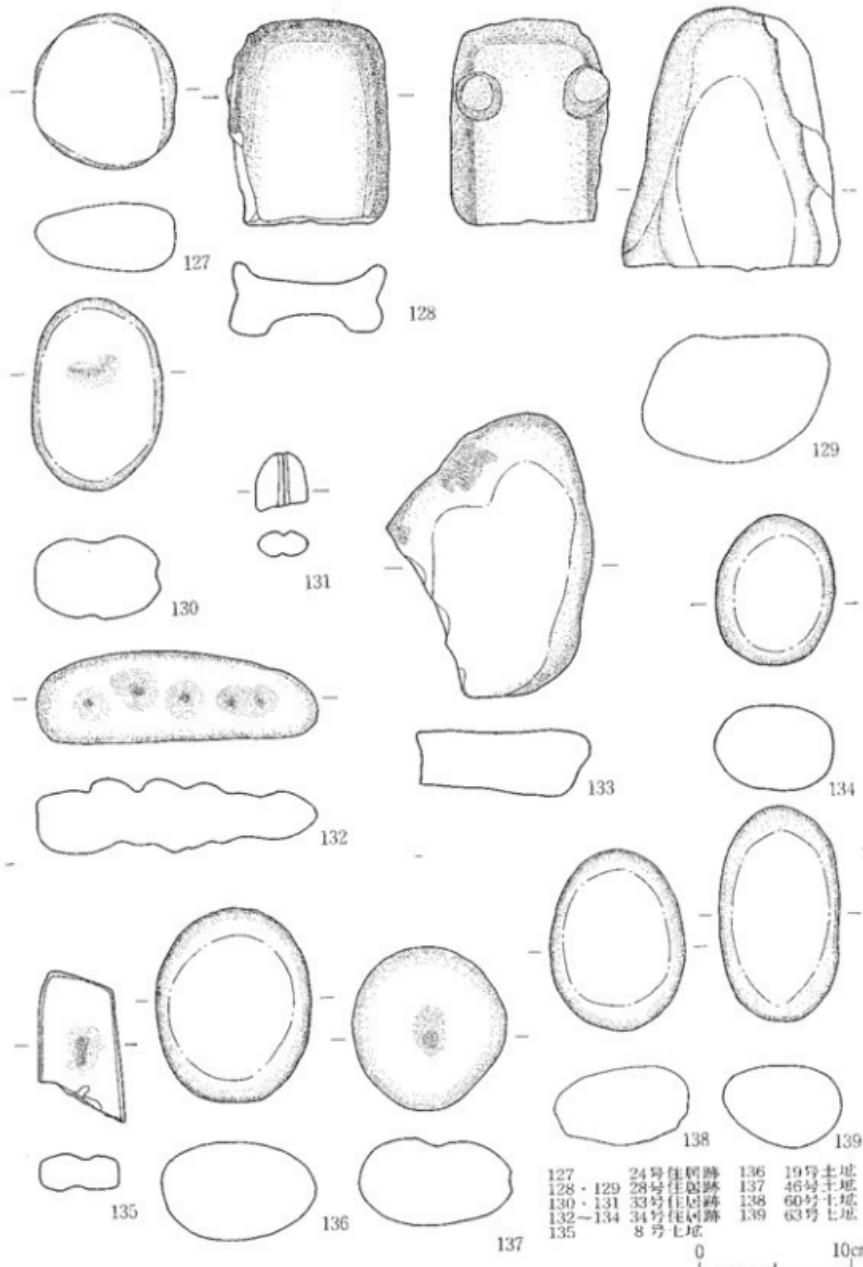


95	34号住居跡	104	88号上塙
96	35号住居跡	105 - 106	97号土塙
97	36号住居跡	107	98号土塙
98	1号土塙	108	105号土塙
99 - 101	20号土塙	109	109号土塙
102	46号土塙	110 - 111	炭焼窯
103	84号土塙	112	製鍊炉
		113 - 114	その他の遺構
		0	5 cm

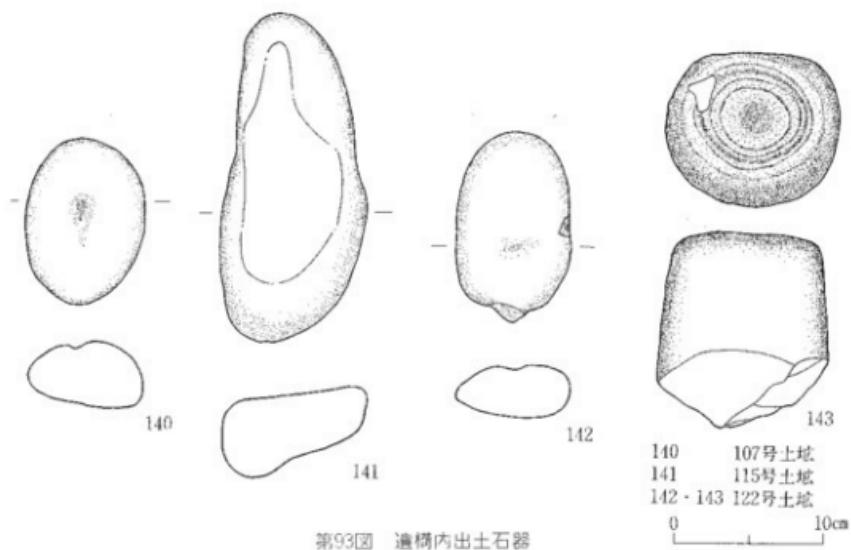
第90図 遺構内出土石器



第91図 遺構内出土石器



第92図 遺構内出土石器



に磨消しを行い、頭部に瘤が4個、器体中央部に刻みのある瘤が3個付く。

3類（第94図422）

小型の鉢形土器である。口唇部及び頸部に刻みが施され、口唇部には2個1対の突起が4個付く。口縁部と胴下部に沈線が巡り、胴部には不規則な波状の刻線を施し、器面全体には鋭利な工具による刺穴を施す。

4類（第46図45、第79図265・267）

圓文地文及び口縁部無文帶の鉢形土器である。45は7個の山形突起をもち、頭部に沈線が巡る。265は口縁部がやや外傾し、器肉が厚い。267は口縁部がやや外傾し、口唇部付近にも繩文がみられる。

5類（第54図196、第84図375、第85図388、第99図547～549）

網目状撚糸文、刻線を網目状に施すものである。

6類（第99図551・552）

同一個体で、葉脈状に文様を施すものである。

土製品（第100～103図）

1～4は土偶である。1は無節繩文、2・3は刺突を施す。4は乳部があり、全面的に磨滅が著しい。全て欠損品である。5～9は三角形土製品である。刺突及び刻線を施し、全て欠損品である。10～12はスタンプ状をなすものである。13は三角形をなす土製品で、上部に孔が認められる事から装飾品と考えられる。14～106は再利用土製品（円盤状土製品）である。土器片を再利用したもので



417



418



419



420



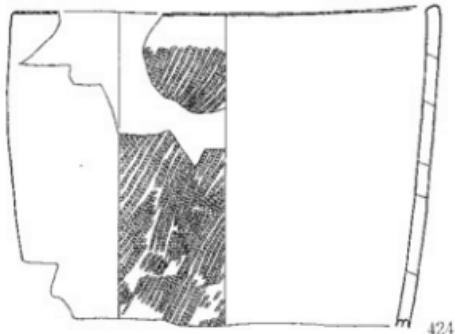
421



422



423



424



425



426



第94図 遺構外出土土器



第95回 遺構外出土土器

圖96 圖 遺物外出土于土器

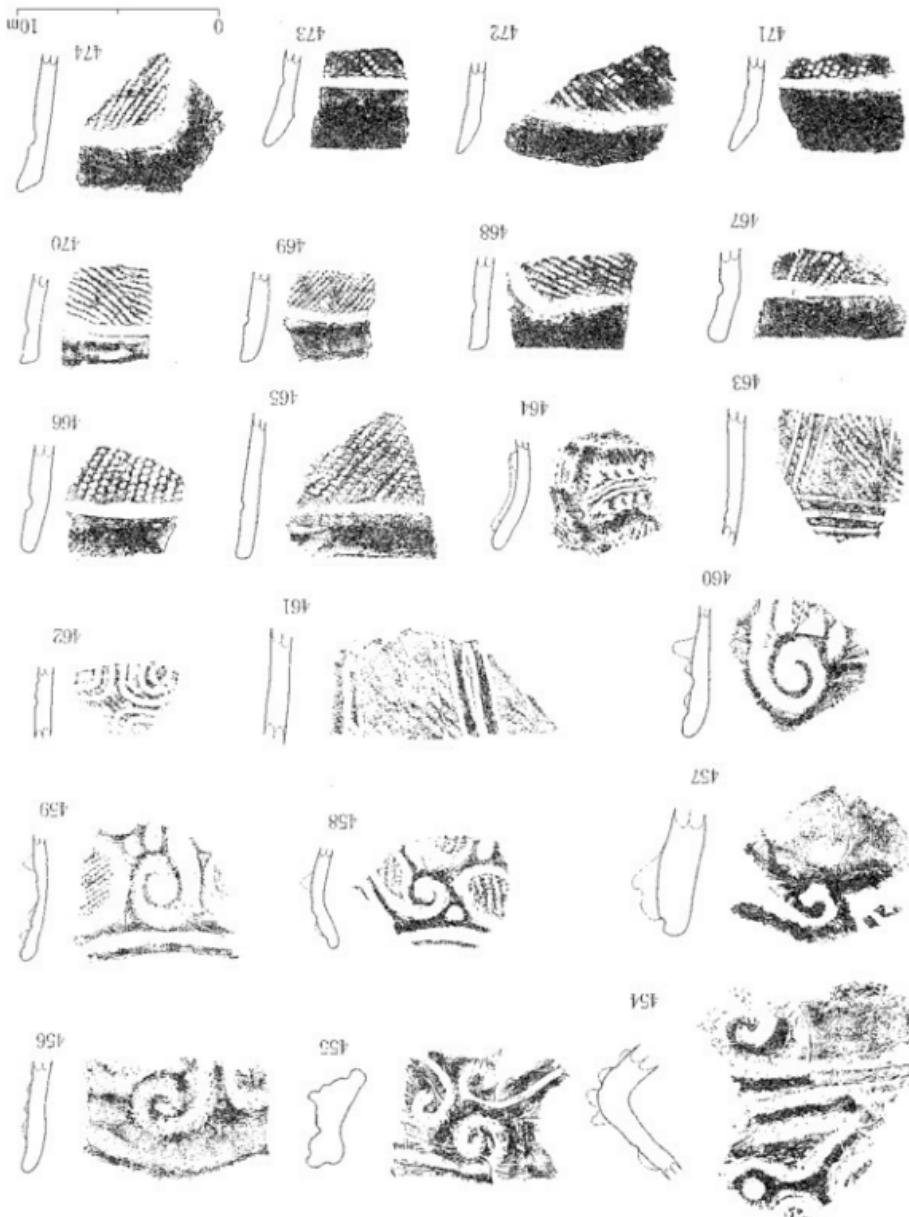
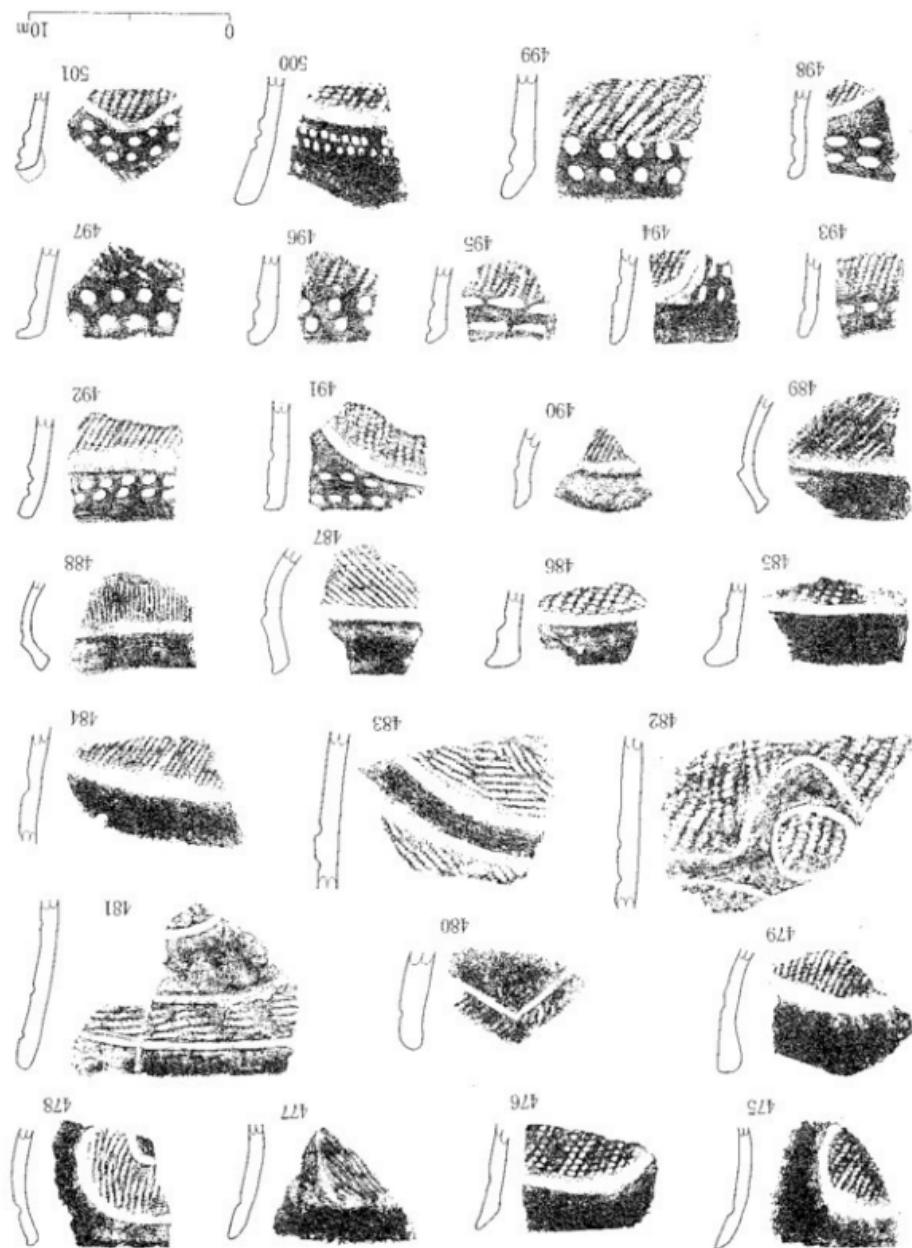


圖9-圖 遺物出土于土器



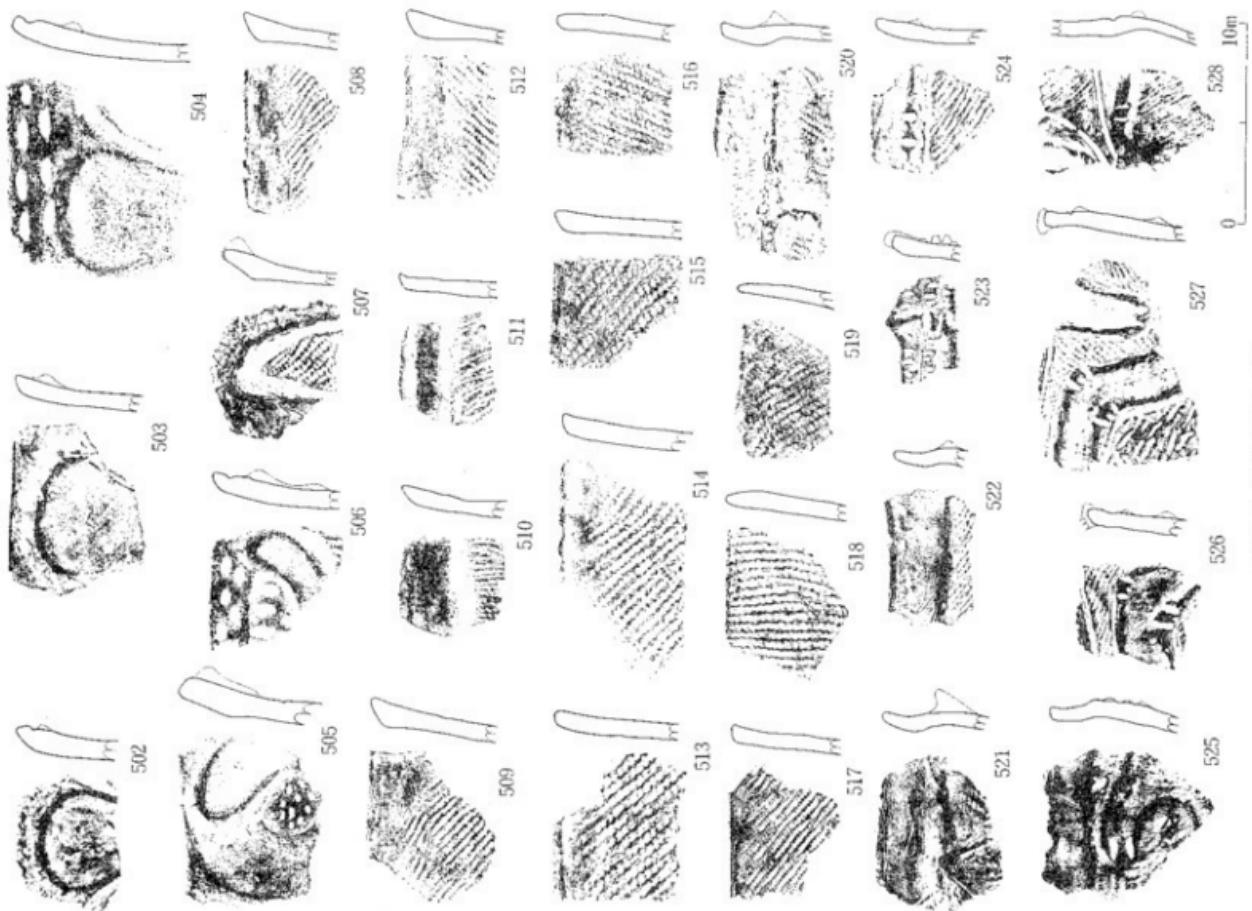
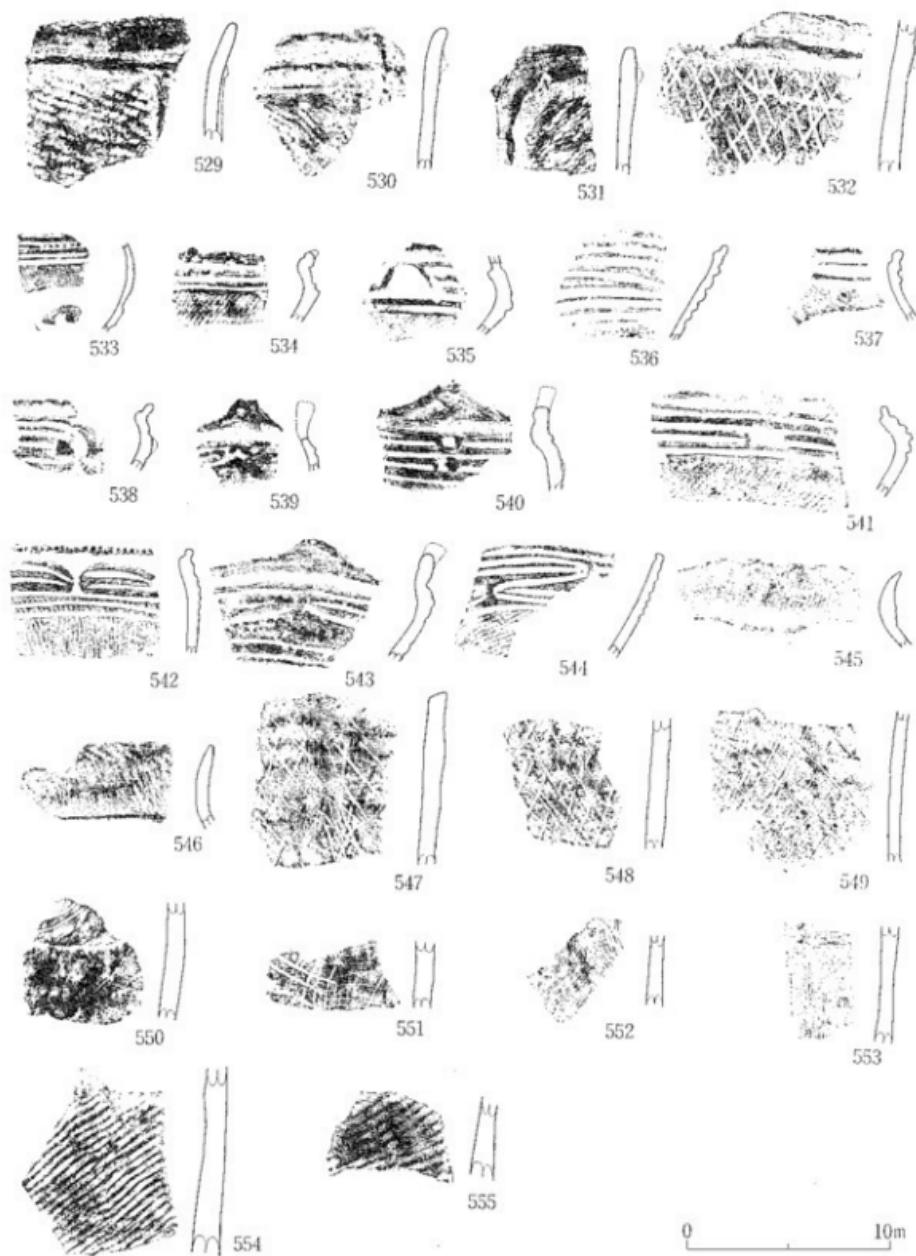


圖98 圖 通海出土土器



第99図 遺構外出土土器

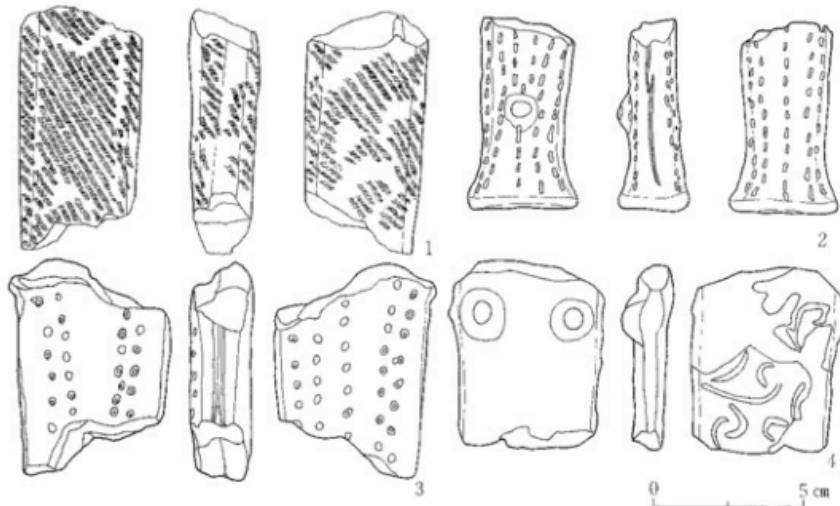
円形を呈するものと方形（または長方形）を呈するものとに分類される。

遺構出土石器（第105～117図）

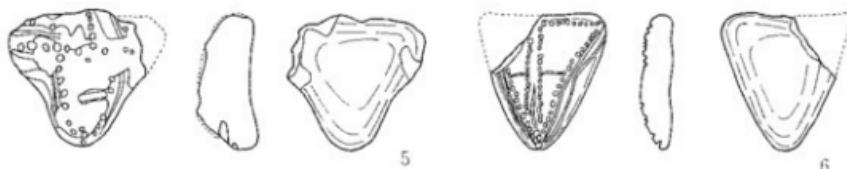
144～176は石鎌で、有茎・無茎のものがあり、アスファルトの付着するものがある。177～181は石錐である。182～201は石匙である。182～196は縦型、197～201は横型で、ツマミ部にアスファルトが付着するものもある。202～208は槍先状石器で、202・203の基部にアスファルトの付着が認められる。209～215は撫形状石器で、鋸的機能が考えられる。216～226はヘラ状石器で、両面からの加工である。227～238は搔器、搔器状石器で、片面加工である。239～245は削器、削器状石器で片面加工である。246～280は磨製石斧で、ほとんどが破損している。246～253は小型で、249の石質は翡翠である。281は打製石斧である。282は石劍で、側面に溝がみられる。石質は粘板岩である。283は石棒で、頭部に三段の環とこれに続く山形・円形文を彫刻状に施す。頭頂部はくぼむ。284～309はくぼみ石である。くぼみ部が、片面・両面のもの、複数のものがあり、磨石と併用するものもある。310～324は磨石・敲石である。全面を磨るもの、側面に敲痕のあるものがある。325～329は石皿で、全て破損し、330～335は石皿状をなす石器である。336・337・339・340は磨痕の認められるもので台石と考えられる。

石製品（第118・119図）

1～5は有孔石製品である。1～3は装飾品と考えられ、両面から孔を穿っている。4・5は輕石である。6は円盤状石製品である。7は岩偶である。8は石冠状石器である。

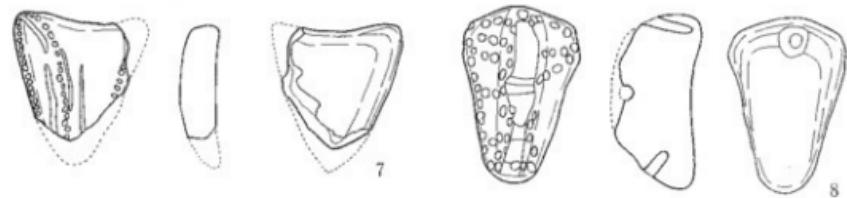


第100図 土 製 品



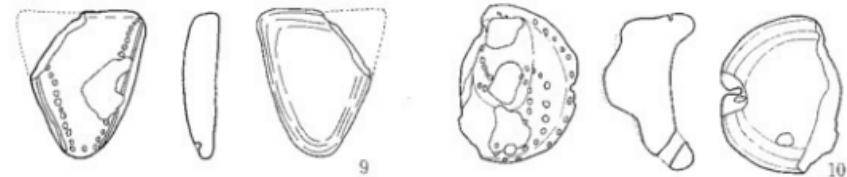
5

6



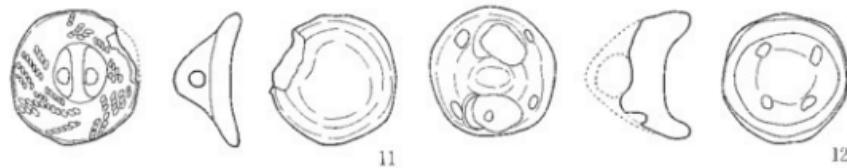
7

8



9

10



11

12



13

- 1 28号住居跡
- 2 33号住居跡
- 3 32号住居跡
- 5 10号住居跡
- 6 9号住居跡
- 7 54号土地
- 8 8号住居跡
- 11 9号住居跡
- 12 37号土地
- 13 31号住居跡
- 4・9・10 遺構外

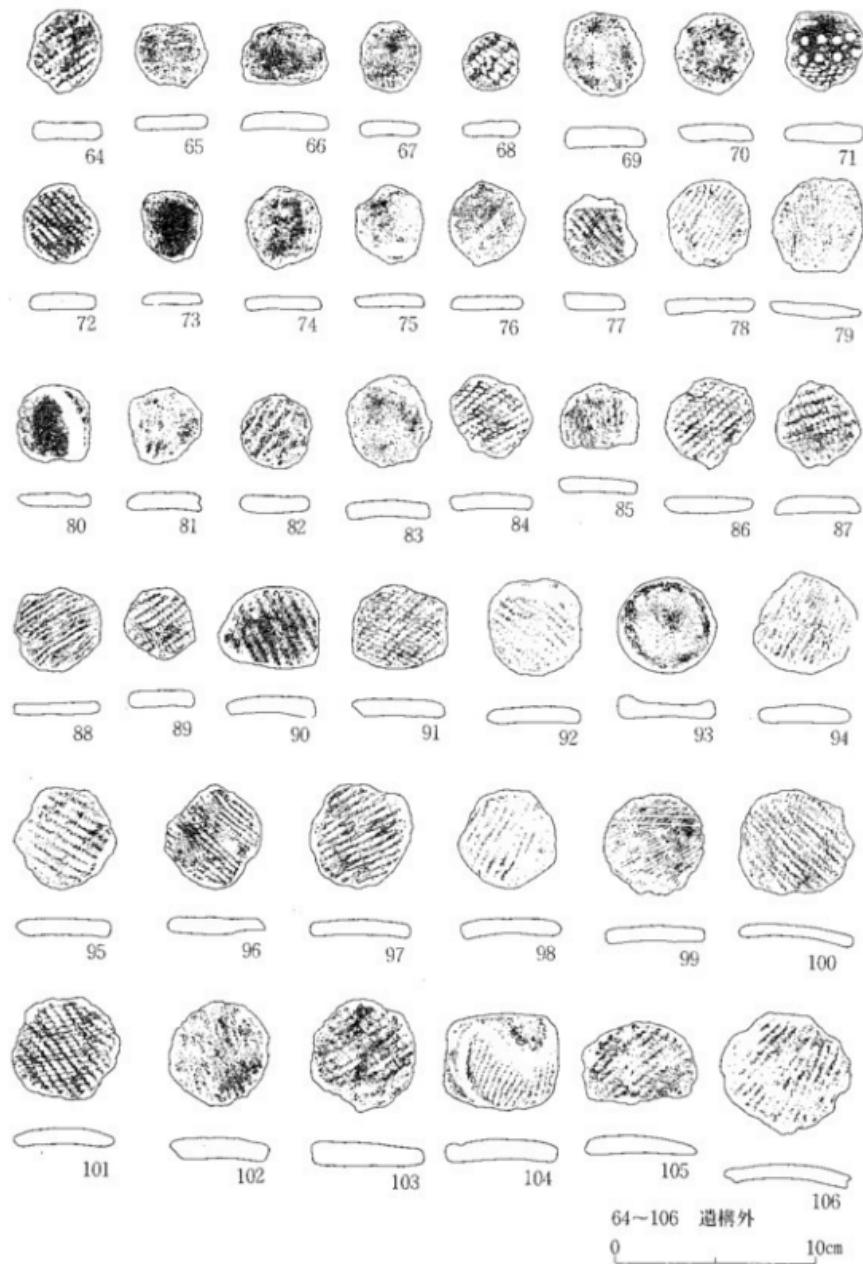
0

5 cm

第101図 土 製 品

圖102 圖 重刊用土壤學品

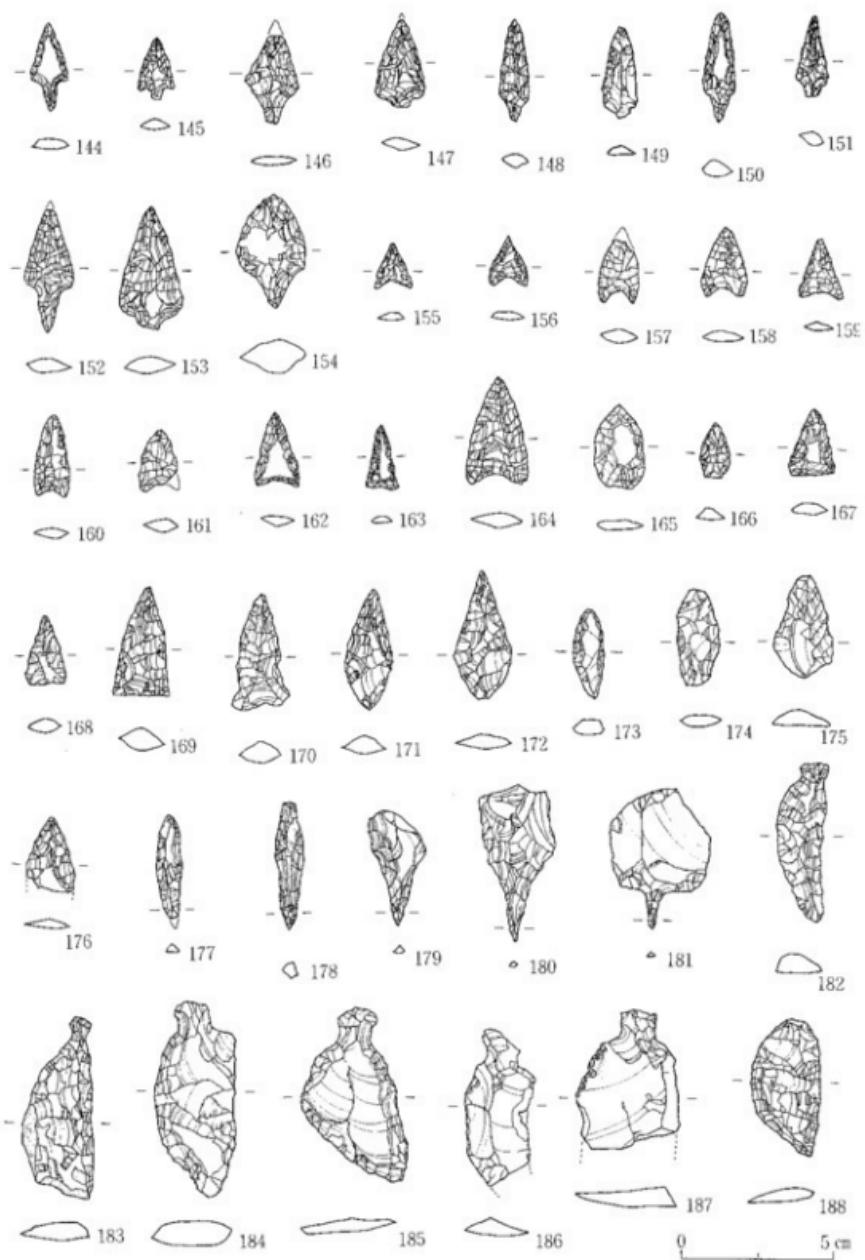




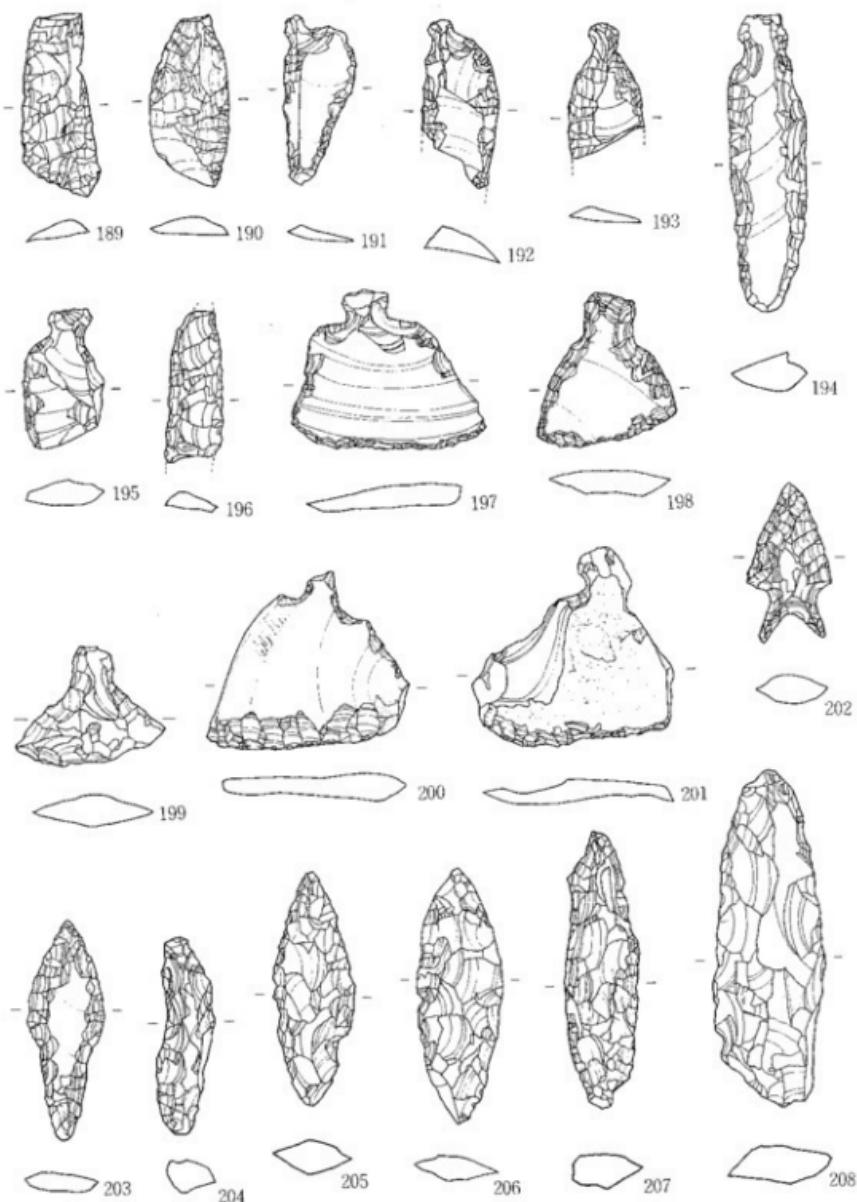
第103図 再利用土製品



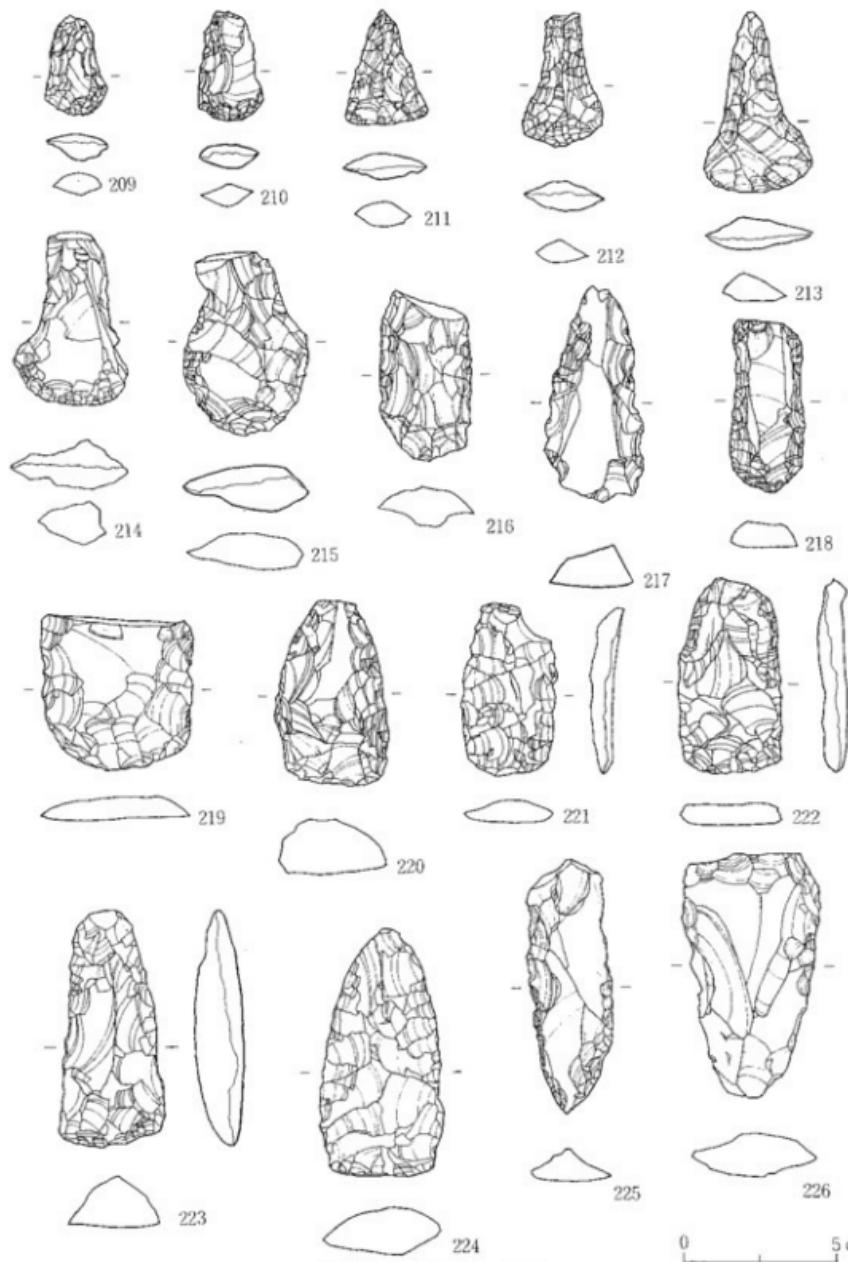
第104図 土器底部



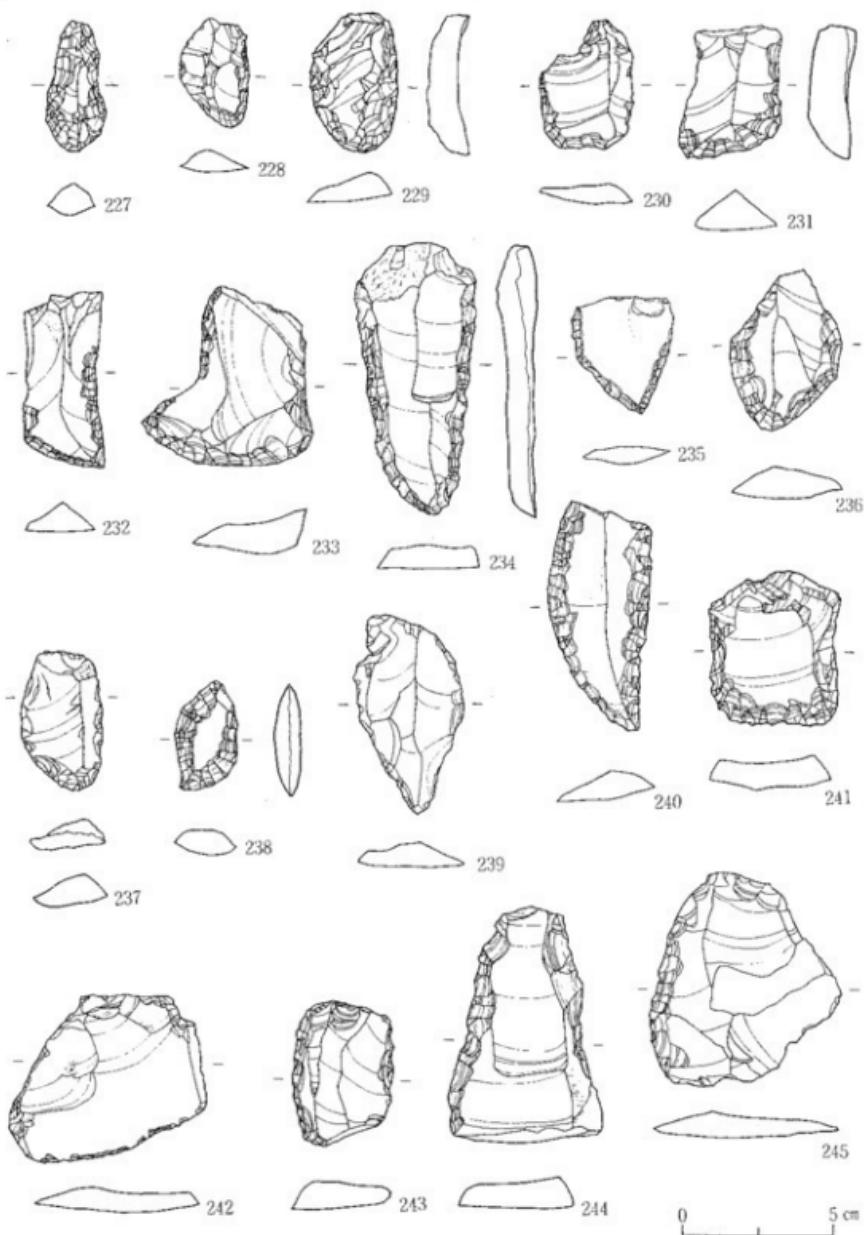
第105図 遺構外出土石器



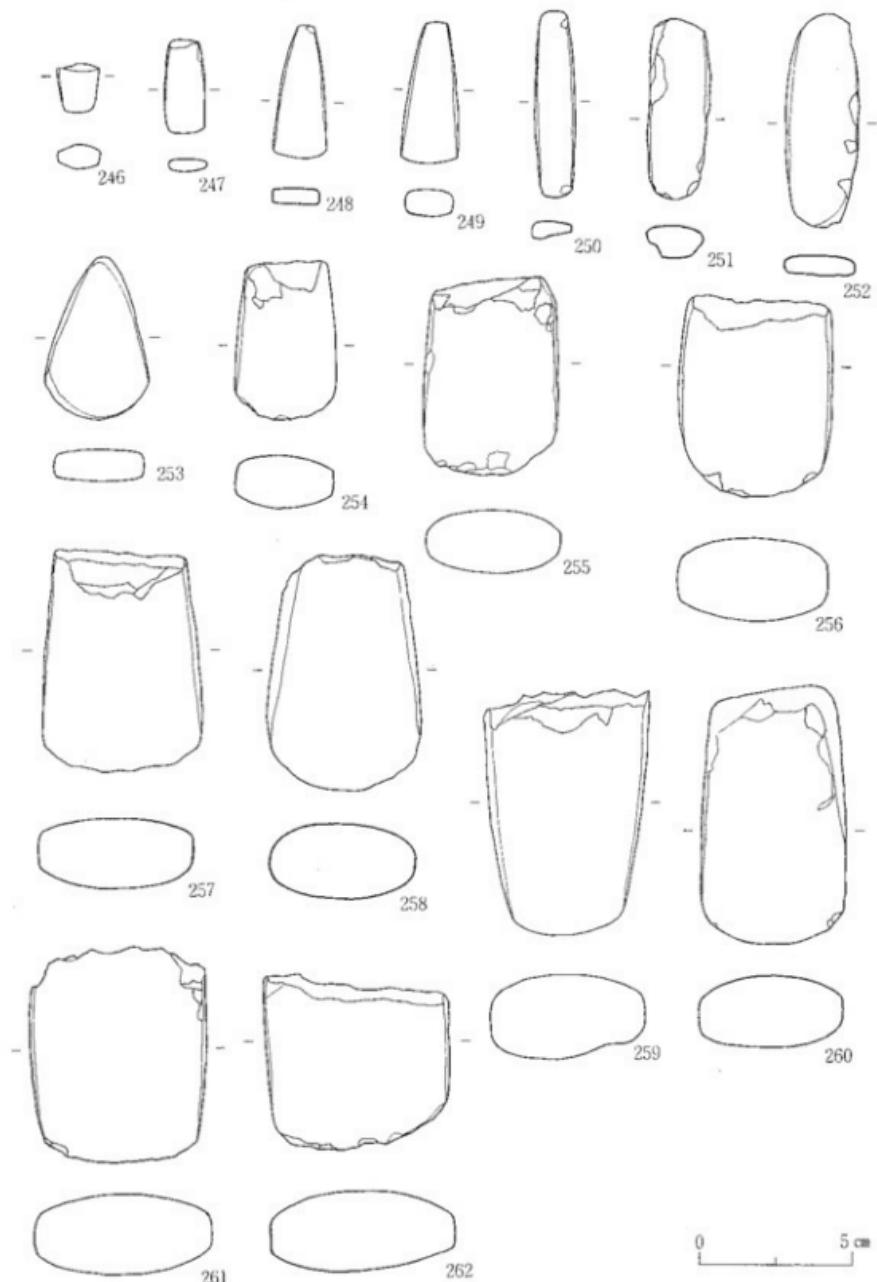
第106図 過構外出土石器



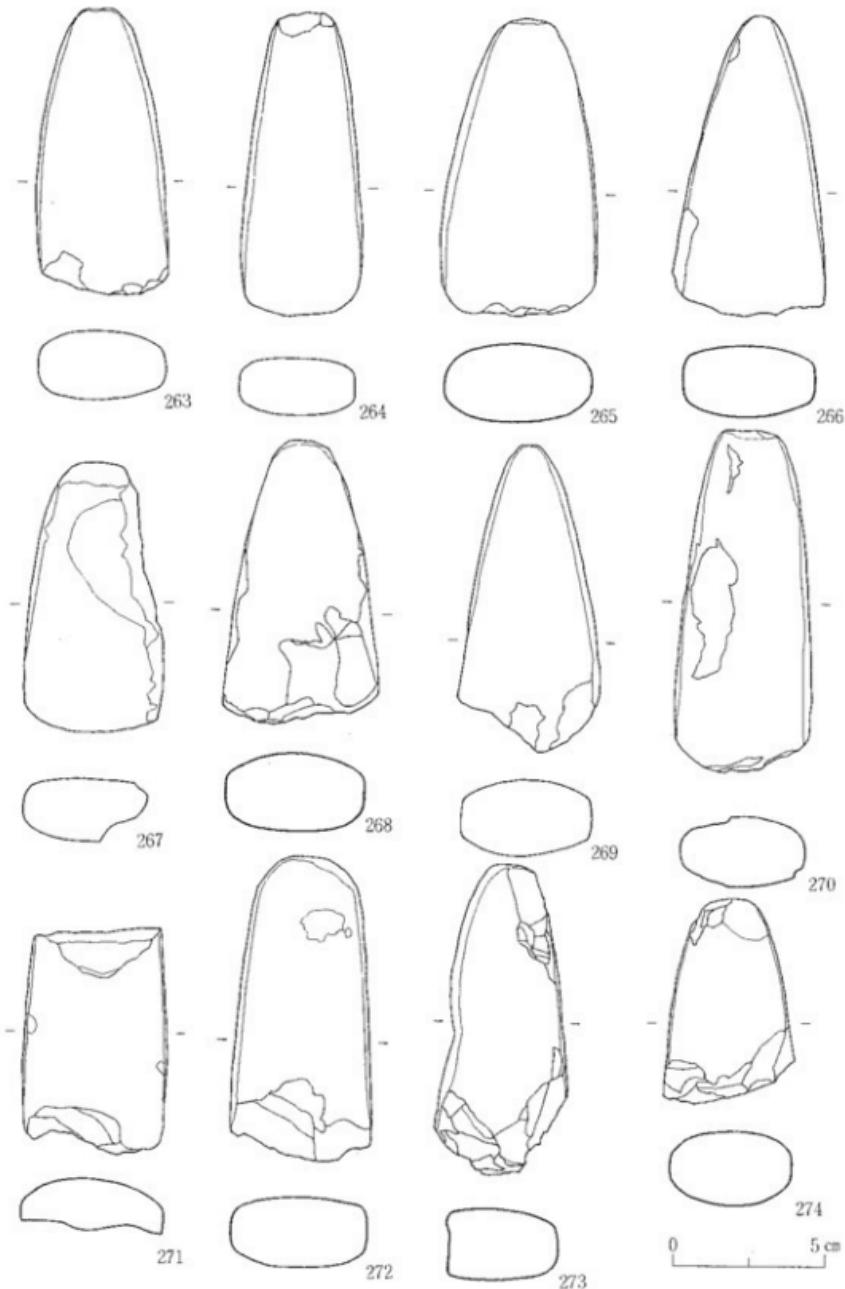
第107図 遺構外出土石器



第108図 遺構外出土石器



第109図 遺構外出土石器



第110図 通構出土石器



275



276



277



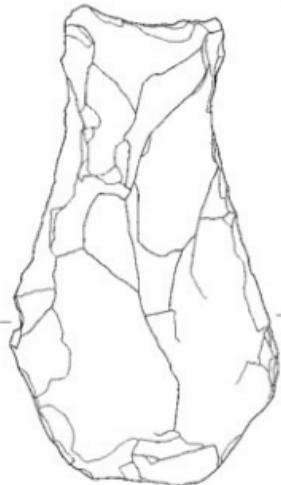
278



279



280



281

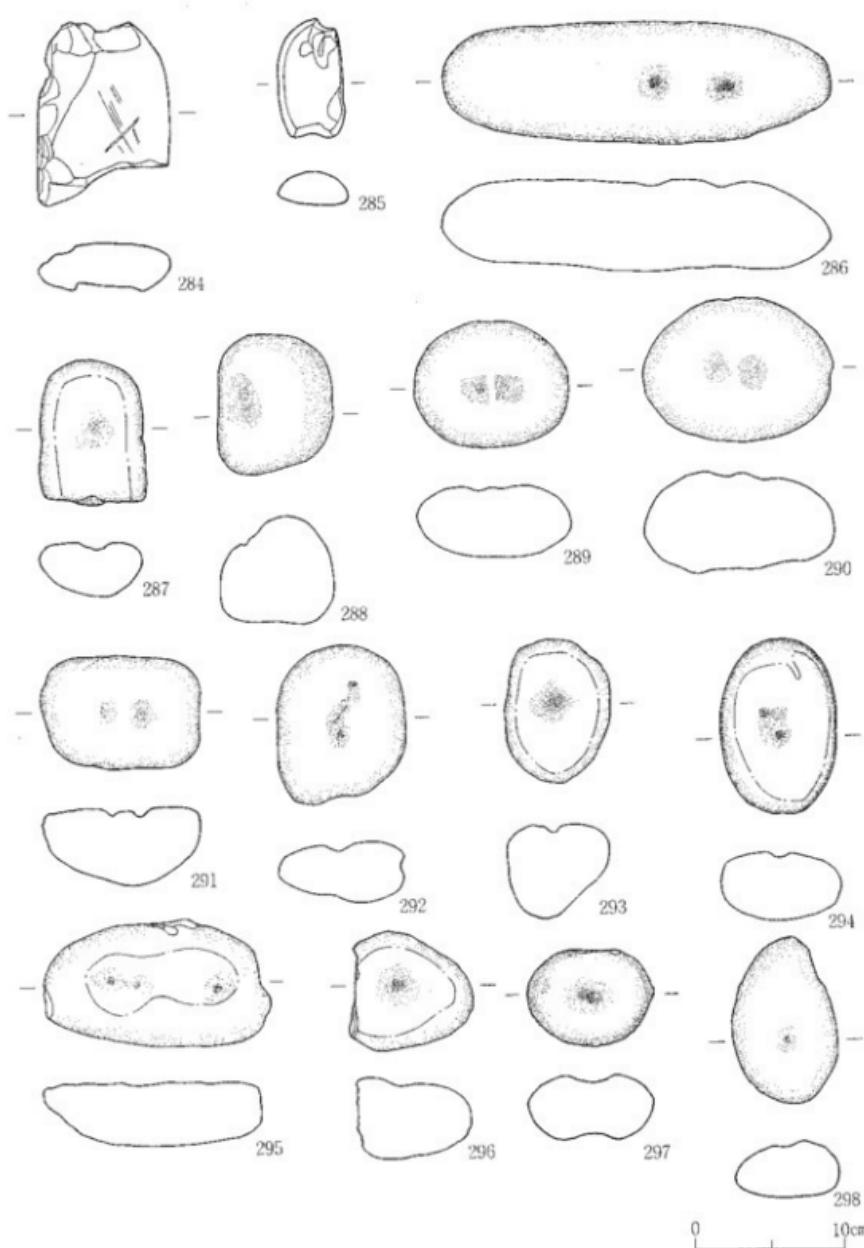


282

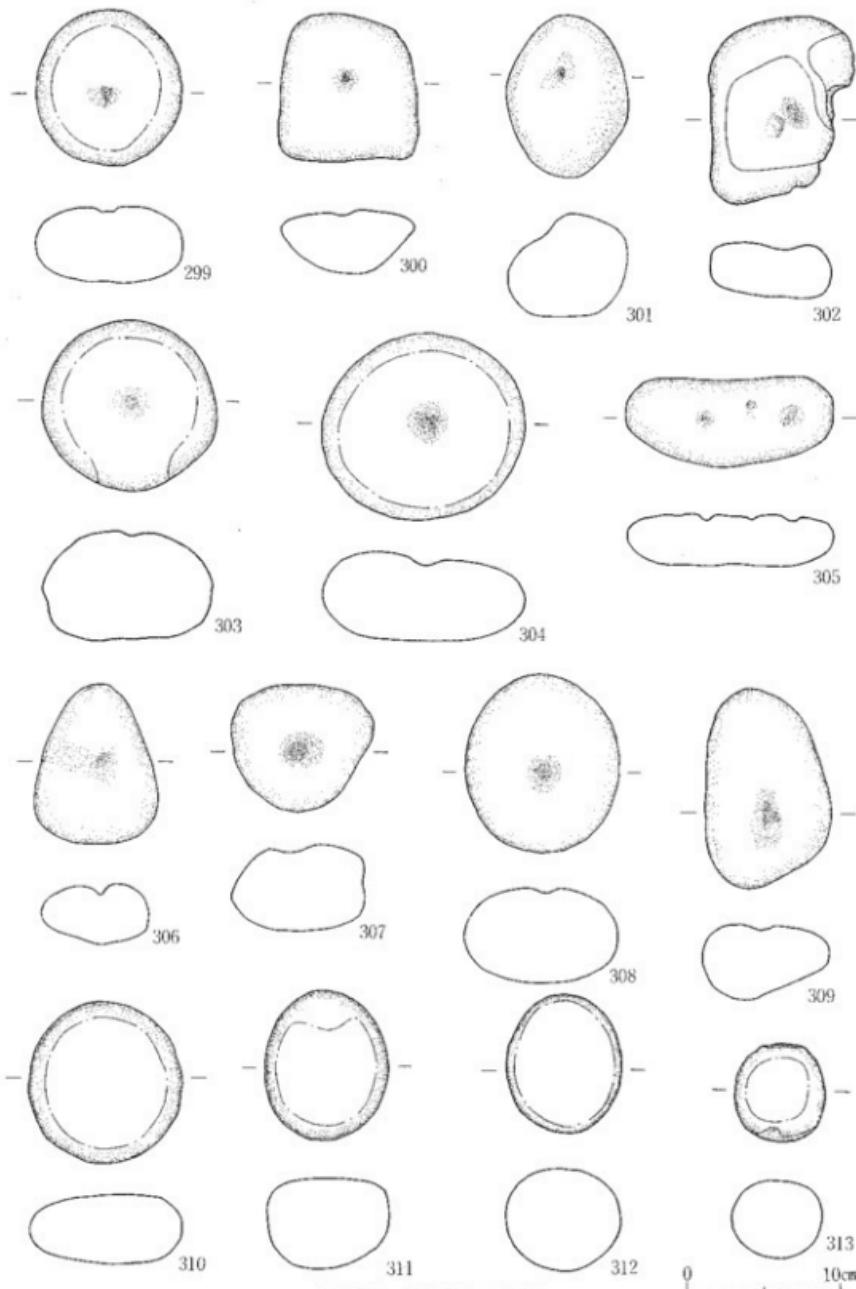
0

5 cm

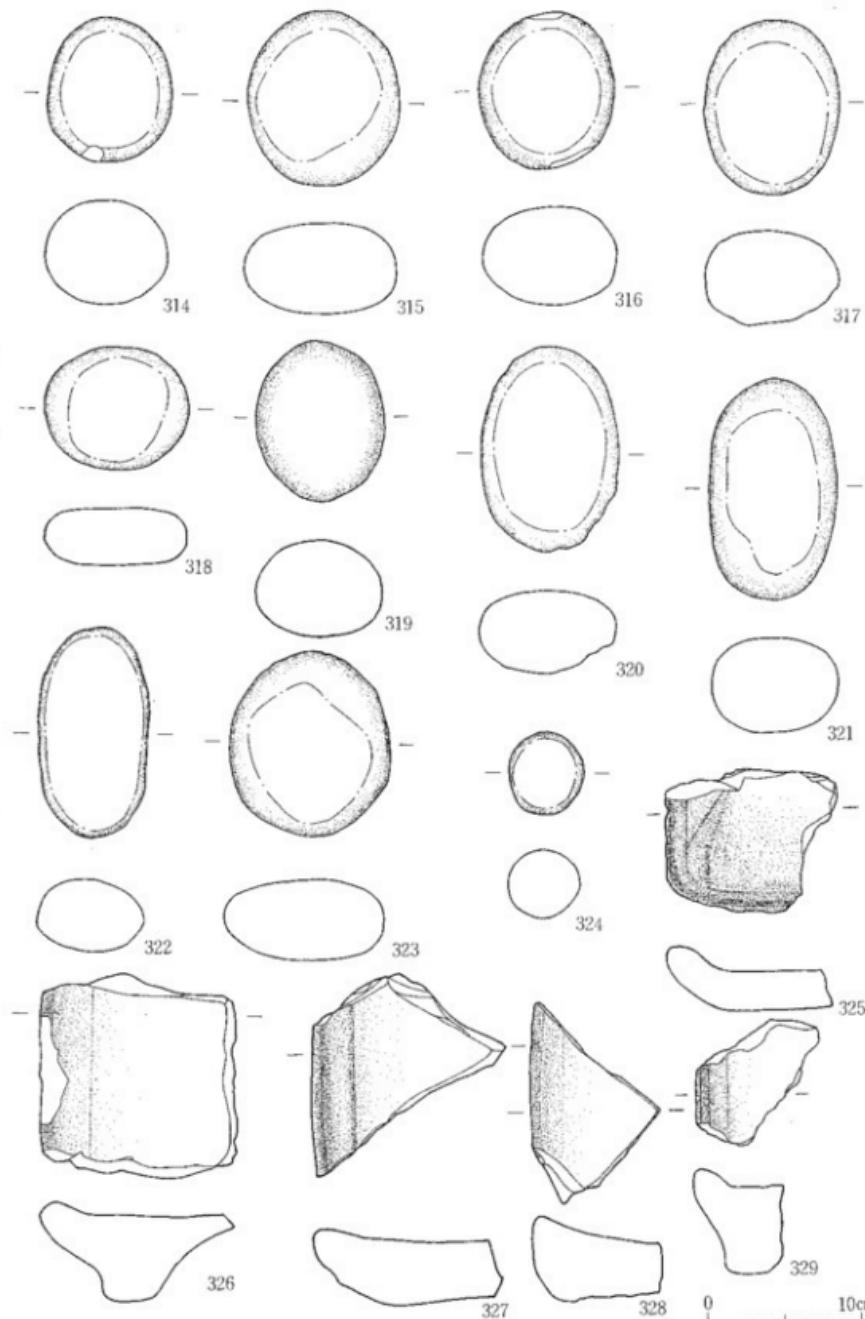
第111図 遺構外出土石器



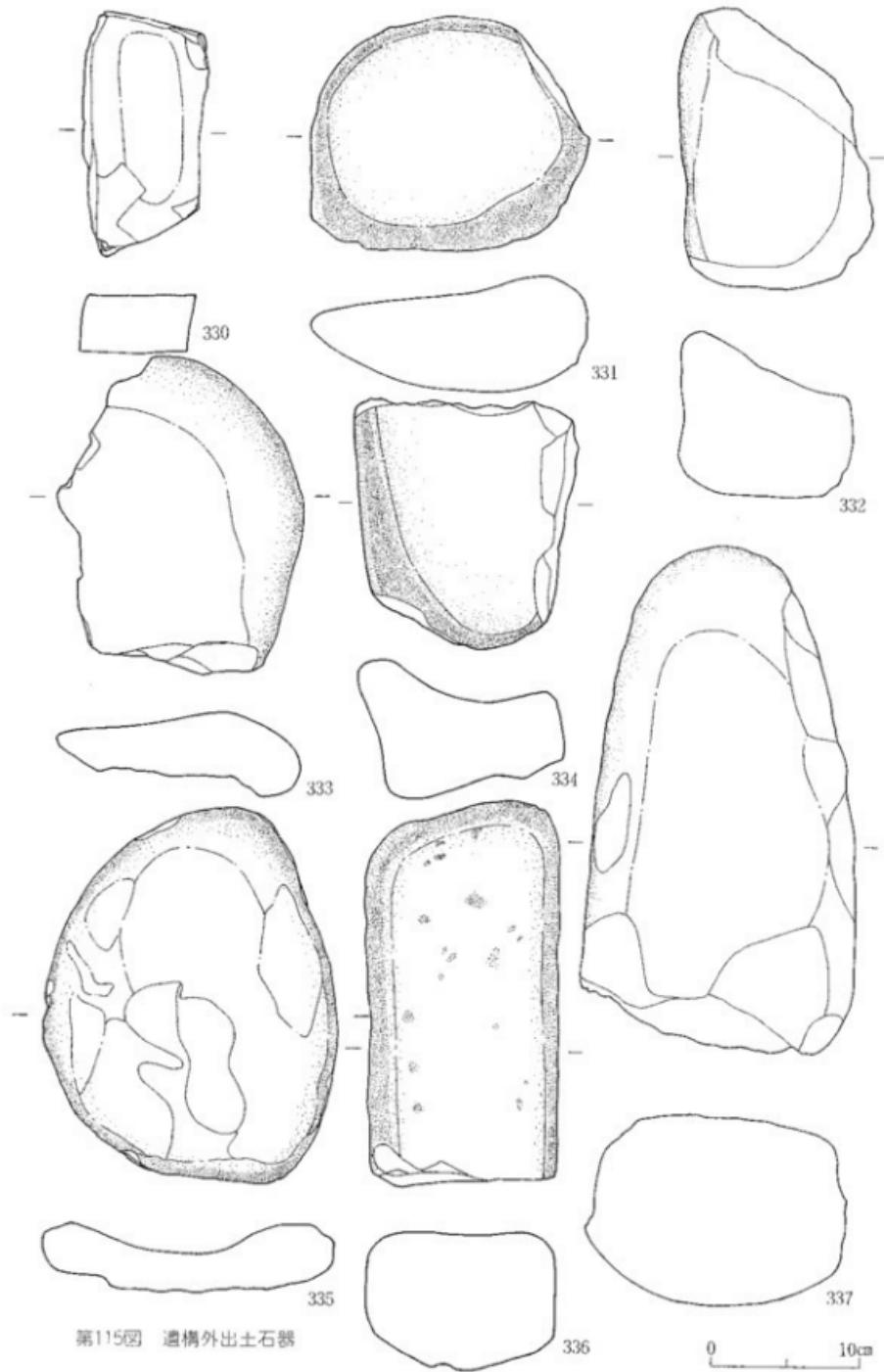
第112図 通構出土石器



第113図 遺構外出土石器

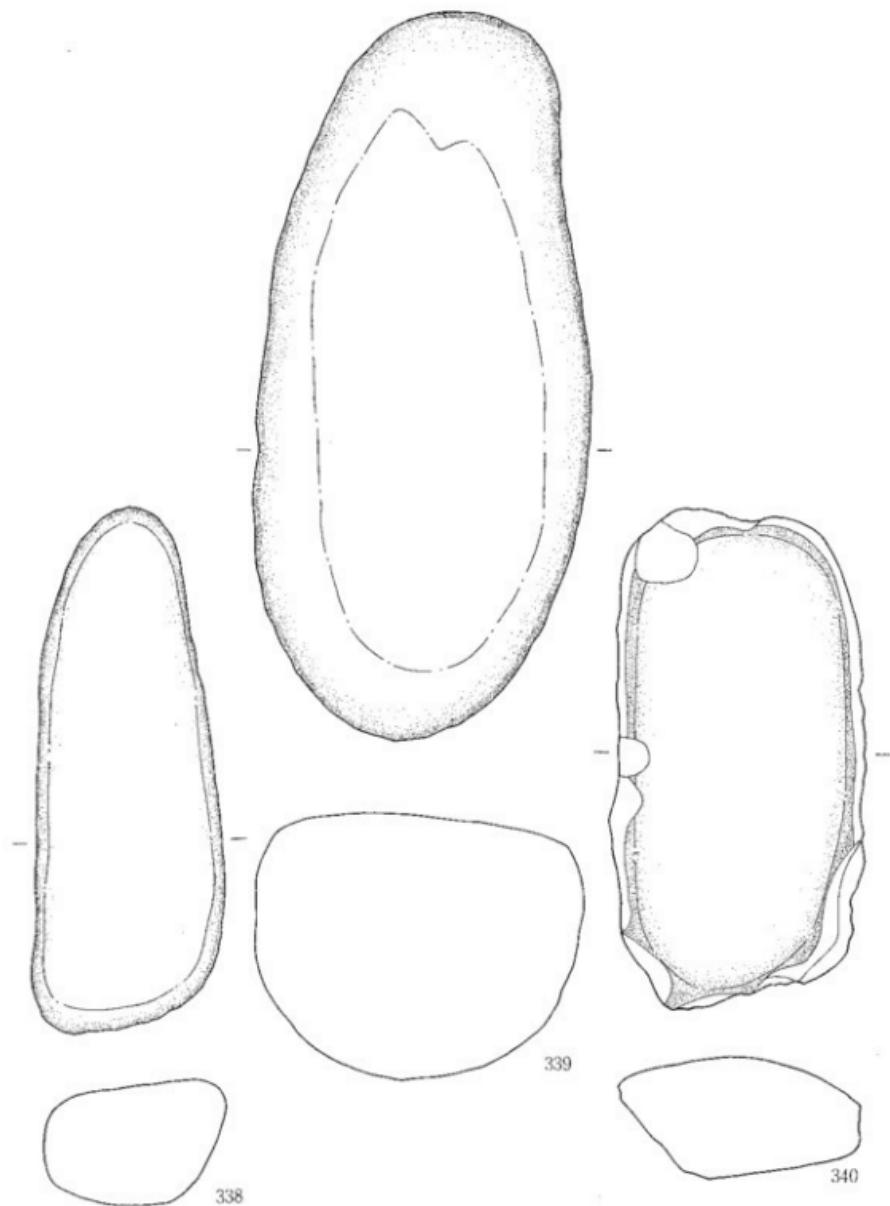


第114図 遺構外出土石器

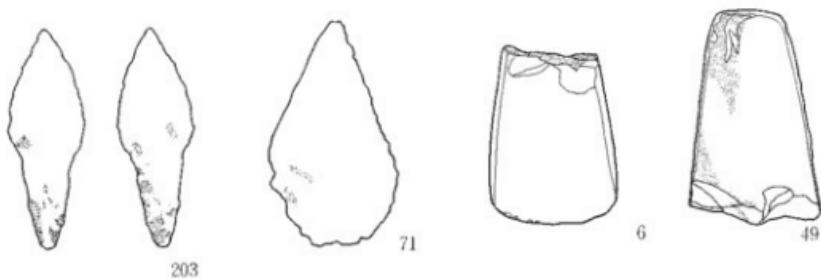
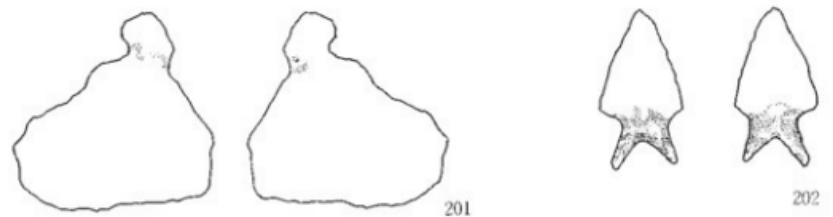
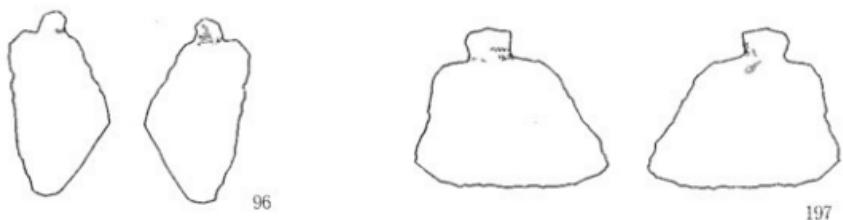
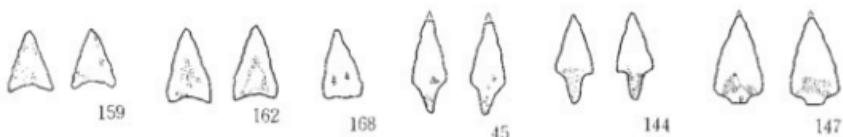


第115図 遺構外出土石器

0 10cm

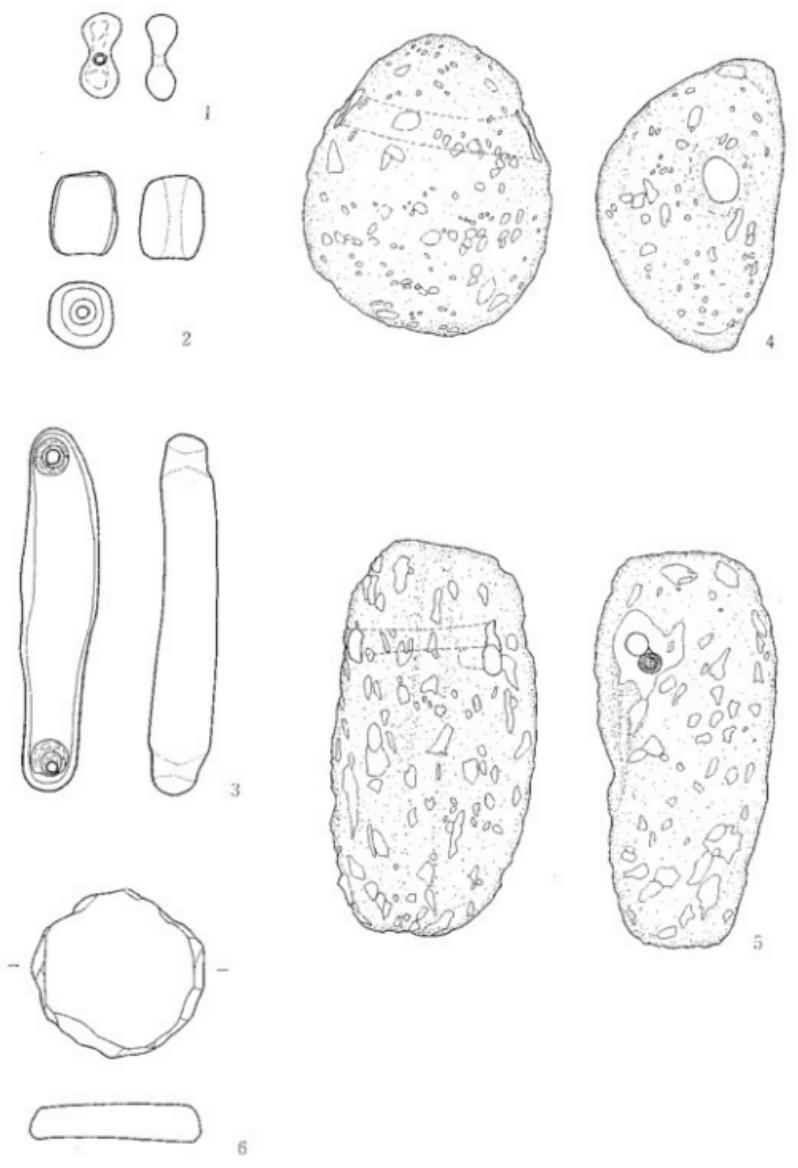


第116図 遺構外出土石器



第117図 アスファルト付着石器

0 1 5 cm

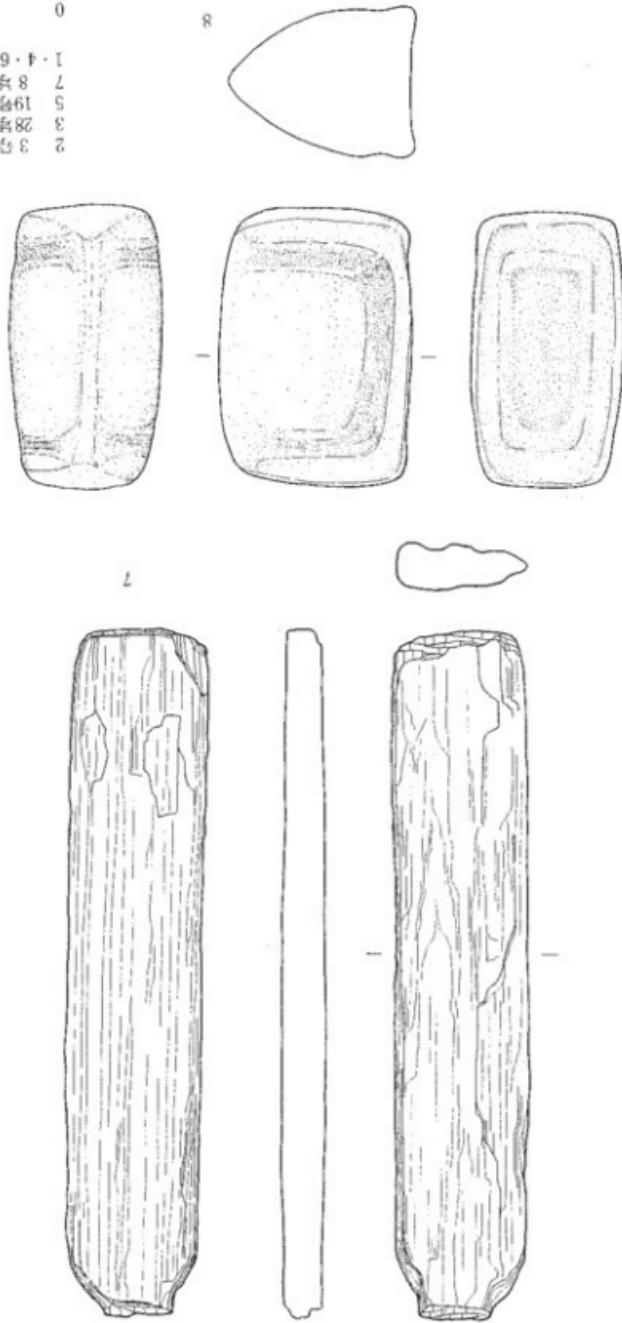


第118図 石 製 品

第119图 石器品

0 5 cm

- 1 · 4 · 6 · 8 镰刀
2 3号刮削器
3 28号刮削器
5 19号刮削器
7 8号刮削器
19号刮削器
28号刮削器
3号刮削器



まとめ

坂の上E遺跡の発掘調査面積は約5,000m²である。南と北の沢にはさまれた標高約40mの台地上に位置し、遺跡を東西に走る市道を境に北側の平坦面、南側の斜面に遺構が確認された。検出された遺構は、堅穴住居跡37軒、土塁122基、埋設七器遺構11基、柱2基、製鉄炉1基、炭焼窯1基、その他の遺構である。これらは縄文時代前期末葉から古代にかけての時期で、縄文時代中期末葉の遺構、遺物を主体に簡単に記述したい。

遺構について

住居跡は37軒検出されているが13号住居跡は大木8b式期であり、25・26号住居跡には柱は無く、柱穴等もはっきりしない(本報告では一応、住居跡として扱った)。したがって、他の34軒を対象にした。

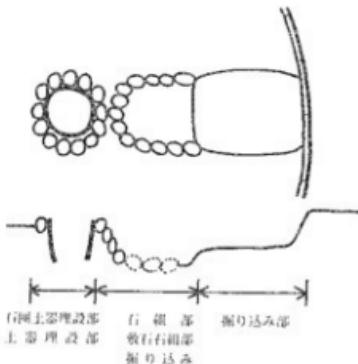
県内で縄文時代中期末葉の住居跡が検出された遺跡は、次の各遺跡である。県北部では、鹿角市「居井戸遺跡」¹⁾、「飛鳥平遺跡」²⁾、「北の林I遺跡」³⁾、「北の林II遺跡」⁴⁾、「上葛岡I・II遺跡」⁵⁾、「猿ヶ平II遺跡」⁶⁾、「御休堂遺跡」⁷⁾、「黒森山I・II遺跡」⁸⁾、能代市「大内坂II遺跡」⁹⁾、県中央部では男鹿市「泉野遺跡」¹⁰⁾、秋田市「下堤B遺跡」¹¹⁾、「下堤G・湯ノ沢B・野畠遺跡」¹²⁾、「湯ノ沢C遺跡」¹³⁾、雄和町「駒坂袋I遺跡」¹⁴⁾、「鹿野戸遺跡」¹⁵⁾、県南部では協和町「米ヶ森遺跡」¹⁶⁾、千畑村「内村遺跡」¹⁷⁾、増田町「梨ノ木塚遺跡」¹⁸⁾。県北10遺跡、中央8遺跡、県南3遺跡である。

住居跡の平面形と規模

平面形は円形のもの16軒、梢円形のもの12軒、隅丸方形のもの6軒である。規模は2.2m~7.3mで、小形、中形のものが大部分で大形は少ない。

炉

炉は、いわゆる複式炉であり、住居跡の規模に比例した大きさで構築される。石圓土器埋設部+石組部+敷石組部+掘り込み部からなり、それぞれの組み合せにより形態は10数種のタイプに分けられる。かの長軸線は住居跡の中軸線上にあり、位置は住居跡壁際に寄っている。概略で南西14軒、南東6軒、西5軒、南4軒、北西2軒と、南西側(壁)のものが多い。石圓土器埋設部、石組部、敷石組部を構成する礫は住居発発時に部分的に抜き取られているよう(規則性は認められない)、火熱を受け一部赤化した礫が炉周辺に散在する傾向がある。当遺跡における複式炉は「上原型複式炉」と呼ばれる形態の炉が主体であるが、前庭部と名付けられている住居櫛



複式炉 模式図

に統く掘に込みについては火熱を受けない部位とされ、今まで検出された報告はない。今調査で1例ではあるが15号住居跡の複式か掘り込みは火熱を受けた痕跡があり、必ずしもそれが用途を具現化できるものではないが、この掘り込み部の機能については課題とする所が多く、部位の名称も含め検討を要する。

前記の県内同時期の遺跡は住居跡の検出数は少いものの、炉については、県北部と中央、県南部で大別される様相を示し、県北部（鹿角周辺）では土器埋設はほとんどない。炉の系統、地域性の相違によるものであろうか。

柱穴

柱穴は4本が主体で、3～6本までの主柱穴がみられ、炉の長軸延長線上に主柱穴とは間隔の異なる柱穴をもつもの、複式炉の掘り込み部両側（疎寄り）に主柱穴より掘り方の小さい柱穴をもつ住居跡があり、その位置と関連して上層構造のあり方を考えねばならない。

他に、大部分の住居壁はほぼ垂直に立ち上かる。開溝のある住居跡は14・19・22号住居跡の3軒である。重複する住居跡は29号、34号住居跡のみで34号が新しい。

住居の配置関係については、各住居間に切り合いかほとんどないことなどから、ある一定時間に存在した住居群を抽出することはむずかしいし、が埋設土器および出土土器から住居群の変遷をたどれるほどの上器型式差は大きくない。小型、中形の住居跡が多い中で僅7m前後の大型の住居跡（19号と20号、28号と32号住居跡）がみられ、配置関係に共通性がある。いわゆる長方形大形住居跡ではないが、積雪地帯の各遺跡に検出されている大型住居の機能を果すものであろうか。家族構成等の要因によるものであろうか。

遺構は西側に展開していくと考えられ、ほぼ同時期の「坂ノ上A遺跡」と関連していると思われ、また、御所野台地に所在する「下堤B遺跡」「下堤G遺跡」「湯ノ沢B遺跡」「野畠遺跡」「湯ノ沢C遺跡」の各同時期遺跡との関連の中で把握されるべき事でもある。

遺物について

出土した遺物は、土器、土製品（土偶、三角形土製品、内利用土製品、スタンプ状土製品）、石器（石器、石錐、石斧、槍先状石器、撥形状石器、ヘラ状石器、搔器、削器、磨製石斧、打製石斧、石劍、石棒、くぼみ石、磨石、敲石、石皿、台石）、石製品（有孔石製品、円盤状石製品、岩偶、石冠状石器）等で、他に植物遺体（トチ、胡桃の炭化したもの）である。ここでは土器について簡単に述べる。器種は、深鉢形、小形深鉢形、浅鉢形、注口、双口土器等で、縄文時代中期末葉の深鉢形土器（片）がほとんどである。

土器について（縄文時代前期末葉～晩期、古代）

1 郡土器は縄文時代前期の土器を一括し、6類に分類した。1～4類は細い粘土紐貼り付け、連續爪形文、半隆起線文を施すもので大木6式期に比定される。5類は口縁部に撚糸、単輪絡条压痕、隆帶に刺突を施すもので円筒下唇式期に比定される。6類は木目状撚糸文の施される円筒下唇式

の土器である。

2類土器は縄文時代中期の土器を括し、5類に分類した。1類は口縁部に隆起線および撲糸圧痕を施し、隆起線の両側を撲糸圧痕で調整するもので大木7b式期に比定される。2類は沈線で調整された隆起線が円形文、渦巻文を作り出す土器、沈線で文様を作り出す土器で大木8b式期に比定される。13号住居跡が埋設土器（第41図19）も本類に含まれる。3類は粘土紐貼り付けによる円形文や沈線が施される土器で大木9式期に比定され、比較的古い段階のものと考えられる。4類は当遺跡で量的にも主体を占める土器で、地文施文後に沈線区画の磨消帯を施すもの、沈線区画内に縄文を充填させるもので、磨消帯は曲線的でバラエティーに富む。磨消帯を稜線で区画するもの、地文より浮き上がるものの、刺突文を加飾するものなどもみられる。器形は口縁部がやや外傾する平縁口縁で、胴部にやや膨らみのある深鉢形土器が最も多く、口縁および口唇部など、細部の作りに数種類の器形がある。大木10式期に比定され、比較的古い時期の坂ノ上AⅠ群土器が主体である。5類は條起線に2側1対の刻みを施し、隆起線間を磨消しするもの、隆起線に沈線が平行するもので、口縁部が複雑な作りをなす。本類は4類の新しい時期と考えられ、口縁部の作りなど、門前式期に比定され、後期初頭に位置づけられる可能性のある時期でもある。6類は口縁部文様帶および磨消帯に撲糸圧痕を施すもので、円筒上層C式期に比定される。

3群土器は縄文時代晩期の土器である。工字文、変形工字文の施されるもので、大洞A式、A'式期に比定される。

4群土器は須恵器甕の破片で、古代の土器である。

5群は前述以外の土器で、1類はカキ目文（条痕）を施す土器で、縄文時代後期の堀之内式土器に併行するものである。2類とした注口土器は、いわゆる貼縮・瘤付土器と呼ばれるもので、縄文時代後期後葉の土器である。6類は葉脈状の文様を施すもので、坂ノ上A遺跡のAⅡ群土器4類と同様であり、大木10式期の新しい時期のものである。以上、簡単に記述したが、今後、遺跡の総体的角度から、県内はもとより東北地方における縄文時代中期末～後期の編年の再検討が必要であろう。

製鉄炉について

秋田県内で製鉄関連遺構が検出された例は極めて少なく、能代市「中台遺跡」、「竹生遺跡」²⁰⁾にみられる程度である。

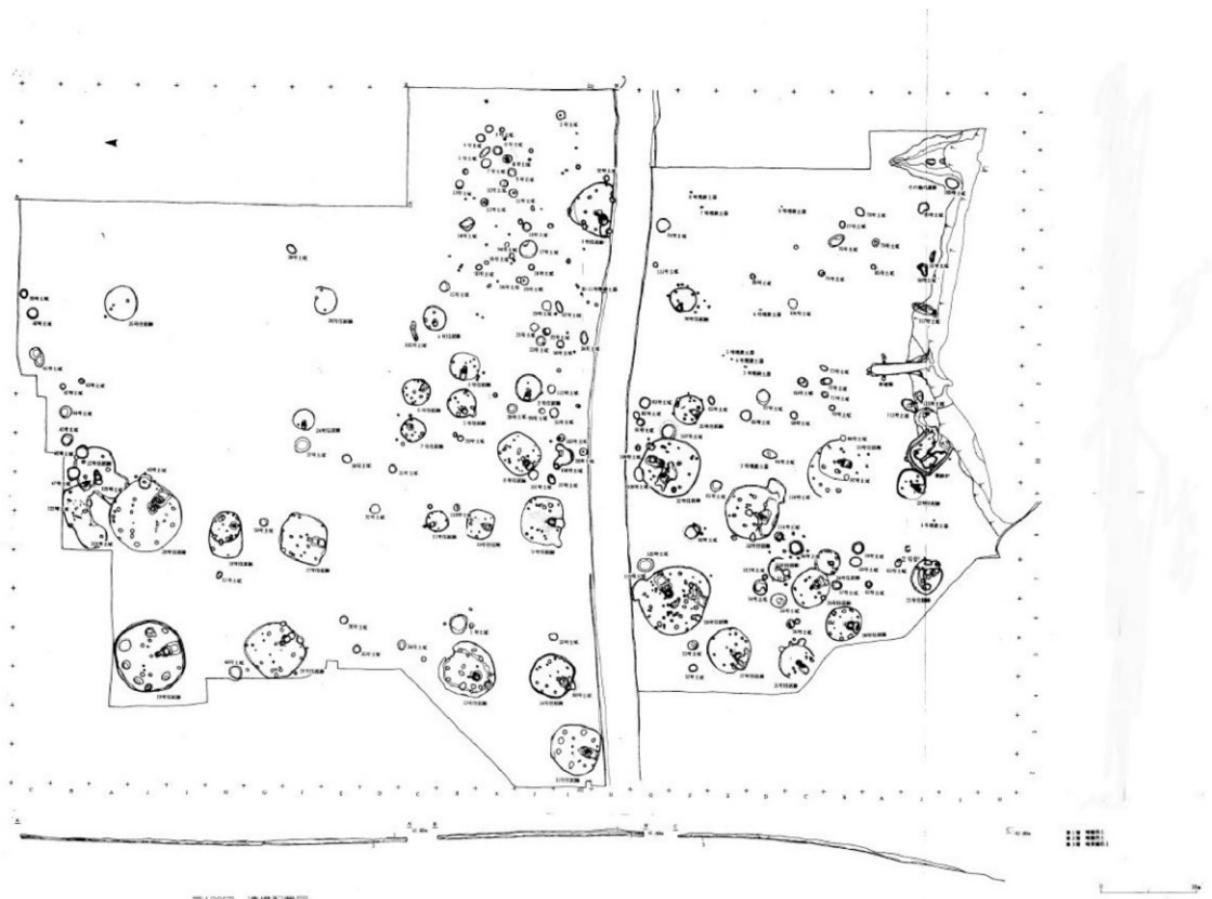
炉は半地下式堅形で、残存状態は良く、炉壁高は65cmほどで、奥壁、側壁とも内窓気味に立ち上がる。炉底は梢円形（40×80cm）を呈し、南側（沢）にゆるやかに傾斜（15°）し、「ハ」の字状の袖をもつ前庭部に続く。炉体層序は、砂質系で第1～3層までは砂質赤色土、焼土混入、第4～6層は硬質な黒色（炭化物混入）、青灰色シルトの堆積である。炉の北側平坦部に柱穴と考えられるビットと炭化物を多量に含む層、燒土を多量に含む層の溝（深さ20cm）が検出され、上層構造が想定されるがはっきりしない。前庭部、沢寄りにみられる礎は、段丘堆植物の疊層が露出したものであ

る。が紙をたち割った結果、炉底の厚さは3cmで、その下部は砂質土で約5cmの厚さまで熱により赤変していた。羽口は検出されていない。前記の通り、製鉄炉については県内では比較できる例は少ないが、最近は各地で検出され、それらを参考にすると、形態は半地下式堅形炉であり、いわゆる北陸型と言われるもので、炉体は円筒形シャフト²²⁾であるが、製鉄炉、東側に隣接する炭焼窯からの出土遺物は全く無く、操業時期はわからぬが、他遺跡同形態²³⁾等の検出例から推察すると、ほぼ9~10世紀の時期に該当するものと考えられる。昭和59年度は、当遺跡の南側台地に所在する「坂の上F遺跡」の発掘調査を予定している。製鉄関連遺構とそれに伴う遺物の出土が期待される。

註および参考文献

- 1) 秋田県教育委員会：「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ 居熊井遺跡」秋田県文化財調査報告書第78集 1981
- 2) 秋田県教育委員会：「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ 飛鳥平遺跡」秋田県文化財調査報告書第89集 1982
- 3) 秋田県教育委員会：「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ 北の林Ⅰ遺跡」秋田県文化財調査報告書第89集 1982
- 4) 秋田県教育委員会：「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ 北の林Ⅱ遺跡」秋田県文化財調査報告書第90集 1982
- 5) 秋田県教育委員会：「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ 上葛岡Ⅰ・Ⅱ遺跡」秋田県文化財調査報告書第90集 1982
- 6) 秋田県教育委員会：「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ 猿ヶ平Ⅱ遺跡」秋田県文化財調査報告書第99集 1983
- 7) 鹿角市教育委員会：「御休堂発掘調査報告書」鹿角市文化財調査資料19 1981
- 8) 十和田町教育委員会：「黒森山麓繩文期聚落群」1971
- 9) 秋田県教育委員会：「大内坂Ⅱ遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第51集 1978
- 10) 男鹿市教育委員会：「泉野遺跡発掘調査概報」男鹿市文化財調査報告書第1集 1976
- 11) 秋田市教育委員会：「小阿地 下堤遺跡 発掘調査報告書 下堤B遺跡」1976
- 12) 秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤G遺跡 湧ノ沢B遺跡 野畠遺跡」1983
- 13) 秋田県教育委員会：「秋田県立中央公園スポーツゾーン地域内遺跡発掘調査報告書 駒坂袋Ⅰ遺跡」秋田県文化財調査報告書第92集 1982
- 14) 秋田県教育委員会：「新秋田空港周辺遺跡 鷹野F遺跡 発掘調査報告書 鷹野戸遺跡」秋田県文化財調査報告書第38集 1976

- 15) 協和町教育委員会：「米ヶ森遺跡発掘調査報告書」 1977
- 16) 秋田県教育委員会：「内村遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第82集 1981
- 17) 秋田県教育委員会：「梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第63集 1979
- 18) 梅宮 茂 :「複式炉文化論」 福島考古第15号 福島県考古学会 1974
丹羽 茂 :「福島県における縄文時代中期の住居・集落跡研究の現状と問題点」
福島考古第15号 福島県考古学会 1974
- 19) 渡辺 誠 :「採集対象植物の地域性」 手刊考古学第1分 雄山閣出版 1982
渡辺 誠 :「雪国の生活文化と縄文文化の伝統」 津南町史資料編下巻
新潟県中魚沼郡津南町役場 1984
- 20) 秋田県教育委員会：「中台遺跡発掘調査概報」 秋田県文化財調査報告書第50集 1978
- 21) 秋田県教育委員会：「杉沢台遺跡、竹生遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第83集 1981
- 22) 調査期間中来跡し、製鉄炉を実見された穴沢義功氏の御教示による。
- 23) 飯島武治・穴沢義功：「群馬県太田市菅ノ沢製鉄遺構」 考古学雑誌55-2 1969
- 倉田芳郎 :「群馬・菅ノ沢遺跡の精鍊炉」 考古学ジャーナル70 1972
- 日本鉱業株式会社船川製油所：「大畠台遺跡発掘調査報告書」 1979
- 丹羽 茂 :「大木式土器」 縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ 雄山閣出版 1981
- 飯館村教育委員会：「真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅲ 日向遺跡」 福島県飯館村文化財調査報告書第3集 1982
- 相馬市教育委員会：「馬見塚遺跡」 福島県相馬市文化財調査報告書 1982
- 中村良幸 :「『複式炉』について一岩手県を中心として」 哺育風土記第7号 1982
- 日黒 吉明 :「作店のか」 縄文文化の研究8 社会・文化 雄山閣出版 1982
- 阿久津久・田中秀文：「茨城県花館ヨーマンタボ製鉄遺跡発掘調査報告」 人文論叢No.9 東京工業大学 1983
- 富山県教育委員会：「七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要」 1983



第120图 透模配置图

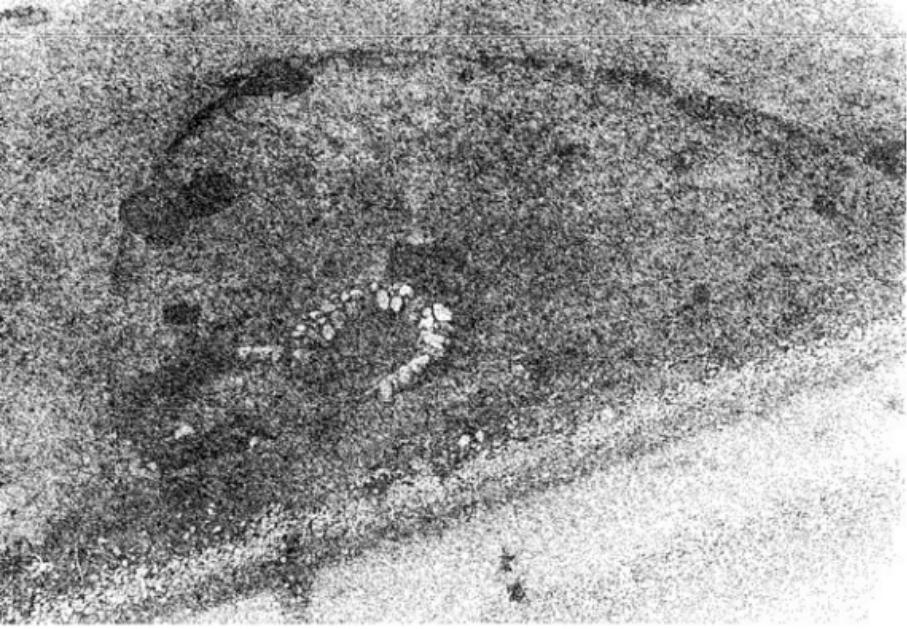


遺跡全景（北西→）

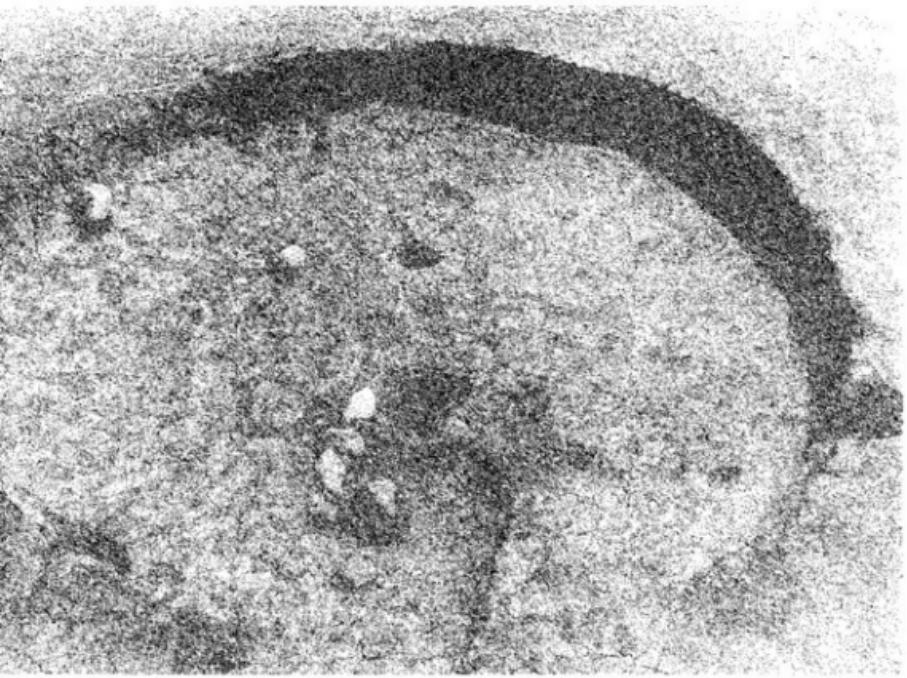


遺跡全景（南→）

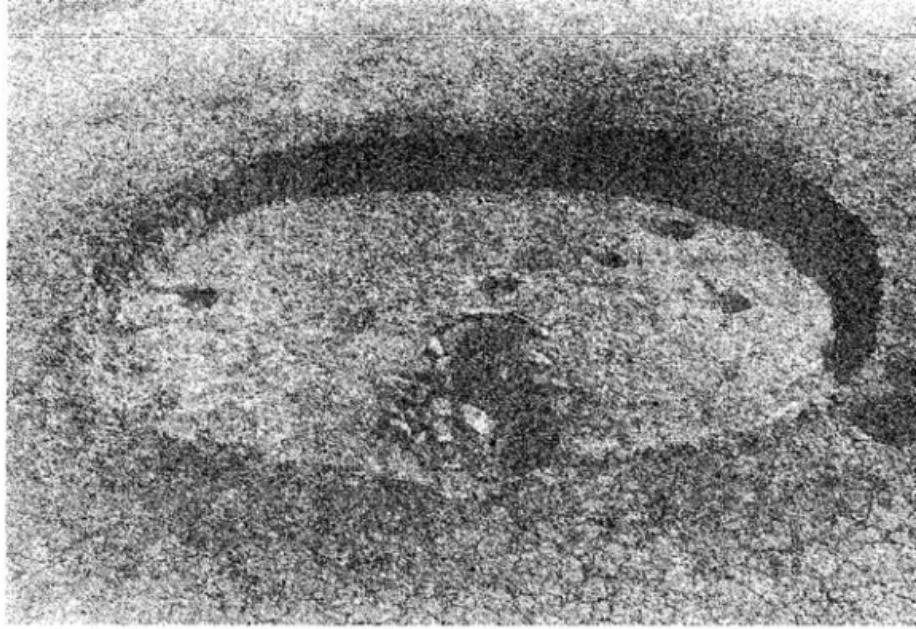
圖版1



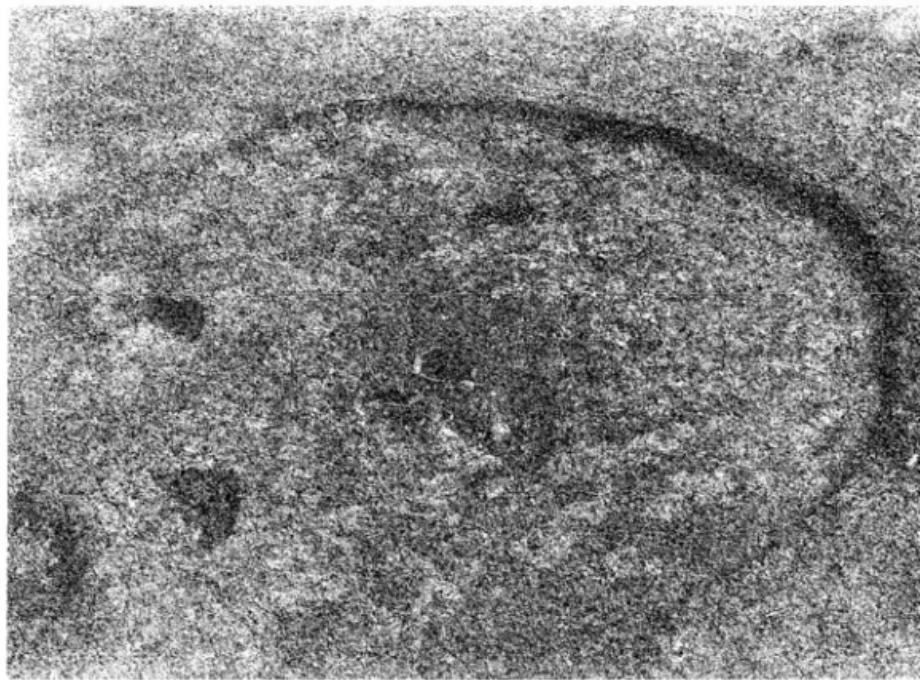
1号住居跡（南西→）



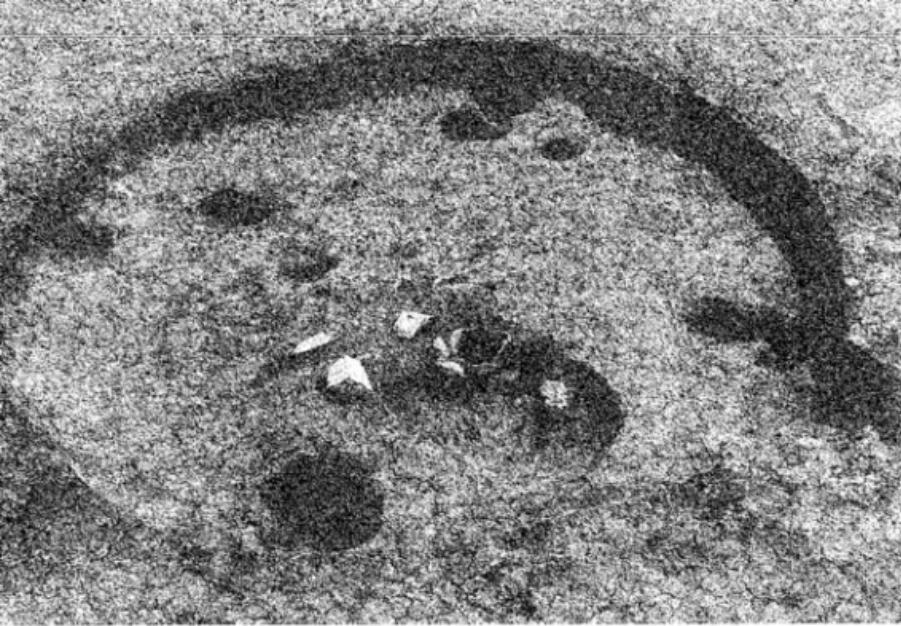
2号住居跡（西→）



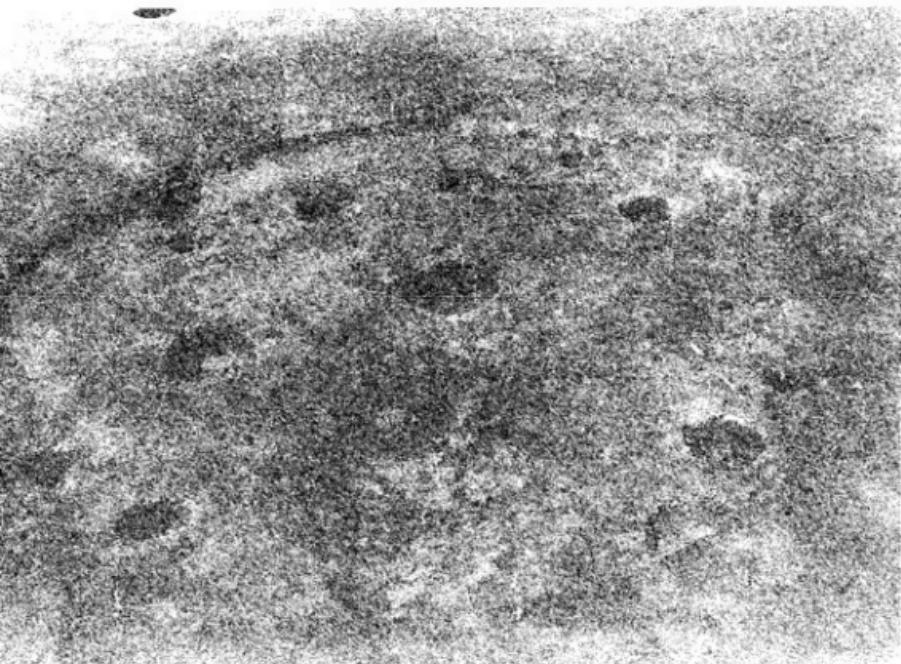
3号住居跡（西→）



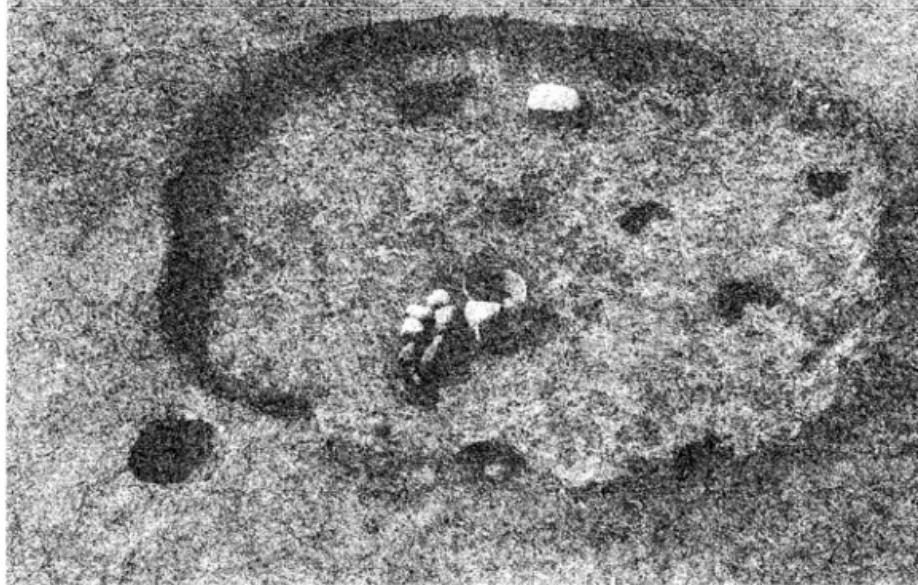
4号住居跡（西→）



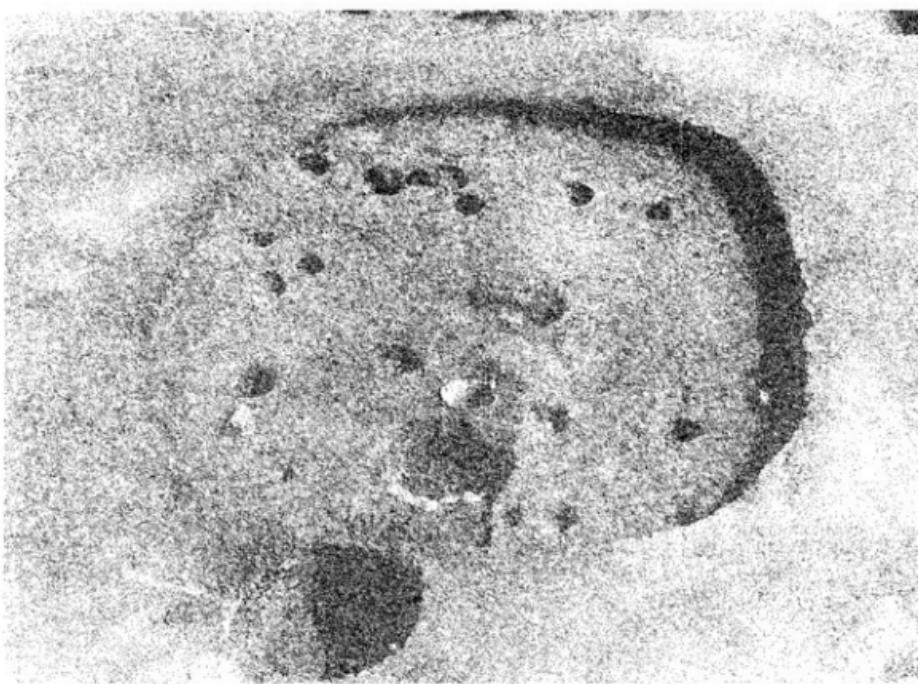
5号住居跡（西→）



6号住居跡（南東→）



7号住居跡（北東→）



8号住居跡（南西→）